

35-244

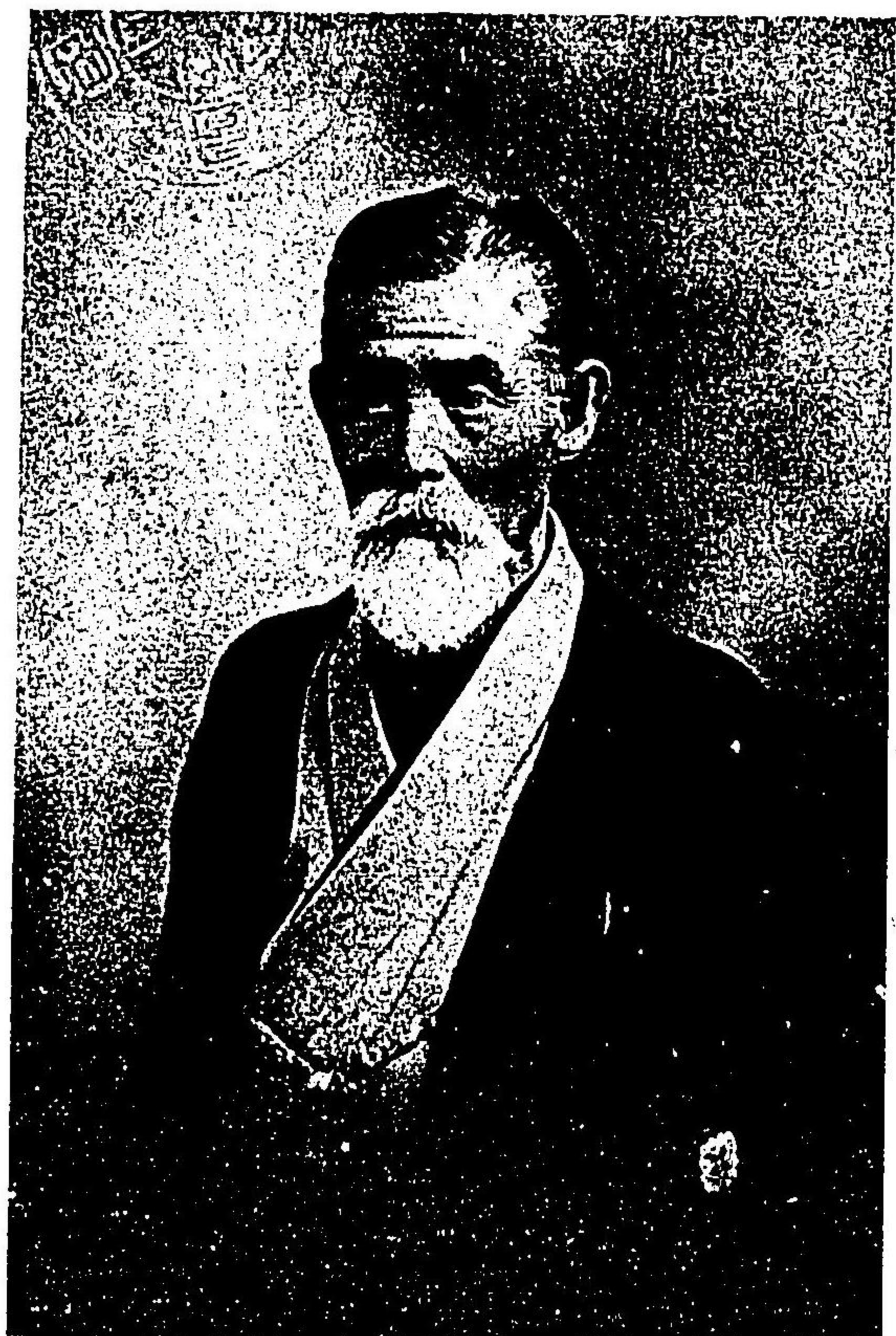
福地櫻癡作

櫻癡全集

上編

博文館藏版

45. 1. 15  
丙寅



子 齋

櫻癡先生、嘗て日報社にあり、予等に誨へて曰く、子等文を作るの法を知れりや、文を行ふは猶ほ兵を行ふがごとし。規矩外に整ひ、兵食内に饒かにして、而して後變化之妙得て窮むべし。故に吾子、能文の士とならんと欲せば、須らく潛心兵書を讀めと。

想ふに規矩とは結構布置のこと、兵食とは題目材料を言うのであらう。題材の饒富は博訪治取、之れを勉めば得られるでもあらうが、其の構布の整頓は、或は天稟の才ならでは得られないかと思はれる節もある。

先生の稿を起すに、一種の他に異なる點は、其の「表」を作られる事である。方野の格、これを聯ぬること數十、宛も其盤の目の如くして、之れに繋るに年月を以てし、日時を以てし、地名を以てし、人名を以てし、更に其の時日に起る事件の梗概を以てして、其篇の初發端より大團圓にいたる。愾く後、其の得意の才筆をもて電掣風馳の文を行ふ。眞に立地に數千百言、稿紙の飛ぶこと粉々として雪片也た似たりとは、決して誇張の言で無い。

予は兵を知らぬが、孫子に謂ゆる、分數、度量、虛實、變化之神とは、蓋し此等の妙を云ふので。亦た先生の、規矩外整、兵食内饒の言を實にしたものだと思はれる。

人或は、先生の辭句、太だ意を經ざるが如きあるを見て、杜撰と云ひ、疎漏と云ふ。なれど其れ等は先生帷帳の秘を知らざる者で、現に其の例證としては、本篇の開卷第一「あはれ浮世」の「年立」の如きが其れである。

僕、先生の教を受けてよりこゝに三十年、日に筆硯に親しむも孟浪徒だ糊塗を事とするのみで。除伍混亂、輻重窮乏の貧しい物ばかりを書いて居る。殊に此篇に對するに及びて、汗顔、慙愧に堪へざるものがある。

明治四十四年の臘月

門下老生 塚原靖識す

櫻癡全集上編

次 目

|         |    |
|---------|----|
| あはれ浮世   | 一  |
| 東鑑拜賀卷   | 二  |
| 小楠公脚本   | 三  |
| 關原譽凱歌   | 四  |
| 女俠駒形おせん | 五  |
| 二人袴     | 六  |
| 芳哉義士譽   | 七  |
| 扇の恨     | 八  |
| 平野次郎    | 九  |
| 求女塚身替新田 | 十  |
| 新作夜の鶴   | 十一 |

35-244

櫻癡全集 上編

福地櫻癡作

あはれ浮世

敍言

余が哀史の翻案に於ける一日の故にあらざるなり、回顧すれば、二十餘年前、歐州に官遊せしに際し、ユーゴー文豪の傑作を、巴里の識人に問ひしに、其人、余に告げて曰く、ユーゴーは現代文學の泰斗たり、而して其傑作は、レミゼラブル(哀史)を以て第一とす、某僧正、曾て哀史を評して、是れ實に福音の註釋なりと云へり、足下宜しく哀史を讀めと、乃ち直に一本を得て、卷を披きたるに、余が佛文を讀むに未熟なる、其全豹を知るに至らずして止めり、其後、吾友關直彦氏の歐洲より歸るや、哀史の英譯一本を携へて、余に贈れり、依て、之を通讀し、三嘆の餘、翻案して以て脚本を作るの意を起したり、然れども、翻案もと容易に非ず、之を脚本とする、最も難事たるを以て、

あはれ浮世

筆を採るに至らずして止めり。去年余病に罹りて、赤十字社病院にあること數月、その間、再び英譯哀史を讀み、遂に翻案の志を起し、病痊るの日を俟ちて、筆を下し、漸く此稿を作り、更に題して、あはれ浮世と名く。

目次

|     |             |        |
|-----|-------------|--------|
| 第一編 | 嘉永三年庚戌七月十九日 | 追放者の撤斥 |
| (一) | 神奈川宿棹鼻      | 出奔の密談  |
| (二) | 味里江宗伯門前     | 悪玉の悔悟  |
| (三) | 同奥座敷        | 窮民救助   |
| 第二編 | 安政二年乙卯十月二十日 | 阿牛の臨終  |
| (一) | 浦賀町役場門前     | 町年寄の自首 |
| (二) | 同役所         |        |
| (三) | 同奉行所白洲      |        |

|     |              |       |
|-----|--------------|-------|
| 第三編 | 安政二年乙卯十月二十一日 | 孤兒の救厄 |
| (一) | 程ヶ谷宿酒店       | 萬里の危難 |
| (二) | 相ヶ州淵崎        | 尼寺の潜匿 |
| (三) | 鎌倉松ヶ岡        | 義學の密議 |
| 第四編 | 慶應元年乙丑三月二十日  | 義學の密議 |
| (一) | 中村屋樓上        | 榎文の公示 |
| (二) | 向ヶ兩村         | 探偵の齟齬 |
| (三) | 兩ヶ國廣小        | 陷落の愚計 |
| 第五編 | 慶應元年乙丑三月二十日夜 | 義士の訣別 |
| (一) | 入ヶ谷穴熊家       | 唄女の義勇 |
| (二) | 根ヶ岸禮部住居      |       |
| (三) | 同庭中          |       |
| 第六編 | 慶應元年乙丑三月二十四日 | 有志の義舉 |
| (一) | 四ヶ谷香龍寺境内     |       |

第七編

(一) 同 表門前 阿榮最期  
 (二) 同 本堂前 義兵の解散  
 (三) 慶應二年丙寅二月十五日  
 鞠子邸書院 父子の對面  
 表座敷 黑白分明

年 紀

嘉永三年 庚戌  
 同四年 辛亥  
 同五年 壬子  
 同六年 癸丑  
 安政元年 甲寅  
 同二年 乙卯

第一編 神奈川

(發端)

第二編 浦賀

(米國使節渡來)  
 (橫濱條約)  
 (江戸大地震)

第三編 程ヶ谷、淵崎、鎌倉

同二年 乙卯  
 安政三年 丙辰  
 同四年 丁巳  
 同五年 戊午  
 同六年 己未  
 萬延元年 庚午  
 文久元年 辛酉  
 同二年 壬戌  
 同三年 癸亥  
 元治元年 甲子  
 慶應元年 乙丑  
 同二年 丙寅

第四篇 兩國橋邊  
 第五篇 入谷、根岸  
 第六篇 四谷香龍寺  
 第七篇 番町

(將軍家上洛)  
 (禁闕砲撃)  
 (長防處分)  
 (將軍家進發)  
 (終局)

(京都の大獄)  
 (神奈川開港)  
 (櫻田の變)

あはれ浮世

重要人物姓名

浦賀奉行  
 旗本の次男  
 旗本の隠居  
 旗本有志家參謀  
 旗本有志家隊長  
 旗本有志家  
 十九年長牢の追放者  
 浦賀町年寄  
 新徴組川途  
 行脚僧  
 神奈川住居の隠居  
 江戸町方の手先頭(探偵)

溝口伊勢守  
 在部新三郎  
 在部秋里庵  
 鞠子金之丞  
 瓜生寅次郎  
 高木伊織  
 悪王吉五郎  
 萬里連左衛門  
 禮部蘭之進  
 悪玉坊法師  
 味里江宗伯  
 蛇の道鬼兵衛

松ヶ岡寺男、有志家の小使  
 鞠子金之丞家來中番  
 程ヶ谷酒店主  
 入谷住居の窮民  
 悪漢  
 重太の部下  
 同  
 同  
 旗本有志家の召使重太伴  
 鎌倉松ヶ岡東慶寺住職  
 味里江宗伯の姪女  
 浦賀落魄の藝者

五分切林藏  
 小山林藏  
 有明重太  
 三好屋重兵衛  
 穴熊重太  
 闇黒牛松  
 ぶらり六之助  
 腰押兵衛  
 給仕五郎吉  
 松貞尼  
 處女阿半  
 六浦屋阿半

穴熊重太の妻  
 禮部蘭之進養女阿半の遺孤  
 柳橋の唄女穴熊重太の娘

悪婦阿六  
 處女阿節  
 月の屋阿榮

官員、武士、捕手、町人、百姓、下婢、奴僕等

第一篇

(嘉永三年庚戌七月十九日の事)

(一) 神奈川宿棒鼻(午後)

從是西 神奈川宿

と筆太に書たる棒杭を建たるは。江戸を發して京阪に赴くなる東海道  
 の神奈川宿に入らんとする處なり。此頃は此棒鼻に怪し氣なる酒食店。茶店など。軒を並べて  
 旅客を待てり。今しも此店先に出したる床几の上には、田舎武士三人。江戸の職人にて大山詣  
 の歸りと覺しきもの四人。此宿の遊人と見ゆるもの三人。所々に腰うち掛け。彼方には駕籠舁  
 二人。並木の松の根に佇みて客待顔をなし。街道の中央には蜘蛛等五人。大きな長持に。御  
 用書物と書ける小札を挿みたるをば擔ぎ卸して休ひたり。茶店の老婆は。遊じみたる箱根盆の  
 上に。幾個の茶碗を並べ。翻ると計りに澁茶を汲みて。蜘蛛等に與へて。後に。茶瓶を片手に

あはれ浮世



提て。

老婆「若い衆さん。モ一ツ飲で往なせエな。

8. 蜘蛛「雲州」ナニ。モウ澤山だ(と仲間の輩に向ひて)オイ棒組。モウ一息だから此意勢で。早く問屋場まで持込まうぜ。

蜘蛛内「ム、さう仕やう。だが甲州。いかに御用長持だと云ツて。籠棒に重量があるぜ。此長持を五割増で渡されちやア。蜘蛛も樂ア出来ねエのウ。

蜘蛛甲州「さうよ。賃錢が出ねエと思ツて。馬鹿に重エ物を入れやがツたぜ。是だからおらア。御役人はきつウ嫌エよ。

蜘蛛上州「其事だ。所で此中エ。何がヘエツてるだらう。鎧兜だの鐵砲だのが入れてあるのかなア。蜘蛛内「また上州の間拔が。馬鹿ア吐やがるぜ。今時公儀の御役人に。そんな心掛の良い武士があるものか。

蜘蛛雲州「遠エ無エの真中だ。大かた鍋釜か土溜でも。ヘツつてるだらうよ。蜘蛛内「上方へ往て。商賣でもする料見か手。道中でさんざツばら錢を取ツて。御用先でしこたませしめて。其上の内職に。小商賣まですりやア。抜目なしだぜ。

蜘蛛甲州「エ、がたくり棒を二本差て。御役人様だと威張ちらして。夫で腹の内穢さは。呆れて物が言へ無エぜ。

蜘蛛上州「それから見りやア。此方等は。稼いだ錢は。右から左に遣ツて仕まひ。背越の錢は四文だツて。持ツて居無エから。

蜘蛛江戸「御役人から見りやア。いくら立派だか知れやア仕ねエぜ。

蜘蛛雲州「江戸の云ふ通りだ。併し愚痴を云ツても始まり無エや。向ふは撥がせる身分。此方は撥ぐ身體だ。遅くならねエ中に持込まうぜ。

蜘蛛皆々「オウさう仕やうぜ。

と。五人の蜘蛛等は。彼の長持を撥ぎ上て。江戸(向の)方へぞ出行ける。江戸の職人等は。是を見送りて。

卯三郎「芳公なんざア。あの蜘蛛の上手だらうぜ。

三太「ヘン。卯三だツて。餘り持さツペエの。良方でも無からうぜ。

9. 芳藏「そこは三太が一番締てるなア。隣の叔母さんに頼まれた御詣錢まで。道中の買喰に。遣ひ込だ位だから。

八兵「そいつア呆れ返るぜ。そんな事をすりやア。汝。石尊様の罰が當るぜ。卯三「ヘン。卿だつて碌そつほうに。御詣錢も上げなかつた様だぜ。

10. 三太「馬鹿ア云ひねエ。此方やアちやんと。三文立派に上げて拜んだ男だ。(と云ひつゝ。爛徳利を出て酒食屋の小娘に對ひ) オイ姉さん。モウ一本つけてくんな。酒店娘「ヘイ、く、畏りました。

此方の床几に腰掛たる三人の武士は。

山川平角「ナント新五三殿。唯今の蜘蛛介どもが申せし詞。御聞召されたか。

穴山新五三「左様。いかにも耳を澄まして承はつたが。當時幕府の役人衆が。諸事萬事不埒を働くには。魂消申して御座るてなア。

竹中虎太「ア、人望を失つては。幕府も漸々。末路に成つたと見え申すが。シテ見れば是からが。我我豪傑。志を得る時で御座るぞ。

平角「それに付ても藩邸の大夫を始め。會計方の俗吏ばら。食欲非常の振舞は。幕吏に劣らぬ次第ゆゑ。

新五三「いかにも。平角殿の云はると通り。江戸着の上は實否を糺し。御同様に一議論。致さうで

は御座らぬか。

虎太「至極々々。御國許有志の意見。たけりたてと演述なし。彼奴等が肝魂を潰させると致さうか。平角「ム、愉快々々。然らば是より道を急ぎ。品川まで罷越し。

新五三「同所にて一泊いたし。寛りと英氣を養ふて。

虎太「明朝江戸へ。乗込むと致さうか。

平角「左様いたさう。(と茶店の老婆に對ひて) 我々が唯今相用ひたるは。團子が六本。餛飩が(と考へて) 虎太殿。貴殿は幾個召上られた。

虎太「拙者は餛飩が四ツ。

新五三「僕は。餛飩三ツに。團子が三串。

平角「中々參つたな。然らば老婆。團子が七本に餛飩が九ツ。茶代ともに其代料が。何程に相成るか。老婆「ハイ團子が二七の十四文。餛飩が九ツで。三九の二十七文。べて四十一文。お茶代は思召で

宜しう御座います。

平角「さうか。夫では茶代とも。四十八文遣はずぞ。

(と錢財布より。錢を取出して盆の上に置けば)

あはれ浮世

虎太「アイヤ平角殿。茶代は思召次第と申すからは。七文はチト。過分では御座るまいか。

新五三「何さま。虎太殿の云はると通り。ナント平角殿。茶代は一人前一文ヅ、合せて四十四銅。

相造はして相當かと。存じ申すが。平角「節減の御説は尤なれど。武士たるものが。一旦出したる金銭を。相減したと申しては。我一藩の大耻辱。この所は此儘に。

虎太「然らば是非に。及び申さぬ。

新五三「枉げて承諾。いたすで御座らう。

松樹の下に憩ひ居たる駕籠昇は。此武士の前に來り。躡躑りて。

駕籠藏「エ、モシ旦那様。是から品川まで。御駕籠を三挺。お召しなすツて。下さいませんか。

平角「随分乗るまいものでもないが。品川まで三挺で何程だ。

駕、吉「御無理は申しませんが。一挺が二朱づよ。三挺で一分二朱。おはづみなすツて下せエまし。

駕、熊「その代りに。御蠟燭代も。お酒手も。別に戴きませんか。どうぞお願ひ申します。

新五三「イヤ〜。一挺一朱とは方外の直段。一挺四百文。三挺一貫二百文なら。格別の詮議を以て。

乗て遣らうが。武朱づよと申では。採用いたすこと罷成らぬ。

駕、吉「だって御前さん。品川まで御定法が五里で。繩外を入れやア。たッぶり六里。それにまた

川崎手前で。日が暮れますもの。四百ちやア可愛想で御座います。

駕、熊「せめて七百づよ。おくんないまし。思ひ切ツて急ぎませ。

虎太「イヤ〜。茶代すら節減いたす評議もある中。駕籠などには贅澤千萬。併し新五三殿の申さ

るる如く。四百文なら兎も角も。其上は一錢たりとも。遣はす事罷り成らぬ。エ、煩い駕籠昇め

らが。(と武士の威光を見せて。叱り付けば。駕籠昇の兩人も。ムツと成りて立上り)

駕、吉「七百で否なら止ませエ。錢は其方の物。駕籠は此方の物だ。乗らなけりやア。乗せ無エ分

の事だ。駕、熊「べらほうめ。空威張に威張られて。間尺に合ふものか。七ッ過に。神奈川から品川まで。四

百の駕籠なら。此方が買て乗てやらア。

駕、吉「オイ熊や。そんな分らずやを。合手にするない。貧乏神を乗せた日にやア。大事の駕籠に怪が附くぜ。

駕、熊「さうよ。田舎武士の客高が移ると。商賣の邪魔にならア。(と此輩の習風とて。腹立つまゝ

あはれ淨世

に悪口して。立去るを見て。此方の武士は。はたと怒りて。床几を離れ。

虎太「コリヤ待て駕籠昇。田舎武士だの。貧乏神だのと。誰に向て申述べた。

駕、吉「誰でも無エ。お前等の事だ。

平角「おのれ下腐め。言はせて置けば緩急至極。無禮の詫言。申すとあらば兎も角も。

新五三「此儘にては差置かぬ。覺悟いたせ。(と三人が張臂して。刀に反を打てば)

駕、吉「切れるものなら切て見ろイ。憚ながら此方等の。身體にやア骨があるぞ。

平角「返すくも憎つくき雑言。用捨はならぬ。(と立掛る。駕籠昇も力杖を得ものとして。向はんと擬す。四人の職人は中に入りて押隔て。芳藏。八兵衛は武士をなだめ。卯三郎。三太は。駕籠昇を鎮め。武士に對ひて)

芳藏「マア御腹も立ませうが。取るに足らねエ。駕籠屋の事で。御座えますから。

八兵「どうか。御勘辨なすつて。下せエまし。

平角「其積りではあるなれど。餘りと云へば法外千萬。

新五三「眞二ツに致す所存だ。

駕、吉「エ、何が眞二ツだ。洒落た言をぬかしやがるな。

平角「又しても。武士に向て其惡態。  
駕、熊「へん。武士も無エもんだ。鈍りぶしが呆れらアう。  
新五三「うぬ。憎くい奴めが。  
卯三「これさく。若エ衆。マア黙つて居て。我等に任せねエ。  
三太「相手が悪いや。鬨争ちやア損だからよ。  
芳藏「及ばすながら。僕等が。御詫言を致しますから。  
八兵「それに免じて。御勘辨を願ひまする。  
三人の武士は。行掛りではあり。諸人の見る前ではあり。威ばつては見たれども内心頗る憶せざるにもあらざれば。此調停をよき潮なりと思ひて。  
平角「用捨すべき。奴等ではなけれども。折角に貴殿達の詫言ゆる。  
新五三「今日の處は武士を枉けて。勘辨の致し遣はすが。向後は急度慎む様。  
虎太「慥と請合ひ召さるとか。  
芳藏「そりやア急度。御請合申上ますに由て。  
八兵「幾重にも。御勘辨を願ひまする。

平角「然らば。勘辨いたすであらう。  
新五三「サア参らうか。

16.

虎太「左様いたさう。(と力身かへって。東の方へ去りたりけり。是を見送りて)

駕、吉「旦那。大きに有難う御座いました。

駕、熊「お蔭さまで。無事に済ましたが。貴君方へ。御心配を掛まして。

駕、吉「誠に以て。相済ませんで。御坐えました。

芳藏「何の。相済ませんも何にも。ありやア仕ねエよ。

八兵「それに卿等が。聞いてくれたので。

卯三「我等の顔も。立つたと云ふもんだ。

芳藏「併し。つまらねエ事で。卿等も。暇を潰して。困ったであらうに。全體なら。一寸一杯飲まするが。夫で無けりやア六郷まで。乗つてやるのだが。駕籠にやア乗たくも無し。(と同行の輩に相談して。財布より金二朱取出して。紙に捻りて) コリヤほんの。少しばかりだが。若エ衆。これ一杯のんでくんな。  
と與ふれば。駕籠昇は。互に顔を見合て。

駕、吉「旦那。これをお貰ひ申ちやア。濟みません。本統なら我共が。一升買はにやア。成らねエ所で御座えますから。

駕、熊「そんな堅ツくるしい事を言はねエで。マア取つて置てくんねエな。

駕、吉「デモお前さん……。

卯三「貰は無エと言はれた所で。了得出した物を引込ませも出来ねエから。

三太「不肖だらうが。受て貰はうよ。

駕、吉「それぢやア。折角の思召ですから。御辭退なしにお貰エ申します。

駕、熊「どうも有がたう御座えます。(と厚く禮を述べて。西の方へ出行きたり。)

芳藏「オイ爺さん。勘定してくんな。

酒店爺「へい有がたう御座います。御酒とお肴で。七百八十二文で御座います。

芳藏「ム、それぢやア。二朱置くよ。取つてくんな。

17. 酒店爺「ハイく。お釣が六十四文に成りますから。唯今差上ます。(と釣銭を勘定する)

八兵「ナニ釣やア宜よ。お茶代だ。

酒店爺「ありがたう御座います。へい御機嫌よろしう。お静に居らっしゃいまし(と。小娘と俱に挨拶)

あはれ浮世

18. 撈するを。後に聞なして。此輩は江戸の方へと赴きたり。最前より是を傍觀したりける。二人の遊人は見送りて。

18.

四郎藏「エ、金太。あの衆は江戸ッ子だけに。勇みだなア。

金太「さうよなア。夫に引替て。あの田舎武士には。愛想が盡たぜ。愈々喧嘩に成つて。駕籠屋が負さうに成つたら。武士の向ふ脛を。ぶッ拂ッて遣らうと思つて。我ア内々で。此通り。天秤棒を。足の先で。搖寄せて置たぜ。(床几の下より出して見すれば)

四郎「あはよは。また金太が相替らす。喧嘩の彌次馬に。出たがッて居らア。夫にしても。爺さん此海道で武士が。威張らなけりやア。卿等も商賣が仕いよがネ。

酒爺「この東海道で。武士が威張ら無けりやア。お前さん。日本一の商賣場所。是に越した所は。ありやア仕ませんよ。

斯る所に。西の方より。程ヶ谷の聞ゆる悪漢にて。穴熊と異名を取りたる重太。羽織衣服。ことに引つくるひて。其部下の子分たる。闇黒牛松。ぶらり六之助。腰押兵太と云へる三人の者を引隨へて。傲然として出来る。牛松は四郎藏金太を見て

牛松「ヤア其所に居なさるのは。四郎君に金君じゃア無エカ。青木町で我等やア。卿等を搜したぜ。

四郎藏「さうか。シテ何ぞ用でも有つたのか。

六之助「外でも無エが。是りやア程ヶ谷の重太親方。我等の親分だから。一寸近づきに成つておくんなせエ。

金太「ム、。噂に聞た程ヶ谷の。重太君かへ(と四郎藏と俱に。慇懃に初面會の挨拶をすれば。

重太「お初にお目に掛りますが。私ア重太と云つて。つまらねエ男ですが。今度程ヶ谷の宿の宿の中程に一寸した普請をして。此二十五日に。店開きの眞似事を。仕度と思つて居やすが。兄貴たち。遠方で濟まねエけれど。當日にやア外聞旁々だ。一寸来て。一杯やッておくんなせエな。其お頼みに。態々出掛けて参エりました。何分お頼み申ますよ。

四郎「ム、。夫じやア兄貴は。旅籠屋でも。お開きなさるので御座いますかね。

重太「ナーニ旅籠屋と云ふ程でも無エが。有明と云ふ即席料理で。居酒屋同前さ。併し奥にやア。小ぢんまりした所も。こせエてあるから。遊び所には持つて來いだ。どうか兄貴たち。最負にして

19.

おくんなせエ。

金太「どうして。僕等が。最負と云ッちやアコッ恥かしいが。お店開きの當日は云ふに及ばず。時たま出まして。お厄介に成りませうよ。

あはれ浮世

重太「そりやア有がてエ。必らずお待ち申して居ますぜ。ヤレ〜此で兄貴たちに逢ッて。是でやツと氣が済むだ牛松。六之助。兵太。大きに御苦勞だツた。お蔭で神奈川は残らず吹聴の。披露が出來て忝ねエ。マア一服仕やうか。オイ婆さん。茶一ツくん。その次手に。一本つけて貰はうか。  
 (と重太は牛松。六之助。兵太と俱に床几に腰うち掛けて。煙草くゆらして居たりけり。  
 折ふし江戸の方より一個の男子。頭の月代は長く延び。顔は蒼白く。而瘦せて。眼おち窪みたるが。身には垢浸たる木綿の單衣を着し。木綿の三尺を帯に締めて。裾を引寄せ。素足に草鞋を穿き。何にも勞れたる状にて。此棒鼻近くに來るものあり。是即ち悪玉吉五郎なり。吉五郎は遙に酒飯の招牌を見て。やれ嬉しやと悦びつよ。急ぎ足にて駈來り。會釋も無く重太等が腰うち掛たる床几の前に立止まり酒店の爺を呼びて。  
 吉五郎「オイ爺さん。何でも構はねエ。有合で可から。飯一杯。早く喰はせてくん。 (と息せき言へば。

酒爺「ハイ宜しう御座います。マアそツちの方で。少し待つて居ておくんなさいよ。去れども。店前の床几。みな占められて。腰かくべき所もなければ。吉五郎は其儘に突立ち居たり。重太は。吉五郎の容貌を見て眉を聚め。さも穢らはしと云はん計りの顔色をなして。

重太「オイ。其所にさう突立て居られちやア迷惑だ。どツちかへ寄つて貰ひませうか。(と輕侮するが如き口調にて言へば。氣逸の吉五郎ムツと仕たれど。怒を忍びて。

吉五「御邪魔をして濟ません。御免なせエ。腰を懸ける所が無いから。つひ御妨を致しました。(とあたりを見廻せど。腰うち掛べき所も無し。四郎藏金太は。床几の端をすかして。

四郎藏「此が明て居るから。お掛なせエ。  
 吉五「ありがたう御座エます。(と腰を懸け。諸人が皆煙草を吸ふを見て。頻りに羨しく成りて)

オイ爺さん。おいらア急いで煙草入を。忘れて來たが。後生だ。一服振舞ツてくんねエ。酒爺「ハイ〜煙草かネ。手切だから。好は有りましたねエよ。(と煙管と煙草壺とを渡せば。

吉五「ありがたエ。(と三四服續けて吸ひて) 久し振で煙草を吸たが。イヤ此味ア忘れられねエ。餘人は心付かざれど。重太は此詞を聞きて。益々吉五郎の人物に。不審の思ひを成したりけり。

吉五郎は四郎藏に對ひて。  
 且那。モウ何時で御座エませう。

四郎藏「さうさネ。今しがた大徳院の鐘が鳴つたから。モウ七ツ過だらうよ。  
 金太「シテ卿。何所から來なすツたエ。

吉五「へい今朝江戸を立つて参りました。

四郎「さうかへ。夫じやア京阪へでも往なさるのか子。

22.

吉五「ナニ。京阪と云ふ譯でも御座エませんが。まづ戸塚から先の方へ。往く積りでエす。

時に江戸の方より。紺地の單衣。紺脚半にて。半合羽を肩に掛け、身輕に出立たる旅装束の男

子。あたりに眼を配りて來れるは。問はでも知れたる江戸の親分株（即ち江戸町方の手先にて。

蛇の道と異名を取つたる。三河屋鬼兵衛と云へる探偵なり）鬼兵衛は樹蔭に忍びて。酒屋の爺

を招ぎ。呷き語れば。爺は愕きて立戻り。牛松へ傳へ。夫より重太へも。六之助兵太へも移し

傳へたり。爺は支度を成たる膳部を持ちながら。吉五郎に對ひて。

酒爺「御客さん。誠にお氣の毒だがね。御支度は此通り。出來ちやア居ますが。御断り申ますから。

直ぐ此を出て。御貫ひ申ませうよ。

と氣の毒さうに謝絶すれば。吉五郎は不審を爲して。

吉五「何で断るのだへ。其通り。喰はれる許りに。支度を仕て置ながら。断ると云ふのは。得躰が

分らねエぜ。どうした理なんだい。

酒爺「ナニ。別に斯した理と云つても有りましねエが。貴君に御飯を賣りましたやア。少し此方

に困る事がありますから。御腹も立ませうが。どうぞお立なすつて下さいまし。

吉五「なんの。断られたからと云つて。腹も立てねエが。爺さん。卿乙ウ言ふじやア無エか。ム、

何か。おれが此通り。見ツとも無エ状だから。飯の錢が。あるめエと云ふ心配か子。オイ氣遣エ

にやア及ばねエや。飯の錢ぐれエは。此通り持て居るから。案じなさんな。

と懐より財布を出して見すれば。

酒爺「ナニ御錢が無からうと。云ふのじやア御座いませんが。

吉五「無けりやア早く喰はせてくん。見せて置くのは殺生だぜ。實はおいら今朝ツから。まだ

一度も飯に有附ねエで。腹が減て持切レねエよ。

と酒店の爺が持たる膳部を取らんとす。是を見て重太は押隔てよ。吉五郎を突退けて。

重太「何をするのだ。此爺が卿に飯を喰はせるのを否がつて。断ると云ふのは。何でも無エ。卿が

半ツ拂エだと。知れたからの事よ。

と憎々しく言へば。吉五郎は憤然として。

吉五「何だと。おれが半ツ拂エだと。

重太「さうよ。此東海道の新奈川で。隠し立をしても通ら無エぜ。汝が長半を出て。江戸お構エを

あはれ淨世



喰ッたと云ふ事ア。其面に書てあらア。

吉五「ム、其長半の年期が濟で。江戸拂になりやア。夫がどうしたい。

重太「だからよ。其な穢らはしいものを客に仕て。飯を喰せちやア。此店に疵が附から。斷つたのだ。

吉五「ム、。

重太「其理が分つたら。サア早く出て行け。エ、きりきり出て。うせやがれ。

吉五「大きにお世話だ。汝が云はずとも。此方が勝手に出て行かア。

重太「何をグズくぬかしやがる。出て行かなきやア。なぐり倒すぞ。

吉五「ふざけた事をぬかすない。投るなら投ッて見る。百姓野郎めが。

重太「ナニ此泥棒野郎め。

重太を光として。牛松六之助兵太立掛つて罵りつよ。吉五郎を突出さんとす。吉五郎も此恥し

めに忍びず。四人を敵として争はんとするを見て。四郎藏金太は。其中を隔て。吉五郎に對ひ

四郎「コウ兄イ。腹も立だらうが。仕方が無いからおとなしく。此を出て行きなせエな。

金太「あの衆を相手に。喧嘩を仕た所が。卿の損だらうぜ。此は我等に任せて。さう仕なさるが良

吉五「エ、有がたう御座エます。ナニ。私の方で喧嘩を仕掛た譯でも無エが。餘まり悪態を吐や

がるから。つい腹が立て

四郎「分つたよく。分つたから。早く行きなさるが良や。

と慰むれば。吉五郎も合點して。悄然として。此酒店を去り。西の方へ行掛る。是を見て。

重太「あの様を見るイ。いけッぶてい泥棒じやア無エか。

牛松「泥棒たけぐしいとは。あの事だぜ。

六之助「ヤイ泥棒。ざまア見やがれ。誰が汝見た様な盜賊に。飯を喰はせる家があるものか。

兵太「今に道中で。くたばつて死でしまへ。

吉五「何をぬかしやがる。

と腕まくりする。重太等ナニと同じく立掛るを。四郎藏金太押隔てよ。遂に吉五郎を立去らしむ。

(道具廻ル)

(三) 味里江宗伯門前 (薄暮)

神奈川の臺の上に、往來に傍ひて風流なる一構あり。眞竹の塀を打廻して。其中程に梅軒門を設け。門は常に鎖して俗客の爲に開かず。此構こそ此邊にて世々豪家と知られたる某の隠居。味里江宗伯翁の幽棲なり。翁は中年にして。家を其子息に譲り。世塵を脱し。思ひを心學に潜め。靜に茶烟に養へる隱者なり。其家の畔に一の井戸ありて。清水を出し。七月の殘暑も。爲に其熱を消するの思ひをなせり。白地に彩色もて菊花を繪きたる扇を扇して夕日を遮りつ。此所にぞ來れるは。廿を三ツか四ツばかりも越したる美男子。御召縮緬の單衣の裾長なるを着て。御納戸博多の帯を少し腰下りに結び。黒色柄に蠟色鞘の細身の大小を横たへたるは宛然たる風流才子。これ江戸の旗本。在部淡路守が次男。弱冠の頃より遊蕩に耽り。其父卒去の後。益々懦弱に陥りたるを以て。勘當せられ。其知行所の此近くにあるを便りて。數月以來滯留せる在部新三郎なり。新三郎は柳の木蔭に佇みて。

新三郎「大層涼しく成つて來たが。モウ彼是七ツ半だらう。半と云やア。阿半はどう仕たであらうな。夫に附けても可笑は余の身の上。花の北里や柳橋。ふさげ散した其報い。御直參には不埒な

身持と。眞目な兄貴に勘當うけ。エ、そんなら儘よ東海道。五十三驛色修行。花の旅寐の草枕。こいつも洒落た境界だど。江戸を出てから半年餘り。思はず此で滯留の。間に見初めたあのお半。器量なら姿なら。言分のない箱入娘。江戸で育つた色妓の。摺ッ枯しに比べて見りやア。世間知らずの田舎風。野咲の花が尊いのさ。(と塙根に咲ける夕顔の花を見て)

ア、綺麗だ。見事に咲て居るなア。成ほど色と花とは新らしいに。限ると云ふが。誠その通り。咲てしまへば直に萎んで價値は無いもの。花は一時色は一月。油が乗つたら切上げて。又乗替るが。戀の奥の手色師の秘傳。そりやアさうだがあのお半。大名高家の御部屋に仕ても。耽く無い顔容。それで余に惚て居るとは。乙なものだね。

輕薄極まる旗本風。あたりの石に腰うち掛け。扇つかひして居たりけり。宗伯が家の勝手口より。片手には栗山桶を提げ(桶の中には柄杓を入れたり)片手には釣瓶を提げて出來れる處女は。新三郎が噂したるお半なり。十七歳の花盛り。粧はねども天性の美麗は。噂よりも勝りて艶かなり。お半は新三郎を見て。

お半「ヤア貴君は在部様。

新三郎「新君と云ひねエな。苗字なんぞ呼で。他人らしいや。

あはれ浮世

とお半が手を取りて。

何だッて此暑いのに。巢立の小鳥見た様に。ブル／＼と震ひて居るのだへ。

とお半「デモ誰か見ては居ないかと夫が心配でく。」

と彼方此方を見廻して。

何だッて此様に。人目を忍び。気兼苦勞をする事で。御座りませう。

新三「その苦勞も少しの中。今に樂をさせてやるよ。時にお半嬢。卿この間から。是非とも余に。相談し度い事があると。云ッて口に出しかねて。何だかむすく仕て居るが。其相談と云ふのは何だへ。氣を揉ませずに話してくんな。

お半「サア其お話と云ふのは。新三郎様。私や此五月ほど。月の汚れを見ませぬから……と恥らひて顔を隠せば。新三郎も驚きて。

新三「エ、夫じゃア愈々懐妊に……」

お半「新三郎様。私やどう仕ませうぞいなア。

と新三郎に取付て。唯溜々と泣ばかり。

新三「ナニ心配する事は些とも無い。さう成たら表向き。余が女房にする分だが。お半嬢。卿なつてくれるか。

お半「エ、私し見た様な田舎娘を。貴君の奥様に。

新三「仕やうと云ふのよ。余だッて瘦ても枯ても旗本だ。親父が遺言して置た通り。兄貴の知行を分地して。別家をするか。但しは株を買ッて貰ふか。一ツに一ツ。さうなりやア。余は殿様。卿は奥さま。大丸詰の御引摺。誰ぞ来や。何をくりやと。腰元女中は使ひほうだい。頭のもので着物でも。五分でも透ねエ下谷風。言ふ日が出るほど。贅澤させるぜ。

お半「そりや本統で御座りますか。

新三「何の嘘を吐ものか。それでお半。卿承知か。

お半「ハイ。

新三「承知なら。今夜大徳院の四ツを合圖に。卿こへ出て来ねエ。駕籠は余が持たせて来るから。直に此を欠落し様せ。

お半「エ、。欠落を仕様と仰しやりまするか。モシ新君。私や兩親に分れてから。四年このかた叔父様のお世話。それはく。眞身の親も及ばぬ親切。それを黙ッて欠落しては。不幸の罪が恐しい。それにまた叔父様は。味里江宗伯と云ッて。話の分つた良いお人。是々の譯だから。女房にあはれ浮世

美しいと。仰しやつたら。決して否とは云ひますまい。どうぞさうして下さりませ。

新三「そりや可ないよ。それじゃア卿は余に惚ちやア居ないのだな。ハ、ア分つた。こりや卿。疾から外に。言替した男があつて。それで逃るのを否がるのだ。馬鹿々々しい。余だつて御直参の武士だ。女を欺して拐帯すとは理が違ふは。それじゃアお半。これで縁切だ。と立腹して往かんとするを。あわて引止て。

お半「マア待て下さりませ。貴君も知つておいでの通り。両親も無い私の身の上。それに身重には成つて居るし。天にも地にも。頼のみに思ふは貴君お一人。

新三「サア夫程たのみに思ふなら。余が今いつた通り。江戸まで一處に行てくれるか。お半「ハイ。貴君の仰しやる通りに成ませうが。屹度奥様にして下さりまするか。

新三「ハテ嘘を吐てよいものか。(と引寄せれば)

お半「お嬉しう御座ります。(と胸を撫下して) 新君。御覽なさいな。まだ動氣が。こんなに打て居りますよ。

と新三郎の手を取て。わが胸に當つれば。

新三「成ほど。こりやアひどひ動氣だ。併し江戸に往けば。此動氣に引替て。屹度樂をさせて遣る

から。安心しなよ。それじゃ。大徳院の四ツを合圖に。

お半「ハイ承知で御座ります。貴君。間違ては可ませんよ。

新三「ナニ余が間違へるものか。(とお半の顔を眺めて) 罪造りな女だのウ

思ひを残して。新三郎は別れて去り行たり。お半は暫く後姿を見送りて。思案にくれ。石に腰かけ俯きてぞ居たりける。

此に悪玉吉五郎は。向の方より走り來りて

吉五「ヤア此は神奈川の蕪はづれだな。どうやら此までは。我慢して來たが。腹が減ても飯一せん。錢を出しても喰はせてくれぬ情知らず。半ツ拂は眞平御免と。不人情な断り様。ア、喉が乾て來た。オ、せつ無エ。(と云ひつゝ井筒を見て) ヤア彼所に水があらア。水があらア。

と急ぎ來りて井筒を見れば。汲上へき釣瓶なし。お半は心附きて。斯と見るより

お半「お前さん。水が飲たいたので御座りますか。どれ汲で上げませう。サア御上りなさいまし。此水は誠の清水で。冷ツかう御座りますよ。

信々しく。自から釣瓶を下して水を汲み。桶に移し。柄杓を添て與ふれば  
吉五「へエ有がたう御座ります。(と水を飲み) ア、旨エ水だ。今朝ツから飯一粒食はねエから。

32.

腹はすいて。へこくに成るし。喉は乾くし。ぶつ倒れさうに成て来たが。お蔭さまで。生ッ返りました。

禮を述べれば。お半は吉五郎の顔を見詰て

お半「それじゃア御前さん。まだ今朝ツから御膳もたべないでおいでのかへ。(と帯の間の巾着より。天保錢を一枚取出して) コリヤ少し計りだが。是を上るから。何なりと買ってお上りな。

吉五「御親切は有がたう御座エますが。私ア錢を持って居りますから。欲しく御座エません。欲いものは飯に寝る所で御座エますよ。

お半「それじゃア宿の旅籠屋に。泊ッたらよう御座りませうに。

吉五「所が少し譯があつて。どの旅籠屋でも止ませんから。困りますのさ。

お半「どう云ふ理か知りませんが。此家の主人は。味里江宗伯様と云ツて私の叔父さま。それは。情深いお人。様子次第では私から。御願ひ申して上げやう程に。私に話して御覽なさいな。

吉五「御忝う御座エますが。お話し申して見た所が。無駄だからマア止ませうよ。それよりやアお前さん。その柄杓や桶を。よく御洗エなせエまし。私が飲た後は。汚れると云はれまするぜ。

お半「ナニ此桶や柄杓が汚れると。

吉五「ハイ私や江戸の半ッ拂エ。追放になつた盗賊あがり。夫で人が嫌がつて。飲ませも喰はせも。仕ねエので御座エますよ。

お半「エ、(と愕きて。手に持たる桶をばたりと落したり。此前より味里江宗伯。年の齡は五十路の坂を。六ツ七ツも越したる入道の姿にて。梅軒門の扉を半ひらきて。吉五郎とお半の應答を聞て居たりけるが

宗伯「その旅人。今夜の宿をお貸し申さう。

吉五「ナニ。私をお止なすツて下せエますか。あの私を。

宗伯「いかにも。粗末なれども夜食を進せ。ゆるりと今夜は御泊め申さう。

吉五「へ、エ。有がたう御座いまする。

と大地に兩手を突いて、悦びの禮を述ぶる。お半は奇異の思ひをして

お半「それでは叔父様半拂ひのぬす、い、い、い。

と言掛て袖にて口を覆へば

宗伯「ハテ余が承知じゃ。お半。その客人を。あちらへ御上げ申しな。

お半「ハイイ。

33.

と答へて。栗山桶を持ち。先に立て案内すれば。吉五郎は。手傳ひて釣瓶を提げ。此家の勝手口より入りぬ。宗伯は平然として。扉を鎖ちて。歩を返したり。此時蛇の道鬼兵衛は。見え隠れに悪玉吉五郎が跡を附けて来り。草鞋の足音を驗し。此家を眺めて

鬼兵衛「ハ、ア。悪玉めが。此家へへエリやがったな。コリヤ油断が出来ねエ哩。」

(道具廻ル)

(三) 同奥座敷 (夜中)

珠光利休の流を慕ひ。茶烟禪榻に心を樂しむる。味里江宗伯が閑居とて。座敷数寄屋の造作と云ひ。小庭の模様と云ひ。其の瀟灑にして清潔なる。一點の俗塵をして。此中を汚さしめざるの趣は。實に主人の胸中を表示したるが如し。北の一室は。宗伯が臥房と書齋とを兼たる六疊の間。西の長四疊は。座敷の次の間にも。客待にも。用ひらるゝ一間にて。其間なる十疊こそ座敷なれ。軒の簾は高く巻上げて。岐阜提灯を懸け。雪洞を附けたる燭臺を疊の上に置き。主客各々膳を据て相對し、俱に夜食を喫したるは。是れ宗伯と吉五郎の兩人なり。食まさに畢

りて吉五郎は膳を戴きて。側に寄せ

吉五「腹一杯戴きまして。御馳走さま。有がたう御座います。」

宗伯「十分に食なすつたか。少しも遠慮は御座らぬぞ。遠慮をせぬのが。茶人の流義だから。モウ一膳。茶を懸けて。食てはどうだね。」

吉五「イエ。モウ御遠慮は致しません。今朝江戸を追はれましてから。一度も飯にはあり附かず。半ツ拂エで。身躰中が匂ふかして。何方へ往ても寄せ附けず。腹は減るし。足は草臥るし。ぶツ倒れさうに成た所を。お陰さまで。飯に有附きまして。其上に。お膳に向て食ましたのは。御恥しい事だが。丁度十九年振。こんな有がたい事は御座いませぬ。だが旦那。先つきも申ます通り。私ア牢拂に成た。追放もので御座えますが。牢破や繩脱を仕て。逃出した者じやア御座えませぬ。其證據は此通り。今朝御言渡に成た書附が御座えます(と財布の中より。書附を出して)旦那。私ア有がてエ事にやア職人でも。子供の中に手習を仕ましたから。讀だけの事ア。カツく出来ま

す。マア御聞なすつて下せエまし。斯う云ふ譯で御座えます。」

異名悪玉事

御當地無宿・吉五郎

右之者。悪事有之。先年入牢申付候處。同類共申合せ。破牢之企に及び候事兩度。自分一人にて。繩脱の目論見いたし候事一度。佃島寄場に於て。脱牢の相談いたし候事一度。去る戊午年牢屋敷類焼に付。切ほどき候節。其儘立去候事一度。右の罪狀相重り。去る天保二卯年より今年まで。滿十九ヶ年の入牢。重き御仕置にも可相成之所。今度重き御法會も相濟候に付。格別之御慈悲を以て。江戸構申付候。猶五ヶ年の間は。江戸十里四方并京都。大阪。駿府。甲府。伏見。堺。長崎。徘徊いたす間敷もの也

嘉永三戌年七月十九日

此通り。十九年の其間。傳馬町から淺草側。あちらこちらと。居所替した牢の虫。それに私の番號が九十九番で。札附の良ねエ代もの。旦那へ。私見た様な者が一晩でも。御厄介に成りましたやア。お家の穢になりますから。寧ろ是で御暇を致しませう。

宗伯「マア侍ちなせエ。(と掌を打鳴らせば。下女お黒出て来りて

お黒「旦那様。御用で御座いますか。

宗伯「お黒や。あの座敷へ(と長四疊を指して)床を取て。此お方をお寐せ申しな。

お黒「エ、何で御座いますと。此お方をあの座敷へ。御寐かし申すので御座いますか。へーこの

半ツ拂ひの泥棒を、い、い、い。

宗伯「エ、餘計な言を申さすとも。余が言附た通り。早く致すが良ワ。それから次手に此を。下て、くれい。

お黒「へーい。

と不安の思を懐きながら。此席に並べたる膳碗等を下けて。退く。

吉五「それじゃア。今晚私を御泊めなすつて。下さいまするか。エ、有がたう御座エます。十九年の間と云ふものは。板敷の上に筵一枚。木の枕で寐た私。蒲團の上に。手足を伸して寐ますのは。是が世に云ふ地獄から極樂。併し止ませうよ。エ、旦那。お腹をお立たすツちやア可ませんが。私見た様なものを泊るのは。正直な所が馬鹿か氣遣エ。こりや矢ッ張お止なさらねエ方が。宜う御座いませうぜ。

宗伯「ハ、ハ、ハ入らざる酌。余は見なさる通りの世捨人。卿がどんな素性であらうが。頼と構はぬ詮議だて。見捨られぬが余の性分。こりや卿にするのでは無い。天道様への。御奉公と云ふものじゃ。併し卿の様子を見た所では。大そう疲れて居なさる様だのウ。

吉五「ナニ疲れて居る様だと仰しやいまするか。是が疲れいで何と仕ませう。旦那エ。一通りお聞あはれ浮世

き成すつて下さいまし。十九年の其間と云ふものは。骨も身體も呵責のせめ。暑からうが。寒からうが。達者でも病氣でも。夜晝ともに足がせ鎖り。もつさう飯の五器口が。娑婆と地獄の通ひ路。その地獄の牢内で。九十九番の名うてももの。悪玉とまで言はれたものが。原を糺せば。生れ附ての泥棒でも御座エません。本所邊の片隅で。けちに暮した植木屋職人。兩親には早く分れ小僧あがりの瘦腕で。やツと凌いで居る中に。一人の姉が。亭主に死なれて所帯は潰れ。七人と云ふ子供をかよへ。食ふに困つた其日の難澁。私ひとりの稼では。八人口を養ひかね。貧に迫まつた苦みから。ふツと起つた不料見。米屋の店で白米三升。ちよろまかしたが非科で。八十日の入牢と成り。それが重つてとうくが。十九年の地獄住居。モシ旦那エ。私やア實に。天道様が。恨めしいと思ひましたぜ。寄場の先は品川沖。海の水さへ。好き自由に流れるのに。我の身體は一寸でも。動きいごきが出来ぬとは。情ない事ではあると。考へては泣き。泣いては考へ。長の月日を暮しましたが。やツとの事で年が明き。地獄の底から這出して。此娑婆に戻つて見れば。矢ツぱり娑婆の嫌れもの。私も娑婆が否になり。樂み無エ今の身の上。エ、旦那。私が入牢した時は。廿一で御座エましたが。今じゃア丁度四十男。これから眞人間に成て。働かうと云ふにやア。此言渡の書附と。此財布に入れてある三兩二分が。旦那。生死の分る。元手で御座エますよ。

と慨然として。懐中より錢財布を取り出し。宗伯が前に置きたり。斯る所に。下女のお黒は。小

さき桐の箱に。緒真田の紐を四方に懸たるを。持ちて出来り

お黒「へいあちらにお床を延て。蚊屋も釣て置まして御座います。

宗伯「ム、御苦勞よ。(とお黒が持參の箱を見て) そりや何だへ。

お黒「ハイこりやア先ほど江戸から。本惣の若い衆が参りまして。御誂への御修覆が。やツと出来

ましたに由て。御覽に入れまする。思召さまに叶ひませぬなら。仕替まするで御座りませう。何

れ明朝伺ひまする。宜しくと申置て。歸りまして御座います。

宗伯「さうか。思ひの外に早く出来た。どれくどんなに出来たか。一見いたさう。

箱の紐を解きて。取出したる服紗包。その中は唐物緞子の袋に入れたる銀の香爐に。純金の火

屋を附け。眼も眩き計なり。宗伯は香爐を下に置き。袋の仕立方や。紐の工合を吟味して。餘

念なし。其間に吉五郎は。香爐に眼を離さず見入たり。宗伯は袋の仕立。其意に適ひたりと見

えて。原の如く香爐を納め入れて。箱の紐を掛け結びて

中々好く出来た。お黒や。此箱を書齋の棚の上に。載せて置てくれい。

お黒「へい畏りました(と箱を持って書齋に入り。直に戻りて) 外に御用は御座いませんか。



宗伯「イヤ何にも無いよ。勝手元が片付たら。モウ構はずに伏つても宜よ。  
お黒「ありがたう御座います。」

40.

一禮しつと。吉五郎に眼を注いで。退きたり。宗伯は吉五郎が差出したる財布を取上げて  
宗伯「是だけ稼ぐには。餘ッほど掛りましたか。」

吉五「それが十九年の稼で御座エます。」

宗伯「成ほど。寄場の賃錢だから。格外に少ないとは云ふものよ。十九年の長の苦勞。それにして  
は。餘り縫で御座ツたのウ（と財布を返せば。吉五郎は懐中に納めながら

吉五「それに引替へ。唯今見ましたあの香爐。素的なもので御座エますネ。ありやア百兩からの品  
物で御座エませうねエ。」

宗伯「左様。それ位の價値はあるで御座らう。時に卿も大そう草臥て。モウ寐むたさうじや。サア  
彼所へ往て。寛りと休みなせエ。」

吉五「段々のお親切。有がたうは御座います。唯今も申上りました通り。結構な御馳走に。預りま  
した其上に。尊君のお居間近くに寐ると云ふなア。娑婆ッ返りの新参者にやア。勿躰なう御座エ  
ます。夫に半ッ拂エを御泊なさるのには。」

宗伯「ハテ。天道様から御覽なされば。御同様に一ツ人間。余が云ふ事をハイと聞いて。寐なさる  
が宜いワ。明朝ゆるりと話ませう。」

吉五「旦那。どうも相濟ません。夫じやア御詞に甘へまして。今晚は御厄介に成りまするで御座エ  
ます。」

と一禮してあたりを見廻し

旦那。それじやア此雨戸を建ませう。

宗伯「ア、イヤ。此熱いのには雨戸を締ては。逆もいきて寝られないよ。余の家じやアいつ  
も。雨戸は明ッ放しさ。」

吉五「デモ泥棒がへエツちやア。不用心で御座エますぜ。」

己れが身の上の事には心附かずして云へば。宗伯も亦心附かずに  
宗伯「ナンノ。泥棒がは入るものか。」

41.

ト云ひ掛けて同時に心附き顔見合せて

吉五「ハ、ハ、ハ。」

宗伯「ハ、ハ、ハ。そんな氣遣は無いから。安心して休みなせエ。」

あはれ浮世

書齋の中に入りたり。吉五郎は宗伯が入るを見送りて

吉五「あの香爐が大枚百兩。ム、ム、ム、エ、とんだ事だ。

と身ぶるひを成し。燭臺を持って。おのが臥房となされたる長四懸へぞ入りにける

(下座獨吟の唄)

唄「逢初て。戀の通路ふみ迷ふ。あと先見すの娘氣に。人まち顔の月明り。

十九日の月の雲間より出ると俱に。お半は忍び足にて。そつと奥より出来りて

お半「モウ四ツに間もあるまいが。草木も寐入る文月夜。今宵かぎりて住馴し。此家を是が見納に。

唄「なれぬ浮世の旅立や。

ア、そんな未練は出しますまい。夫にしても新三郎様。モウお出なさる時刻。

唄「霧を隔つる鐘の聲。捨がねなれや身をすつる胸の動氣の「イニウニイ。あとの一ツが戀の瀬

折しも四ツの鐘の聞ゆるを。お半は指を折りて數ふる所に。梅軒門の扉を。そつと外より押明

て入來るは。新三郎なり。お半は是を見て

新三郎様。

新三「コレ。

唄「渡るつま先き身もふるへ。

新三郎は。お半が震へて居る手を引て。庭に下り。小聲にて

サア余が來たからは大丈夫だ。何もそんなに。怖がる事は無いよ。

お半「イ、エ。怖がりには任せぬが。モシ新三郎様。貴君と一所に。此家を出ます上からは。ど

の様な事があらうとも。必らず見捨て下さりますな。

新三「誰が見捨てた良ものか。アレ見なせエ。雲間を晴れて皓々と。兩人を照らす御月様。あれにき

らく見ゆるのが。七夕さまの二ツ星。誓文かけた兩人が中。それに余が。浮氣心を出した日に

は。結ぶの神の罰が當り。此兩眼が潰れて仕まうワ。

お半「其御詞は。屹度で御座りませうねエ。

新三「知れた事サ。エ、何をグズグズして居るのだ。目ツカッタ日にやア。種無しに成らア。

頻にお半をせき立て。手拭を出して。其片端をお半に渡し。それを力にして。庭石の上を傳ひ

唄「忍び傳ひの飛石に。足すべらする庭の苔。

お半はすべりながら。庭に座り。宗伯が書齋の方を向き、手を合せて

あはれ浮世

お半「申し叔父様。親にも勝る御高恩。死でも忘れは致しませぬが明て言はれぬ身躰になり。切羽詰つて此家をば。立退まする不孝の罪。お免しなされて下さりませ。」と涙ながら詫言なし。更に氣を取直して

新三「お半様。少しも早う。」と手拭を冠れば。新三郎は手を引いて

唄「雲がくれこそ便りなれ。

月光の雲に覆はれたるを便りにて。兩人は梅軒門を出て落行たり

吉五郎は。おのが臥房の障子を細目に明け。右の手には。明皓々たる出刃庖丁を持ちながら、此前より。新三郎お半が舉動を窺ひたりけるが。拔足して座敷に出来り。兩人が去たる後を打眺めて

吉五「アツ。若エものと云ふもなア。途方も無エ不見見を出すものだなア。、、其不見見も。余やア百倍。先ツきに見た銀の香爐。寐ても寐られぬ迷ひの慾。あの香爐がおれの物に成て。百兩と云ふ大金にありつきやア。夫を資本に一生涯。樂に暮らせる此身の仕合。、、イヤ〜そりやア不見見だ。十九年の其間。稼いだ高が三兩二分。それに百兩の品をたゞ取ツちやア。冥利が

悪い。、、イヤ待てよ。其大金の香爐も。つい手の届く棚の上。寶の山に入りながら。手を空くして歸るなア。これが世に云ふ馬鹿律義。、、エ、どうでも取らずにや居られねエ。

モシ旦那。濟ませんが銀の香爐。断り無しにお貰ひ申ますぜ、、だが。若し目を覺して泥棒と聲を立られた曉にやア。これこそ此方の一大事。その時にやア。お氣の毒だが磨澄した此出刃で。蚊屋越にたつた一突。

忍び足して書齋に近より。障子を明けて。そツと覗いて

アツ有がてエ。前後も知らずに。すやく〜と寢て御座らア。あの寝顔を見ちやア。殺されるものじやア無エ。、、エ、旦那。目を覺しちやア可ませんぜ。

書齋に忍び入り。香爐の箱を盗み出して出来り

濟ません。御免なせエまし。

庭に飛下り。庖丁を抛棄て。梅軒門の扉の明たる所より。逃出して去たりけり。

此時お黒は勝手の方にて

お黒「泥棒だ〜。人殺イ〜。」

と叫びつゝ。寐巻の儘にて。手燭を點しながら出来りて。頻に泥棒々々と呼びて。座敷の中を

狼狽へ廻る。此聲に宗伯も目を醒して。書齋より出來り

46. 宗伯「お黒よ。何を寐ぼけて。大騒を致すのじや。泥棒も人殺も居りは仕ないワ。ハテ騒々しい女だのウ。」

お黒「イエ。く。それでもお半さんが。奥に見えませぬから。」

宗伯「ナニお半が居らぬとな。……ム、扱は……」

胸にや思ひ當りけむ。默然として手を叉き。嘆息して居たりけり。お黒は長四疊の障子を明て

お黒「旦那さま。半ッ拂も居りませんが。何か無く成た物はありませんか。(と書齋の中を取調べて)

旦那様。大變で御座います。銀の御香爐の箱が御座いません。それじやアあの半ッ拂の泥棒めが。お半様と香爐を引渡して。盗んで往たに違ひは無い。モシ旦那様。落附拂ッて御居でなさる所じや御座いませんよ。」

宗伯「別に落附き拂ッても居ぬが。それでもお黒。其方はあの吉五郎と云った人が。お半をつれて立退いたのを見届けたか。」

お黒「イ、エさうじやア有りませんが。何にしても大切のお香爐が……」

宗伯「サアその香爐が余の品じやと。誰が極て誰が申した。物數寄にて所持なせど。言はど無用の

贅澤三昧。世間には。僅の事に差支へ。其日に困る人もあるのに。右様の品所持なすは。此方の科と云ふもの。我に無用の品物を。貧苦に迫る人手に渡し。其難澁を救ふとは。天道様の御配劑。なんとお黒。あり難い事では無いか。

お黒「そんな事を仰しやると。今に御手許のお道具が。みんな無く無て仕舞ますよ。馬鹿よしい。宗伯「ハテ。皆無くなれば。それで執着の念も絶え。大きに仕合を致すであらう。アハ、ハ、ハ、ハ。」

お黒「お笑ひ事じやア。御座いませんよ。腹立て。家のうちを彼方此方と。騒ぎ廻りたり。此に蛇の道鬼兵衛は。小提灯を提けて先に立

ち。此地の手先兩人。吉五郎に繩を懸けて引立て。味里江の門外に來りて

鬼兵「汝が仕事をした家は。此だらうかのウ。吉五「ヘイさうで御座えます。旦那が坊さんで御座えました。」

先手甲「エイ失禮な事を云ふない。あのお方は。味里江宗伯様と云って。同乙「この界准じやア。一と云はるゝ大盡の。御隠居様だ。」

吉五「道理で品が能ッて。御人柄だと思つて居たよ。鬼兵「エ、黙つて居ろイ。(と宗伯が梅軒門の外に來り。内を覗きて

へい御免なせエまし。

お黒「どなたで御座います。」

48. 鬼兵「それへ出て申ませう。」

門内に入り。吉五郎を繩附のまゝ庭に坐らせ。おのれは縁先に腰を懸て。宗伯に對ひ貴君が味里江宗伯様で御座いますか。御初にお目に懸ります。……私は江戸北の御奉行所の御用聞で。三河屋鬼兵衛と申す者で御座います。此吉五郎と云ふ長年ものが。今朝御拂エに成たので。十里外へ。送り出しの其爲に。見え隠れに附て來ましたが。果して此方で悪事を働らき。此御門から逃出す所を。引ツつかめエて参りました。

吉五郎が「懐より香爐の箱を出して御紛失品は。是だけで御座りますか。」

お黒「ありがたう御座います。紛失品は今の所では。まづそれだけで御座いますが。此家の懸り人のお半さんと云ふ娘御を連ては居りませんでしたか。」

手甲「イ、エ。女づれじやア御座エませんでしたか。……さう云やア。先きの裏道に。網を張つて居た中に。」

手乙「さうだ。頬冠りした二人づれ。何でも欠落ものに違エなかつたが。」

手甲「あれがさうで。有つたかも。知れませんぜ。」

お黒「へエ。それで其欠落ものは。どツちの方に参りましたか御承知なら……。」

宗伯「又しても差出口。そんな事をお尋ね申さないでも宜い。モウ此に用は無い。あちらへゆけく。」

お黒「へーい。」

立て退く。宗伯は笑顔して吉五郎に對ひて

宗伯「よく歸つて來なすつた。卿その香爐に附屬した金ものを。忘れて往なすつたぜ。どれ出して來て進せやう。」

自から立て書齋より。此香爐に附屬せる純金の匙灰ならし等を。筒に立たるまゝ。持出せば

手甲「モシ旦那。此奴が申立にやア。此御香爐は旦那から。御貰ひ申たのだと申しますが。」

宗伯「誠に其通り。仔細あつて余から。吉五郎殿へ贈つた品もの。決して怪しい筋では御座りませぬ。……コレ吉五郎殿。これだから余が云つた通り。夜が明てから。立ちなされば宜い。餘り早く立つしやつたものだから。思はぬ疑ひを。受さつしやつたのだ。……個様に事がら明白の上は。其吉五郎殿の繩を。お解なすつて。宜しからうと存じまする。」

あはれ浮世

49.

50.

鬼兵「へエさう仰ツしやりやア。致方が御座いません。エ、運の宜い野郎だなア。(と繩を解けば  
宗伯「親分がた。深更に及び。一しほ御苦勞で御座りました。いづれ改めて御挨拶を。申述るで御  
座りませうが。唯今これなる吉五郎と。内談いたす儀も御座れば。御自分方には。御引取を願ひ  
まする。

鬼兵「承知いたしました。

心には怪しき事に思へども。強て問ふべきにもあらねば。手先の甲乙と共に此家を立去りたり。  
後に宗伯は。縁先に腰うち掛て。吉五郎と唯二人になりて

宗伯「これ吉五郎殿。此品がそれほど欲しいものならば。ナゼ余に打明て。くれいとは言ッしやら  
ぬ。サア是を卿に進せる程に。商賣の資本にして。正路の稼にありつきなさいよ。

吉五「エイ。それじゃア旦那。貴君は私の悪事を宥し。此品々を下さると仰しやいますか。イ、エ  
そりやア可ません。早く手先を呼戻し。此吉五郎は盗賊だ。押込だと仰つしやッて。御引渡なせ  
エまし。モウ染々我身に。愛想もこそも盡果ました。

庭に捨置たる出刃庖丁を手に取上げて  
これ御覽なせエまし。此刃もので勿躰ない。貴君の寐首。間違ッたら刺通さうと思ひました。

庖丁を抛出し。涙を拭ひて

これでまア。どう御詫が出来ませう。

泣入れば。宗伯は儼然として。空を指さして

宗伯「そのお詫は。天道様へさッしやるが宜い。これ吉五郎殿。卿眞以て。濟まぬ事じやと氣が附  
たら。それが即ち誠の心。その心をば宗伯が。此品物で買ひましたぞ。

吉五「ナニ私の心をば。お買ひなすつたと仰しやいまするか。

宗伯「如何にも買ひました。其兩眼に浮んだる。涙が誠の心の清水。これ吉五郎殿。よう聞ッしやれ。  
人の身軀は脆いもので。榮耀榮華も片時の夢。死ねば忽ち朽果て。地水火風にもどれども。死で  
も消えぬが人の魂。六道三世を流轉して。其苦みを受るのも。たツた心の持やう一ツ。一躰心  
と云ふものは。善悪正邪を辨へて。清らかではあるなれど。世の煩惱に引かされて。思はず道を  
踏み迷ひ。心を覆ふ村雲は。丁度あの月の通りじや。夫じやに由て。古い歌に「大空を照りゆく  
月し清ければ。雲かくせどもひかり消なくに」。此歌の心をさと。世の村雲に迷はずに。心の月  
の光りをば。磨くが即ち天の道。なる程と合點がいつたら。其心を忘れず。正路の人にならッ  
しやれや。

あはれ浮世

51.

吉五「この長年の悪人に。正路になれと仰しやっても。エ、モウ遅蒔で御座いまする。投首して泣沈めば。宗伯はきつと成りて

宗伯「イ、ヤ遅蒔で無い。遅く無い。此宗伯も三十歳ごろまでは。盗みかたりを致したものの。吉五「エイ。

宗伯「イヤサ。若年の無分別。酒色に此身を持崩し。親の金銀盗み出し。遣ひ棄たは何千兩。世間の人に對しては。親の物は子のものと。曲つた理窟で言譯が。たとひ立つたに仕た處で。天道様から御覽になれば。矢張盜賊不法の所業。ありがたい事は中年で。心學の教を受け。慈悲善根の出来るだけ。盡すが我身の罪亡し。天道様や神佛へ。御恩を報ずる御奉公。これ吉五郎殿。大空をてりゆく月し清ければ。雲かくせどもひかり消なくに。心の月をよく磨き。正路に稼いで儲けた金で。世に情ない貧苦の人を。救つて遣るが身の勤め。卿の心は宗伯が。しつかりと買ひましたぞ。(此時鶏の鳴音聞ゆれば)ア、モウ一番鶏が鳴出した。夜の明るには間もあるまい。人目に掛らぬ其中に。サア早く此を立ッしやれ。教誨なして。かの香爐および附屬の品を一ツに包みて。吉五郎に與ふれば。吉五郎は戴いて受ながら。首をも得あけずして

吉五「段々の御教訓。骨身に徹へて。有がたうは御座いまするが。此御品を貰ひましては。どうも私の心の中が.....

云はせも果てず。宗伯ははたと睨めて  
宗伯「そんな弱い根性では。十九年の辛抱が。水になるぞ。

大喝すれば吉五郎豁然として  
吉五「ム、さうだ。成程夢が覺めました。旦那。これから心を持直し。(と右の品々を戴いて懐中なして) 大空を照りゆく月し清ければ。(と云ひつゝ立上れば

宗伯「雲隠せどもひかり消なくに。

吉五「貴君に買はれた此心。きつと光を。磨きまする。心を決して去る

(幕)

是より第二篇までに五ヶ年を経過す  
あはれ淨世

第二篇 (安政二年乙卯十月二十日之事)

(一) 浦賀町役場門前

此歳十月二日の大地震、浦賀は江戸ほどに甚しくはあらざれども、崩家も潰家も数多ありて、即死負傷も百を以て數へたり。依つて浦賀町役場の門前には、救助米を積み置き、難民には、其姓名を帳簿に引合せて、相渡す事と成し、今日しも町役人幸助は、例に依りて床几に腰懸け、帳面を控へ、同く源兵衛は町役場の小使作藏太郎兵衛の兩人に差圖して、門前に筵を敷かせ、其上に大半切の鹽をすて、白米を入れ、量り渡すに忙はし。源兵衛は難民が集まりて、先を争ふを制して

源兵「コレサ〜。皆かさう騒いでは可ないよ。そんなに急なくツて順々に出来なせエ。御救米を渡さないとは云はねエから。

權藏「(竹杖にすがりてトボ〜したる老人)へい〜有がたう御座います皆さん御免なさいよ。お先に頂きますから。

紙の切符を出せば。源兵衛は受取て讀上る

源兵「三丁目治兵衛店權藏家内三人」よろしう御座いますか。

幸助は帳面に引合せ、矢立の筆にて記を附て

幸助「三丁目治兵衛店權藏家内三人」宜しい。三日分で四升五合。

源兵衛は是を聞いて、切符を本人を返し、小使に差圖すれば。小使の作藏は、枡を取りて米を量り。太郎兵衛は、權藏が出したる風呂敷を廣げ、四升五合の米を入れて、權藏に渡して

太郎「爺さん。三日分で四升五合あるぜ。重いから道で落しなさんなよ。

權藏「へい〜。お有がたう御座います。

引退けば。入り代りて

助妻「(背に孩兒を負ひたる婦人助四郎唄)どうぞお頼み申します。

紙切符を出すこと、權藏に於けるが如し

源兵「海邊通り助四郎家内五人」

幸助「海邊通り助四郎家内五人内子供三人」三日分で六升。

助妻「ハイ脊中にも一人をりますから。其お積りで。

あはれ浮世



幸助「だから。其子ともで五人ぢや無いか。

勘妻「五人だから。一日が二升五合づよで。三日で七升五合に。成るじやア御座エませんか。女と思つてお救の米をこめちやア困りますね。

作藏「オイ。神さん。慾張ッては可ねエゼ。全体扶持方と云ふものは。一人扶持が玄米で一日五合。女が四合で。子供が三合と云ふ極りのものだ。

太郎「そこを。町年寄の萬里連左衛門様が。色々。御奉行様へ御申立に相成て。男女も子供も白米扶持で。御渡しになる其上に。

源兵「卿の所なんぞア。勘四郎さんが五合に卿が四合。子供三人で九合。メて一升八合で宜所を。幸助様が大目に見て。二升にして渡して下さるんだぜ。夫をこめるのなんのと。不足を云ふなら。其中から。六合だけ。量り戻すぜ。

勘四郎「卿の慾張を憎みて、米の包を取戻し、量り減さんとするを制して。幸助「太兵衛。そんな酷い事を仕なさんな。エ、勘四郎殿の神さん。分ッたら。早く持て往なさいよ。

子供「(跣足にて身には襦袢を纏ひたる男の子供八五郎性)どうぞお頼み申まする。

源兵「山の手通り甚兵衛店八五郎家内三人」

幸助「山手通り甚兵衛店八五郎家内三人」オイ息子。卿の親父の怪我はどんなだへ。

子供「ハイ。昨日もお醫者様がお出なすッて。膏藥を貼けて。巻直して下せいで。どうも誠に。有がたう御座います。

幸助「よく大事に親父の看病をするのだぜ。それから療治に差支る事があるなら。直に玄關へ来て願ひなせエと。お母によく言ひなよ。

子供「有がたう御座います。

船頭「(足に糊帶をなして杖にすがりたる船頭の治郎作)相濟ませんが。御願ひ申ます。

源兵「獵師町次郎作家内四人」

幸助「獵師町次郎作家内四人」どうだへ次郎。少しは痛みが薄らいで来たかへ。

船頭「へい。お蔭さまで此四五日は大きに樂になりました。不斷から御用船を勤めて。御用當を貰

エます代りにやア。御年寄の萬里様に對しても。こんな時分こそ御奉公に。働かにはやア成らねエ

私。お救を貰つちやア濟ませんけれど。

源兵「なんの其遠慮にやア及ばぬ事だ。併しさう思つてお救ひ貰やア。渡す方だッて好意持た。

あはれ淨世

作藏「それじやア。其いよ心持の所でモウ一升。量り足して遣りませうか。

源兵「まさか。夫にも及ば無エワ。

58.

老婆「腰を二重にしたる市五郎母、誠に度々。お世話さまで御座います。

源兵「二丁目平兵衛店當時欠落もの市五郎母娘共二人」オイ婆さん。卿昨日来て三日分。貰つて往  
たじや無エか。

老婆「ハイお貰ひ申しましたが。尊公。マア聞いておくんない。昨夜尊公。泥棒が夜中には入ッて

来て。飯器ぐるみ盗んで往たので。途方に暮ましてねエ。

太郎「なんだか變な話しだぜ。

幸助「盗まれたと云ふなら夫にして。渡して遣るが宜よ。オイ婆さん。是から盗まれぬ様に。氣  
を附なせエよ。

賣下「黒の怪し氣なる羽織を着し、木刀を帯に挿み、右の腕に傷を負ひたりと見えて、巻木締して

首に釣掛たる賣下者、屢々の御手数。實以て恐縮には御座あれど。宜しく願ひ奉る。

源兵「通り新道陰陽師星野道季齋」

幸助「ヤア。先生も怪我を仕なすつたのだね。併し大疵で無ッてお仕合だ。

賣下「有がたう御座ります。實に此度の大地震は。古今罕なる不慮の天變。これと申すも一昨年

來。異國船が。當浦賀を始として。久里濱本牧横濱邊へ。度々渡來いたすに由ッて。天地陰陽お

のづから。和合の道を失つたる。凶變と存じられまするテ。

作藏「道季齋さんの講釋が。また初まつたぜ。だが。是位の大變だから。尊公にやア前ッから。知

れさうなものだッたらうが。

賣下「勿論々々。既に當月朔日の夜某ひそかに。天文を窺ふたるに。焚惑と云ふ星が。忽然とし

て紫微宮に飛込んだるは一ツの不思議。これ常事にあらずと存じて。占つたるに。震爲雷の三爻

變で。雷火豊の易。震百里を警すとあるからは。何でも是は大地震があるに相違ない。殊に三爻

が火に成る工合では。其地震から火事に成ッて。近くて三日。遠くて三月の中に起ると云ふト筈

だが。何と云ふらもので御座ッたらうがな。

太郎「それ位に知れたなら。何で尊公。怪我を仕なすつたね。

59. 賣下「所が雷火豊の三爻には。其右の脰を折ると。明かに書てあつたが。惜哉我身の上とは知らな

かつた。

源兵「ハ、ハ、ハ、ハ夫が即ち。陰陽師身の上知らずかね。

あはれ浮世

職人「(印シ半纏を着たる職人虎吉)へいお願エ申ます。

幸助「オイ虎吉。貴様は立派な職で。一人前の仕事は出来るくせに。何でお救を貰ひに来るのだ。

若い身そらで。餘り意くちが無い様だぜ。

職人「さう仰ツしやられると面目ねエが。大地震から此通り脚氣を踏み出して。我慢にも仕事が出

来ませんから。

源兵「脚氣ぢやア有るめエぜ。

職人「御談おつしやツちやア。可ませんよ。

老女「(耳の聾い老女、庄兵衛婆は、此話を聞誤めて)ナニ宿の爺さんは脚氣じやア有りまし無エが。

腰イぶんぬかしてねエ。

源兵「婆さん宜よく。宜から早く切符を出しねエ。

「裏通り一丁目太左衛門店庄兵衛家内三人」

老婆「ナニ三年にやア成らねエよ。去年の秋からの事だによ。

太郎「分つたから。早く持つて行なせエ。

小娘、小倅(善三郎と云へる漁夫の子供、一人は十三四歳の娘一人は十二三歳の倅、兩人にて蛤を笥

に入れて持来り、切符を出せば)

源兵「濱方獵師善三郎家内六人」

幸助「姉エ。親父もお袋も。少しやア宜やうかね。

小娘「ハイ。母アの方は昨日ツから家を這て歩くだけに成ツたが。

小倅「父の方は。まだウンくと。呻ツてるよ。

幸助「さうか。夫でお醫者様は廻ッて来て下さるかね。

小娘「ハイ毎日診察て下さッしやるよ。

幸助「そして。外の子供の世話や。病人の看病は。誰がするね。

小娘「誰も居ねエから。余と此弟と。兩人で仕ますよ。

源兵「よく感心にするのウ。

米を量りて渡せば。小娘は蛤笥を出して

6r. 小娘「コリヤ誠に少ねエが。御年寄の萬里様へ。呈て下さッせエな。

幸助「萬里さまへ呈ると云ツて。一體どうした蛤だへ。

小娘「ナニ父も母アも。此大地震で怪我はしたし。親子六人が。のたれ死になる所を。萬里様の御親

切で。御醫者には懸て下さるし。お米はお救を下さるし。此通り凌いで居るのは。萬里様の全くお蔭。

62.

小娘「それで余が姉エと兩人で。今朝ツから取た此蛤。

小娘「せめてお禮に持ていけと。父や母アの言附だ。

幸助「ムーさうか。そりやア神妙な心掛だ。萬里様も御聞に成たら。嗚お悦びであらう。(と懐中の

財布より天保銭を三個取り出し、紙に包みて與へ)

「コリヤ少のだが。蛤のお移りだよ。

小娘「之れ貰ツちやア濟まねエから。貰ふなア止に仕やうよ。

小作「父に叱れると怖エからのウ。

幸助「ナニ叱られる事は無い。蛤のお移りだから。何ぞ欲しい物でも買ふがよいワ。

兩人「有がたう。

此時、蛇の道鬼兵衛、今は浦賀奉行所の手先頭に成り、此所に来り幸助其他のものに對いて

鬼兵「ヤア皆さん御苦勞さま。

幸助「ヤア三河屋。お忙しいかね。

鬼兵「イヤ忙しいの何のと云つて。大地震からして。悪い奴がめつきり死たので。目が離される事  
じや無エ。

御救米を貰ひたる難民をチロリと見て

「此輩だつて。浮ツかり油断は出来やア仕ねエ。

憎し氣に睨め廻す。幸助は難民に對ひて

幸助「サアお救米を請取ツたら。早く歸りなせエよ。

皆々「有がたう御座います。

難民等は思ひくりに引取ツたり

源兵「ヤレく是で一ツ切りは片付た。幸助君。一服と致しませうかね。

鬼兵「時に萬里さんは。まだ御役所からお歸りにやア成りませんか。

幸助「光ツきに御歸りであつたが。鎌倉の松が岡から。尼寺の御住職が御座ツて。今奥で御中休の

63.

おもてなした。

鬼兵「フウ尼寺の比丘尼が。何しに此浦賀へ來たのだね。此騒ぎの中に。勸化とは迷惑だぜ。

源兵「ナニ地震に付ての。御見巡りだと。

あはれ浮世

鬼兵「ワハ、ハ、ハ。比丘尼が見巡つても。詰ら無エだらうじやア無エか。

源兵「何だか知らぬが。本浦賀は。江戸ほどでは無いと云ふ事だが。夫でも丸潰れもあれば半潰れもあり。其上に死人怪我人も。大勢あつて此騒ぎ。それで御住職様が。わざわざお見巡りに成つたのだらうよ。

幸助「話に聞けば。今朝御奉行様にお逢の時も。萬里連左衛門様の取計ひが大層行届いて居ると。御賞があつたとかで。御奉行様もお悦びだと云ふ事だせ。

鬼兵「さうかね。併し其大そう行届くと云ふのが。私にやア面白く無いネ。そりやア大勢の中には。眞以て可愛想な者も。稀にはあるが。先づ大抵は横着な奴が多いもの。夫を片ツ端から。ヤレ不便だ。ソレ氣の毒だと云つて施した日には。際限がありやア仕ないわ。此間中から此浦賀に。良ない奴等が殖て来たのも。萬里君が餘り。手柔エいからの事だ。全體余ア。あの萬里君からが。變だと思つて居るよ。

幸助「何だと。三年以來あの萬里君が。浦賀の町年寄にお成なすつてからと云ふものは。第一異國船の取扱を初としては。御用向は十分に足りるし。其上に町方浦方。御支配内に對しては。誰彼の別ち無く。親切慈悲を旨として。夫はくきつい行届きやう。浦賀三郷では活佛様と。皆か

拜んで居るぜ。卿なんぞが僅か一月前に。江戸から来たばかりで。様子も何も知らねエくせに。萬里君からして變だとは。何の事だへ。

鬼兵「變だと思つて居るから。變だと云つたのよ。併し其理は卿等の素人にやア分ら無エ事だ。浦

賀にア初めて来たけれど。蛇の道鬼兵衛と云つちやア。二十年來。江戸で知られた御用聞だ。小笠原様のお聲掛りで。貰はれて来た此鬼兵衛。迂闊な事は言やア仕ねエよ。

幸助「それ位立派な日明しが。變だと思ふなら。御奉行所へ罷り出で。表向なり内密なり。申立をするが宜や。余等の前で。生利な口を叩いて。陰言を吐しやがると。承知し無エぞ。

憤然として立掛るを。源兵衛は抑隔てよ

源兵「コレサ尊公方は場所もあらうに御用先で。まア靜かにお仕なさいまし。

取鎮むれば。幸助怒りを忍び、鬼兵衛も云争はず

時に車力甲乙は、大八車に白米の俵を積み、此所に曳き來り

65. 車力「ヘイ佐原廻りの御用米。お受取なすつて下せエまし。

幸助「ヤア御苦勞々々。次手に此へ積んでくれい。オイ作藏。太郎兵衛。手傳つて遣つてくんな。右の米を積み終りて、車力は汗を拭ひつよ

あはれ淨世

車甲「エ、旦那。あの闇黒坂ア。早く道普請を仕てお貰ひ申さにやア。我慢にも車は曳けませんぜ。昨日だって尊公。西浦賀の兵四郎と。増太の二人が。御用米を積んだままで。道の悪いに前へのめり。押に打たれて平ばかり込み。にツちも出来ねエ所に。」

車乙「そのをり丁度萬里様が。お通り掛りて御座エましたが。其車の心棒に。一肩いれて一ゆすり。ウント力をお出しなすツたが。イヤ恐しい力量で其車が二尺ばかり。忽ち上へ揚りましたぜ。

車甲「それでおいら一人が這出して。命からぐ助かりました。夫も全く萬里様のお蔭。命の親だと涙を出して。拜んで居ました。何に附けても萬里様ぐらゐる。忍らいお方は御座エません。幸助「そうだと云ふ事だ。危い事であツたのウ。夫に附ても闇黒坂の道普請は。直に取掛る様に計らはうよ。」

鬼兵衛は。此物語に耳を澄して

鬼兵「大八車に米を積んで。それが前へのめつたのを。一人で揚けた肩の力。十年前寄場でも。肩で車を押上た。評判ものよ九十九番。悪玉の吉五郎。それじゃアいよくあの萬里が……。幸助「萬里がどう仕たと。鬼兵「イヤサえらい力と云ふ事よ。」

手先の藤太郎、鬼兵衛を捜し來りて  
藤太「親分。一寸來ておくんなせエまし。  
鬼兵「ナンダ間違か。(と藤太が耳語するを聞いて)ムーさうか……それじゃア皆さん。御免なせエ。會釋して、藤太郎を伴ひ出往たり。藤太郎は歩行ながら、鬼兵衛に對ひて  
藤太「親分。お前さん今萬里君の噂を仕て。お居なせエましたが。何で御座エますね。  
鬼兵「藤太。卿こんな事を烟に出しても可ねエが。あの萬里と云ふ町年寄は。愈々悪玉吉五郎に違エねエ様だ。夫にしても。江戸追放の長牢ものが。五年の内に。ア、立身して居るのも不思議だ。  
藤太「デモお前さん。萬里さんは此浦賀三郷で。評判の好い御年寄。そんな人じゃア有ますまいよ。  
鬼兵「さうで無エよ。人は見掛によらぬもの。忠義を飾る大悪人。慈悲を施す大泥棒。昔からしてある例だ。あの萬里とても其通り。吉五郎で揚て見て。しツかり締て吟味を仕たら。面白エ種があるだらうぜ。  
藤太「さうで御座エますかね。  
鬼兵「ハテ。御用聞の功名は。こんな所にあるものよ。」

語りつゝ、去たりけり。此方にては幸助。源兵衛等。鬼兵衛が去るを見送りて  
あはれ浮世

幸助「エ、源兵衛さん。あの鬼兵衛と云ふ奴は。憎ッぶりの野郎じゃア無エカ。

68.

源兵「左様サ何ぞと云ふと二タ口目にやア。御奉行様を。鼻に懸けやがッて……

幸助「其上にまた途方も無い。御年寄の萬里様が。變だのなんのと吐したから。向後の見せしめひ  
どい目に。逢はせてやらうと思つたに。卿が止たに由て。今日は勘辨したけれど。あんな奴をあ  
の儘置ては。浦賀の爲に成らないぜ。萬里様へ申立て。お拂ひ箱に仕たいものだ。

源兵「大きにさうで御座います。彼奴が居ては。碌な事は仕出かしませんよ。

折しも、町役場の門の内にてお「立イ」と云ふ聲聞えて、大門の扉を左右に推開けば、浦賀町年  
寄萬里連左衛門黒羽織袴にて、一刀を横へて、先導と成り、鎌倉松が岡東慶寺尼寺住職松貞尼  
公、紫衣袋頭にて立出で玉ひ、尼四人小尼二人青侍四人仲間四人これに隨從して、静々と出来  
れば、幸助等は門外に下坐す。松貞尼公は、連左衛門が中座して會釋するに對はせて

尼公「連左衛門どの。心入のもてなし。忝う御座つた。當地の手當難儀のもの、救ひ方。聞きしに  
勝る行届き。此尼も見分いたして感じ入り。歡喜の涙を滂ぎしぞ。自然また奉行衆の。思案に餘  
る事どもあらば。内々にて。此尼まで申されよ。及ばずながら力を添へて進ませませう。

連左「御念頃の御詞。有りがたう存じ奉ります。

尼公「おさらば。

連左「御機嫌よろしう。

斯て、尼公は青侍二人を先驅となし、行列を正し、連左衛門等が見送り参らするを後にして、  
打たせ玉ふ所に。鬼兵衛先に立ち此地の酌人お半に腰繩を掛け、藤太郎これを取りて來り尼公  
に行合ひ奉りて、道を譲るの禮儀に及ばず。青侍は聲を勵して

青侍「エツわきよれい。

と制すれば。鬼兵衛は、澁々と道の傍に立ちて、尼公の行列を遙して、町役場の門前に來  
り、連左衛門が將に門に入らんとするを見て

鬼兵「御年寄様。囚人で御座ります（とお半を引すゆれば、連左衛門はお半を見て、ハテ此婦人  
見覺ある心地こそすれと思ひ入たり。鬼兵衛は更に心附かず、詞を續いで）此女は。唯今通り町  
の。衣笠屋方にて……

69. 連左「イヤ。唯今あれにて承はらう。

門の内にぞ入たりける

あはれ浮世

(道具廻ル)

(二) 同町年寄役所

立關より右に廻れば、町年寄が公務を取扱ふ事務所あり、是を町年寄の役所と唱へ、凡そ町年寄が管理せる民政は云ふも更なり、市中取締上に關係の事をも、此所にて聴く事あれば、普通には此所を訴所または尋問所とも名けたり。白木の机、御用書物入の本箱、用籠等を並べ、庭上には筵を敷きて、訴訟人の用に充てたり。

鬼兵衛は、藤太郎にお半の繩を取らせて、此所に連れ來り、お半を筵の上に著座せしむれば、お半は極めて恐怖の體にて、鬼兵衛に對ひて

お半「モン親分へ。三河屋の親分さん。どうぞ堪忍して下さいませ。……拜みますから。……後生で御座いますからよ。」

鬼兵「なんだと。後世で御座いますから。堪忍して下さいませと。エ、女郎藝者のくせに仕やがッて。晝日中。しかも衣笠屋の表二階で。荒井屋の旦那に狂ッて懸り。悪口もつ口吐いた上で。羽織まで引裂と云ふなア。呆れた事だ。此分で置いた日には。どんな事をするか。知れたものじゃア無エ。のう藤太。この婢ア大丈夫。入半八十日の價值はあるぜ。」

藤太「左様サ。八十日は。慥で御座エますね。」

お半「エイ。八十日の入半じやと仰しやいますか。もしもさう成つた日には。あのお節。……私やどうしませうぞいのう。(と泣入れば)

鬼兵「エ、喧しい。藤太郎の咄を聞けば。汝は四月ばかり前までは。萬里さんの帆縫場に。は入ッて居たさうだが。扱は彼所をかぶつたのも。悪事があつての事だらうよ。」

お半「親分さん。そんな事を言はないで。御年寄様のお尋ねの無いうちに。どうぞ許して下さいませ。成ほど。今しがた衣笠屋の御座敷で。私が荒井屋の旦那に。狂ッて懸つたのは悪かつたが。夫にも段々譯のあること。昨夜も昨夜四ッ過まで。お酒の上の悪口説。なんでも心に隨がへと。金の威光の無理掛合。この中からして胸の痛み。堪忍して下さいませと。其場はやうく切抜たが。又しても今日晝から。否な文句の言續け。言ふ事聞かぬが腹立で。三味線とつて踏折るやら。杯洗の水をあびせるやら。揚句の果がたぶさを持って。引ずり廻す手荒い亂妨。私だとして人間だもの。何にはかない藝者の身でも。餘りと云へば腹が立ち。悔しいまぎれに羽織の袖に。しがみ附たが事の起り。先様へは手を突て。訛言を致しませうほどに。親分さん。今日の所は。どうぞ免して下さいませいな。」

あはれ浮世



鬼兵「其譯は。おれが知つた事じやア無いワ。言度ことがあるならば。旦那の前で申上る。殊に由たら三十日の入牢ぐれエで済むかも知れぬワ。」

72. お半「エ、三十日の入牢で。済むかも知れぬと。三十日はおろか。三日だつて。私が牢には入ら日には。可愛想にあのお節。それこそ飢ゑて死にますよ。モシ親分さん。私に取ては。天にも地にも一人の娘。ある田舎へ頼んで。里に預けて御座います。其里親も貧しい暮し。毎月送る里扶持に。我身を捨て此勤め。エー親分さん。尊公だつて。大かた御子供衆もありませう。子の可愛いは。誰たつて同じ事。御推量なすつて。どうぞ此まよ。許して下さいまし。モシ藤太郎君。尊公は私が事を。少しは知つてお座のはず。叶はぬ所を取なして。親分さんへ。誤まつて下さいましな。

鬼兵衛、藤太郎の兩人に取すがり、泣いて頼めば。さすがの藤太郎も、少し不便の心を起して藤太「エ、親分。こんなに分口説を云つて誤るから。今日の所は内分に仕てはどうで御座いますね。鬼兵「戲談いつちやア可なからうぜ。こんな素べた婢アに。不便も可愛想も入るものかい。さう涙もろくちやア。立派な御川聞には成れないぜ。以来の見せしめ。何でも暗エ所へぶち込でやる分の事よ。」

お半が縄つたる手を突放す。

此時襖の中より、萬里連左衛門は

連左「アアまで鬼兵衛。(と聲を懸けて、出來り、縁に座りて)

「其女の申立。一應連左衛門が承はらう。」

お半は嘆きに沈みたりけるが。連左衛門と云ふ一言を聞き、ぐつと首を擧げて

お半「モシ御年寄様。萬里連左衛門様。貴君は私の顔を。御存知で御座りまするか。(とジツと顔をみて) 貴君へ對して。済まぬ事は致しませぬ。忘れもせぬ三年まへ。貴君のお持の帆縫場へ。初めて参つた其日から。しかも今年の三月まで。丁度二年と三ヶ月。私ア精出して働きましたに。思ひ掛ない俄のお暇。仔細を聞けば。子持は置かぬと仰しやること。成ほど。私が若氣の誤りから。山ない人に欺されて。親の許さぬ不義いたづら。家出をなして旅の空。身重に成つて男には。情なや捨られた。重ねくの不仕合せ。其不仕合が罪となり。貴君には追出され。其日に困つた私の難儀。をりも折とて里親からは。娘の病氣で薬やお醫者。その手當に金が入る。早く送れと矢の催促。著物から夜具蒲團。ありたけのもの掻集め。賣ては見續き見續いでは。賣り盡した其跡で。帯も褌神も賣つてしまひ。褌にも晴にも。寝巻のかたに細帯一ツ。鬘櫛さへも無い始末。

あはれ浮世

私ヤ飢ゑて死でもよいが。可愛い一人の娘をば。見殺にする不便さに。賣しな盡してせう事なく。耻しい事ながら。私の身体を賣りまして御座ります。

連左「ムツ氣の毒至極。両手を顔に押當て、醒々と泣入れば。連左衛門も、不便に思ひて

お半は、涙をふり拂ひ、聲を勵まして

お半「是と云ふも連左衛門様。貴君のせいで御座ります。よく私を追出して。母子二人を。路頭に立たせて下さいました。而と向つて此お禮。あり難う存じます。サア牢へなりと溜へなりと。勝手にお入れなさいまし。ハテ扱。情深い。御年寄様で御座りますねエ。

悔しまぎれに、嘲り笑へば。鬼兵衛は、お半の腰繩を引張りて

鬼兵「エー。失禮な事を申上るな。サア立てイ。

連左「アツイヤ。鬼兵衛。其女には構ひ無い。繩を解かれい。

お半「ナニ。私には構ひ無い。繩を解けと仰しやつたは。親分さん。尊公で御座いましたか。チエ

一有がたう存じます。私が不便で無いまでも。里に預けた娘のお節。それが不便で私の罪とが。お許し成されて下さりましたか。死でも御恩は忘れませぬ。

鬼兵「エ、饑舌るない。誰が何と云つてもな。汝にやア三十日の入牢を。させにやア置かねエワ。

連左「イ、ヤ。一日たりとも入牢はならぬ。其女構ひ無しと申した上は。ナゼ早く。繩を解かれぬ。

鬼兵「憚ながら。旦那さうは成りますまい。現在この女は衣笠屋で。大家の主人に狂て掛り。不法の所爲を致した女。

連左「鬼兵衛。その評闘のいらつは。承はつて存じて居るが。此女に咎は無い。畢竟申せば其主人が。事を起した發頭人。事秘便にせぬと云ふなら。其者を召捕て。連左衛門が吟味しやうか。

鬼兵「ムツ……そりやア兎も角も此女は。唯今も此お席で。旦那に對し。無禮過言を申せしものゆゑ。

連左「ハ、ハ、アそりやア余が身に掛つた事。卿の御配慮には及ばぬ事じや。

鬼兵「デモ此儘に免じては。此鬼兵衛。役目の表が立ちませぬ。

猶もお半を引立んとす。連左衛門容を正して聲鋭く

75. 連左「御用聞の鬼兵衛。町中の縮向は。町年寄萬里連左衛門の差圖を受け。相勤むるが其方の。役目の表であらうがな。

鬼兵衛、返す詞も無く、藤太郎に言付て、お半の腰繩を解かせ、後に心を残しつと、一禮して

引退く、お半はあたりを見廻して

お半「それでは貴君。本とうに私を。お免しなされて下さりますか。コリヤ夢では御座りませぬか。其悦びと俱に、氣落したるにや、急に胸の痛を覚え、兩手にて胸先を押へ居たり。

連左「何にも卿は私が免した。だがお半どの。それ程の身の上なら。早く私に話せば好いのに。この春卿に暇を出したは。全く私の存せぬ事。承はつて残念千萬。併しお半どの。安心したが良い。是からは及ばずながら。私が世話する程に。心丈夫に思ひなせエ。子の不便さに詮方なく。那落に落た卿の身體。察して見れば涙が翻れる。案じなさるな。其可愛い娘も。私が今に逢はせてやらう。

お半「なんと仰しやります。娘のお節に。お逢はせなされて下されますか。別れて里に預けてから。つひしか顔を見ませぬが。さぞ大きくなつて。可愛い盛りで御座りませう。少しも早うお節の顔が……

と云ふ中に、胸の痛は益々烈しくなりて

「アイタ、、、。此痛みでは私や是切り。死ぬるかも知れませぬ。同じ逢ふなら。貴て私の息ある中に。」

連左衛門は、お半を介抱して、縁先にかけて

連左「しツかりしな。私が屹度。迎ひにやつて逢はせるが。シテ其里親は何所の誰じや。

お半「その里親は程が谷で。有明の重太と云ふもの。申し連左衛門様。娘を渡せとたツた一筆……

連左「ム、さうじや。手を打鳴らせば。小使太郎兵衛出來りて

太郎「旦那。御用で御座りますか。

連左「ム、御苦勞だが。貴様この女中を此へ上げて。此薬を飲ませて。介抱して遣つてくれい。

夾襖より用意の薬を出して渡せば。太郎兵衛はお半を助けて壁の上へ上げて薬を飲せ介抱す。

連左衛門は、机の上より、紙と硯箱とを持來り

「サア苦しからうが。卿の自筆で。證據の手紙を……

筆に墨を含ませて渡せば。お半は苦痛を忍びて、書付を手短かに認むる。連左衛門は、其書付を夾襖に納めて

「その程が谷へは私が往て。直に連れて來て逢はせまするぞ。

お半「エ、貴君が御自分で。連れて來て下さりますと。見る影もない私の子供をば。夫程までに……

胸痛益々更に烈しく成りて、呼吸も促迫する状なり。連左衛門は、お半の傍によりて

連左「これお半どの。五年前の七月、神奈川臺にて行惱み。死ぬるばかりの其折に。清水一杯や

さしくも。飲ませて貰ふた其嬉しさ。味里江宗伯殿の厚い御恩。ナント覚えて御座らうがな。

お半「覚えが無うてなんとせう。しかも其晩叔父様の。御恩を忘れて私の家出。

連左「お半どの。私の顔を篤と御覽下され。其御恩受けた男こそ。即ち私じや。

お半は、病苦の爲に恍然として

お半「エ、其男。テモ憎らしい在部様。新三郎様。私を連れて落退て。未は夫婦と約束して。なぜ置

去にはなさんした。

謙語の様に言ひつゝ、手を延して、連左衛門を引よすれば

連左「在部様。新三郎様。ム、扱はあのをり。此お半どのを欺し賺して連出し。剩さへ其上に。置

去にした不實の男は。在部新三郎と云ふ人だな。シテ其在部新三郎は。どこの何所のいかなる人

で。御座りまするな。

此章にて、お半は氣が付き發脚となり、取たる手を放して

お半「それ聞て何になされまする。懣しゆかしい新三郎様。御旗本の在部様。恨みは少しも御座り

ませぬ……アノお節はどこに居やる。……新三郎様は。そこにお居でなされまするか。……ど

れどこに……お節や……新三郎様……お節や。

次第に弱る断末場、もはや目も見えず、手探りして、空を捕へ、新三郎とお節の名を呼び続け

て、憐むべし息絶へたり。連左衛門は、落涙して、口中にて佛名を唱へて

連左「アツ果ない臨終を遂たよな。思ひ出せばあの折に。飲ませて貰つた一杯の。清水の恵は千金

萬金。その恩返しに托まれた。お節は私がきつと引受け。立派に育てよ末始終。必ず世話をする

程に。心残さず往生あれよ。お半どの。南無阿彌陀佛。々々々。

合掌す。此時小使の作藏は、襖を少し明けて

作藏「旦那。鬼兵衛がお目通りを願ひ度と。御中の口へ參つて居ますが……

連左「そうか。是へ廻れと云つたが宜い。

作藏「畏りました。

引退く、連左衛門は、太郎兵衛に手傳はせて、自からお半の死骸を奥の座敷へ移し畢りて、原

の座に復れば、鬼兵衛はまた前の如く、玄關の前を過ぎて、庭上に来り、一禮して、板縁に上

る。是を見て

あはれ浮世

連左「鬼兵衛。何ぞ御用でもあつてか。

鬼兵「外でも御座いませんが。私は當浦賀御役所の御用聞。御免願を。致したう御座いますに出て。お手数ながら願書へ。御奥印を願ひまする。

懐中より願書を出せば

連左「ハテ怪からぬ。御自分事は御奉行様のお聲掛りで。態々江戸から廻つた御人。それが俄の御免願。定めて理ある事だらうが承はつた其上で……

鬼兵「へエ勿論理のある事ゆゑ。達て御免を願ひますのさ。

連左「シテ其理は。

鬼兵「外でも御座いません。尊公の差圖を受て。勤めて居るのが否だからさ。

連左「何と云ツしやる。

鬼兵「連左衛門様。惣別尊公のなされ方。無暗やたらに貧窮人を不便がり。悪い奴まで情を加へ。慈悲善根の佛顔。それが一体わからぬ捌き。目明シ岡ツ引と云ふもなア。科人を捕めエて。罪に落すが役目の第一。それに其科人を。助ける人とは。反の合はねエ寸端もの。折かく磨だ切味も。お蔭で焼が鈍るゆゑ。それで嫌へて御座いますよ。

連左「嫌ひも好も。それや御自分の勝手次第。

鬼兵「所が。嫌ひツ切りじやア無エ。私ア尊公に。疾から目を附て居りますぜ。

連左「ナニ。目を附て居ると云ふのは。

鬼兵「サア。再犯ものと睨んだ此眼。見覺のある卿の顔附。町年寄とも云はるよお方を。疑ぐツちやア濟まねエが。闇黒坂の中程で。大八車ののめつたを。唯た一人で持上た。肩の力が折よくも。割符を合はせる慥な證據。頭ごなしに言はれたお禮は。モシ連左衛門さん。卿はしかも悪玉と。異名を取た牢の蟲。江戸無宿の吉五郎と。此鬼兵衛が睨んだ眼。ナント少しも違へはありますめエなア。

連左衛門門前りしたれど、わざと笑に紛して

連左「ワハ、ハ、ハ、ア。是はまたきつい鑑定。併し其悪玉吉五郎は。疾に死んだと云ふ事だが。幽霊と見違はれては。迷惑するぜ。ハ、ハ、ハ、ハ。

此時、手先の藤太郎は、急ぎ足にて此所へ出來り、連左衛門に會釋して鬼兵衛に對ひ

藤太「兼々親分から言付られた。内密者の吉五郎。合牢して居た紐付が。見知に由て手を廻し。九平治はじめ五六人。一昨日から張込で。昨日鎌倉で召捕へ。御門外まで連れて來ました。御用が濟だ

82.

ら。直に見分しておくんなせエまし。

鬼兵「ナニ。合半ものよ見知人で。悪玉吉五郎を召捕て。連れて来たと(と愕きあわてよ)旦那。御免下さいまし。一寸見分して参りますから。

間の悪さうに辭儀をして、藤太郎と俱に引退く。連左衛門は、唯一人になりて

連左「アッ古疵と云ふものは恐ろしいものだなア。長の入牢の年が明け。原の身體に成たれど。拭ても取れぬ此身の鏽。大小挿み肩衣つけて。苗字を名乗る年寄役。萬里連左衛門とも云はるよもの。心の疲れか煩ひか。夢におびへる地獄の責。手錠足枷お仕着で。ありし昔の吉五郎。悪玉と云ふ悪名は。何年立ても世の中の。耳に残つた悪事の符帳。いま召捕られた吉五郎。あの鬼兵衛めが見違へて。夫と極つた曉は。鬼兵衛はそれで欺されても。欺されぬのは天道様。罪科も無い他人をば、身替に立て安樂に。世を過しては永劫未來。報ひの程がおそろしい。たとひ善根慈悲を積み。功德の塔を高むるとも。一たび人を我故に。罪に落す事あれば。其塔忽ち覆り。原に倍したる罪なりとは。兼々聞た心學の教へ。ムツ味里江宗伯殿に。心を買はれた意見は此じやアッあの人違ひの吉五郎。どうか明りが立てば宜が。頻りに心を痛めたり。鬼兵衛は、汐々として再び此所に復り來りて、一禮すれば。連左衛門は是

を見て

「鬼兵衛。いま召捕た吉五郎は。慥にそれに相違ないか。

鬼兵「全く悪玉吉五郎に。相違御座いません。仍て唯いま。御奉行所の御白洲へ廻しましたが。夫に付ても貴君をば。吉五郎だと疑つたは私の疎忽。仲間の者にやア笑はれて。面目次第も御座いません。

連左「そりや少しも構はぬが。其吉五郎は。それじやア愈よ。御吟味に成るのだね。

鬼兵「直さま御吟味に。相成る様で御座います。就ましては御年寄様。貴君へ對して先程の失禮。何とぞ御勘辨を願ひ上まする。

連左「ナンノ。役目の上の間違は誰しもあること。其訛言には及ばぬが。夫では先ツきの御免願は。思ひ止だであるだらうね。

83.

鬼兵「イ、エ。そりやア思ひ止ません。折角見出に預つて。江戸からわざわざ來たものが。こんな頓間を働いちやア。浦賀じやア御用は勤まりません。此上は。再び江戸へ立返り。なれた故郷で原の目明し。晴な仕事で。此耻を。洗はにやア面が出せませぬ。

あはれ浮世

連左「さう一途に思ひ切らずとも。勤績が宜からうが。鬼兵衛。さう仕てはどうだなア。

鬼兵「有りがたうは御座エますが。私ア一體人様のお世話に成たり。恩を着るのが。大嫌ひで御座エますから。御免願の奥印を。是非ともなすつて下せエまし。

84. 連左「宜しい承知いたしました。

懐中より實印を出して、書面へ押し、鬼兵衛に渡せば

鬼兵「有がたう存じます。

一禮して懐中なし、原の如くに引退く。連左衛門は見送つて

連左「ムッあの様子では。人違ひの吉五郎。浮目を見る事であらう。

默然として考へしが、心を決して

「五年このかた。折角磨いた心の月。光りを消しては相成らぬぞ。

其まゝ座をたつ

(道具廻ル)

(三) 同奉行所白洲

浦賀奉行、吟味座敷の正面閣下には、奉行溝口伊豫守出座なし、壘廊下には、組頭青山三左衛

門與力三川喜八郎、松永新之丞其左右に横座なし、高縁の階子際には躑躅と呼做せる同心兩人警衛す、白洲には囚人五分切林藏半繩にて薦の上に座り、見知り人源太、松藏、金八其向ふに控へ、手先頭鬼兵衛手先藤太郎其前に座し、手先九平治は林藏の後に控へ、事の體尤も嚴重なり。奉行は、先づ第一の見知人として、鬼兵衛に向ひて

奉行「何に鬼兵衛。其方は此囚人を存じて居るか。

鬼兵「唯今は何と名乗り居りますや。承知仕りませぬが。此者は五ヶ年前江戸表を御追放に相成りました。悪玉事吉五郎に相違御座りませぬ。

林藏「アッこれさ。戯談いつちやア可ないぜ。私ア先きから言ふ通り。そんな名前の者じやア御座

エませんよ。

與力松「黙れ。其方こと。林藏と申すは偽り。誠は悪玉事吉五郎に相違あるまい。江戸表追放に相成

り。當相模國へ罷越し。所々に於て強盜竊盜相働き。一方ならざる悪事の段々。逐一御上には御

85. 存知だぞ。有體に申上い。

林藏は益々驚頭して

林藏「何と仰しやつても。私やそんな恐ろしい。行状もちじや御座いません。全體目明だの岡ッ引

あはれ浮世

だの云ふ親分手合が。餘りそよつかしいからの事で御座えます。いけ馬鹿々々しい。間違へるも程があらア。申し御奉行様。どうかお目利で。お見分を願えます。

86.

奉行「ムツ。然らば其方が生れ素性。唯今の住所。并びに召捕に相成たる手続。明細に申立。

林蔵「へい行がたう御座えます。一體私ア江戸生れで。浅草阿部川町の林蔵と申します。客な野郎で御座えます。別に悪い事は致しません。酒と女とモ一ツ。申上にくい事が。若エ時から第好物で。身體をば持崩し。五分切といふ絆名を取て。所々方々を流れ渡り。唯今じやア鎌倉で。寺男を致して居る者で御座えます。

與力三「それが。どうして召捕られたか。

林蔵「へい。昨日お寺の用向で。巨袋坂へ來ますると。此野郎が(と後に扣へたる九平治を顧みて)四五人づれの同勢で。往なり私を捉めエて。御用と聲を掛ますから。御用と云ふなア何の用だと尋ねましたら。何でも汝は悪玉吉五郎に相違ねエと。何と云ツても聞かばこそ。寄ツてたかつてふん縛り。夜通しに引張ツて。此御白洲へ連れられたので御座えます。所が其悪玉と云ふ奴は。どんな漢だか。聞た事も見た事も。會しか無いに間違られ。面の似たのが身の災難。今年やア四十二の厄だから。何かしら有るだらうたア思エましたが。餘りひどい人違エ。モシ御役人様エ。

どうぞ御推量をお願エ申上ります。

奉行「然らば。夫なる見知り人共へ。申立させい。

見知り人に呼ばれたる源太、松藏、金八は順々に前へ出て

源太「へい恐れながら申上ります。私ア源太と申しますが。此者ア。悪玉吉五郎に。相違御座えません。

奉行「其方は。どうして存じ居るな。

源太「佃の寄場で少しの中。一所に居りましたが。たしか此吉五郎は九十九番で。十九年かと思ひ

まする。

奉行「ム、。其次の見知人は。

松藏「へい。私ア松藏と申しますが。成程この者ア。傳馬町で合牢した。吉五郎の様で御座います。

奉行「シテ其次は。

金八「へい。私ア金八と申しまして。江戸生で御座います。此吉五郎は。浅草の溜へ下ツた時に。

87.

見覚えて居ります様に存じます。

林蔵「コリヤ驚いた。三人が三人まで。言合せて。吉五郎だと私を言ふのは。ム、それじやア金澤の奴等に頼まれて。祭の賭場の遺恨から……



奉行「だまれ。鬼兵衛一人のみならず。見知人の三人までが。吉五郎と申す上は。強情はつても相立たぬぞ。コレ吉五郎。其方事。常浦賀界准に於て。悪事を頻りに働く趣き。猶追々に取糺す其間……」

連左「アイヤ。其御裁許。暫くく。」

聲を掛けて、萬里連左衛門、黒の紋付の上に、織上下を着用なし、わざと無刀にて、廊下傳ひに出来り、此席の廣縁に着座して。一禮すれば。奉行は不審の色を爲して

奉行「お手前は。町年寄萬里連左衛門。何故あつて。奉行の裁許を差止めたか。」

連左「恐れながら申します。夫なる囚人は。吉五郎では御座りませぬ。」

奉行「どうして夫をお手前が。存じ居らるよ。」

連左「お尋ねものと江戸無宿。異名悪玉事。吉五郎と申しましたは。即ち此連左衛門で御座りまする。」

皆々「エイ。」

餘りの意外に打驚けば。奉行伊豫守は、暫く連左衛門の顔を打守りて

奉行「連左衛門。お手前は此程よりの御用繁多で。逆上いたして居ると見える。退座いたして。落

付て宜からう。新之丞。連左衛門を介抱いたし。次へ召連れい。

連左「思召し。有がたうは存じまするが。連左衛門。逆上も致さねば。發狂も仕りませぬ。(と下なる源太に向ひて) ヤイなまくら。久しく逢はなかつたなア。よく余が面ア見てくれい。佃の寄場の苦役のうち。汝一番の春が撒けなくつて。其仕置に三日の間。一食に減らされて。泣出したのを感じてるか。

源太「エ、それをどうして尊公が。」

連左「知らなくつてよ。一ツ組合で居たじやア無エか。(と更に松藏に向いて)

オイ松やイ。相替らすひよつとこ面ア仕て居るなア。是ひよつとこ。汝ぐれエ悪運の強い奴は無エせ。……さうだ。巳年だったから。もう十一年に成つたが。甲州無宿の。藪虎が發頭で。牢破りの工夫に掛り。夫が顯はれて。藪虎は打首。余ア五ヶ年が殖たが。汝は盲く言拔て助かつたなア。

松藏、驚きて眉を聚め、首を横にふる。

「ナンノ。隠すにやア及ばねエ。過去た事だから。お咎はありやア仕ねエよ。其證據にやア。其とき汝。ねだ板で。引搔た長エ疵が。左の腕にある筈だ。」

あはれ浮世

鬼兵衛すかさず、松藏が左の腕を巻つて見れば、果して疵の痕あり。

「オイ夫に居るなア木鼠だなア。此節じやア。少しやア悪黨が上ツたかい。本所深川じやア。些とは名前も知られたくせに。損料賃をちよろまかし。其尻で喰エ込み。溜へまで下ツたなア。氣の利かねエ狀だツたぜ。」

金八「イ、エ。私アそんな悪黨じやア御座エません。」

連左「しらア切らない。溜へ下ツて来た時にやア。余が前へ手を突て。此通り濕ツかきて御座エますから。お扱エを願エますと。涙ア垂らして誤ツた事を忘れたかい。」

金八「それじやア尊公か。」

連左「正真正銘の悪玉吉五郎よ。」

此應答にて、一座みな愕然たり。連左衛門は容を改めて、奉行に向ひ

唯今お聞の通りに御座りますれば。あれなる人達の囚人は直さま御許しに。相成ますやう願ひ奉る。其代りには。此連左衛門の吉五郎。改めて御吟味を。受まするで御座りませう。

一禮して階子を下り、白洲の筵の上に座り、肩衣を脱して九平治に渡し、林藏の繩を解べしと、面容もて差圖をなす。是を見て

奉行「吉五郎。すでに名乗り出たる上は。夫なる林藏。御用は無い。繩解て免し遣はせ。」

九平治承はつて、林藏の繩を解く。林藏は大に悦びて、奉行に對ひ

林藏「大きに有がたう御座います。(と一禮して後に連左衛門に對ひて)旦那あり難う御座エます。此御恩は一生忘りやア致しません。浦賀の御牢内にやア。私の近付もへエツて居ますから……」

同心甲「エ、餘計な事を申さずとも。御用が濟だ上からは。」

同心乙「早く此を立おらう。」

兩人「立イ。」

林藏は九平治に連れられて退く。鬼兵衛は得意顔に成て、連左衛門に對ひ

鬼兵「どうだ吉五郎。余が睨んだ眼力は。凄いもので有うがのウ。サア是から汝は當御奉行の囚人だ。」

連左「イヤさうは成らぬ。此連左衛門の吉五郎。御尋ものに成たる仔細。承はつたる其上では兎も角も。江戸表にて五ヶ年前。出牢の許を受たる其以來。悪事を成たる覺えと云つては。此身に取て會て無いワ。」

鬼兵「さうは言はせねエ。然も其出牢の夜。神奈川宿にて。味里江宗伯方へ忍び入り。銀の香爐盗あはれ浮世

92.

み取つたる。泥棒の罪人だぞ。

連左「フツそれがお尋の個條か。其香爐は味里江宗伯殿が。此吉五郎に改心すよめ。心を買つた代物じやと恵まれし品々。盗んだ品では御座らぬわい。

鬼兵「そんなとほけた造り話か。申譯に成るものか。

連左「成る成らぬは。御奉行様の御捌き次第。……然る上は右の味里江宗伯。御呼出しに相成て。虚實の所。御問ひ糺を願ひ上まする。

奉行「何さま。此上は味里江宗伯。呼出すと致すであらう。

鬼兵「その宗伯は三年前に。死まして御座います。

是を聞きて、連左衛門も、奉行も、當惑の體なりしが、奉行は更に連左衛門に向ひて

奉行「シテ其味里江宗伯が。心を買つたと申せしは。連左「申上るも此身の懺悔。世に情ある宗伯が。恩を仇にて私の悪心。宗伯に意見を受け。其方濟まぬと心附なば。其心をば買ふ程に。善心に立返り。情を人に施して。利慾に決して迷ふなよ。大空をてりゆく月し清ければ。雲かくせども光り消なくに。此歌をば忘るなと。骨に徹へた教訓に。改心いたして御座りました。

奉行「その改心より何如いたして。唯今の身分には相成つたか。

連左「心を買つた代物と。宗伯殿が恵まれし。銀の香爐附屬の品々。賣代なして百五十兩の金子を得。それを資本に當地へ参り。小揚の職を始めましたが。運に叶つて繁昌いたし。其後御臺場御普請に。御用の石材人足の請負ひ。又は御船の取扱。正路の稼に利潤を得。たどまつとうに働いて。儲けた金子は聊づよ。難儀な者に施して。天道様への御恩返し。一昨年黒船渡來のみぎり。數ならぬ御奉公。御賞詞の其上に。改めて町年寄。仰付られて御座ります。是と申すも全くは。宗伯殿の意見ゆゑ。其宗伯殿が其節に。心を買はれた香爐より。再犯なりとのお疑ひ。御賢察。篤と願ひ奉ります。

奉行「申立承はつた。猶追て吟味に及ぶ。其旨一同心得い。

言渡して。奉行は組頭與力を引隨へて、退席せり。連左衛門は、鬼兵衛に向ひて

連左「時に鬼兵衛。

鬼兵「親分と云へい。何だ人を呼捨に仕やアがつて。連左「御免なさいよ。時に親分。私は少し遁れぬ用事があつて。一寸外土地まで。往て來ねば成らぬ身体。幸にまだ入牢どころか。お預けにも成らぬに由つて。明日より三日の間。大目に見て下

あはれ浮世

さらぬか。尤もそれも懸念に思ふなら。一所に往て下すつても。此方に支は些とも無いが。頼まれた子供をば。連れて戻れば直に濟む事。どうか聞入て下さらぬか。

94 鬼兵「馬鹿ア云へ。何所の國に囚人が旅に往くのを。許す奴があるものか。

連左「ナンノ。まだ囚人と極らぬ身の上。お呼び出に成る迄は。宅に扣へて居らるゝ身分。

鬼兵「さうは成らねエ。今日ツからは此鬼兵衛が。預りの囚人だ。貧乏ゆるぎもさせやア仕ねエぞ。

……サア此囚人の。悪玉吉五郎を引立ろイ。

藤太「吉五郎。きりく此を。

九平「立てうせい。

連左「親分。これほど言つても。私の頼みを……

鬼兵「エ、くだい哩。

連左衛門憤然として

連左「聞かさアどうとも。勝手に仕ろイ。

立上る藤太郎九平治繩を掛る

(幕)

第三篇 (安政二年乙卯十月廿一日之事)

(一) 程ヶ谷宿酒店 (午後)

程ヶ谷宿の程に、悪漢穴熊重太が設けたる酒食店、表の柱には

□ 卽席御料理 有明

と書たる招牌を懸け「酒めし」と筆太に認めたる看板障子を立てたり。

甲乙二人の旅客は、腰うち掛て、已に酒食を畢り、重太が女房のお六、勝手に立て居るを呼びて

旅客甲「オイお神さん。幾許だへ。勘定してくんな。

お六「へい有がたう御座います。(と飲食の器を見廻して)

95 「お勘定は。五百三十二文で御座います。

旅客乙「さうかの。随分高いのウ。

お六「地震から。御酒は減法高く成りましたヨ。それに此節はしけで御座いますから。誠にお高く

あはれ浮世

ッて。お氣の毒さま。

嘲るが如くに言へば。甲乙は澁々と錢を出して

旅客甲「サア五百三十二文此にあるよ。取てくんねエ。」

お六「へいあり難う……御ゆるりと成さいますし。お忘れ物は御座いませんか。お静にいらッしやい  
……エ、廉いの高いのと吐しやがつて。吝な百姓じやア無いか。此の家で飲食をすりやア。高  
いのは當然た。縁起でも無い奴だ。

鹽花を戸口に撒きて、飲食の器を片付て居る所に、重太が部下の子分黒牛松、ぶらり六之助、  
腰押兵太の三人、來りて

三人「姉御。今日は。」

お六「オヤ〜。お揃で來なすつたね。昨日ツから顔が見えなかつたが。神奈川へでも往ツたのかへ。  
牛松「ナニ。そんな氣樂な話じや。有りやア仕ねエ。昨日戸塚のいかさま銀が。迎エによこしたか  
ら。三人で往て見た所が。」

六之「姉御。聞ておくんなせエ。向ふが百姓揃ひだから。こいつア強氣と思つたら。」

お六「ハ、ハ、ア。すツかりとへこさを食ツて。歸つて來たのだね。」

兵太「イヤモウ。番狂はせで。器量の悪い事さ。時に親方は家でエすか。」

お六「ア、奥で假寐をして居てだが。モウ起しても宜時分だよ。(と暖簾の内に對ひて)オイ重さん重  
さん。牛さんたちが。見えましたよ。」

重太「ム、さうか(と目を摩りつゝ、暖簾の内より出來り)ア、すツかりと寐込で仕まつた。エ、お  
六何時だらうね。」

お六「卿まうハッ過だよ。此日の短かいのに。百で買ツた馬見た様に。よくごろ〜と寐るじやア無  
いか。」

重太「だつて汝。三日も續けて。ちツとも寐ねエんだもの。余だつて目に借が出来て居らア。(牛松等  
を見て)どうだへ。面白エ話でもあるかへ。」

牛松「所が親方。いまも姉御に話したが。いやまう面白く無エ事ばかりで。詰りませんよ。」

97. 六之「親方。かうして居ても。有達のがる瀬は無エが。」

兵太「好工夫は御座エませんか。」

重太「さうよ。此程が谷にくすほツて。神奈川や戸塚あたりの百姓相手に。小さな事を仕て居ちやア。」

98.

迎も出世は出来ねエゼ。噂を聞きやア此節江戸は。大地震後の御普請で。金廻りも宜いさうだ。夫にまた品川に。御臺場が出来るので。減法に賑かだと云ふ事ゆる。おいらア此を引拂ひ。江戸へ再び歸らうと思つて居るが。どうだ。一所に往て見る氣は無エか。

牛松「大いきの達磨だ。

六之「目が炭團で。先が見えなくツちやア可ねエゼ。

兵太「ハ、ハ、ハ。逸エねエの真中だ。

折ふし。宿役場の小使は来りて、堅帳を出して

小使「オイ重君お觸だ。

重太「これを開いて讀下すに

元浦賀町年寄萬里連左衛門事

江戸無宿異名悪玉 吉五郎

一年齡 四十七歳 一顔 長き方 一眼 大きい方  
一鼻筋 通つて高き方 一中背 瘦た方

一音聲 涼しく辨舌爽かなる方

右之者。浦賀奉行所に於て吟味中。昨廿日夜繩脱いたし。行方相知れ不申。其節着用の衣服は。黒奉書袖に丸に三ツ柏五所紋の小袖。右之者召捕候ものへは金二十兩褒美として可遣もの也

卯十月

右之通浦賀奉行所より御觸達に付相心得べきもの也

浦賀奉行所

程ヶ谷宿

年寄役場

99.

「ム、浦賀町年寄萬里連左衛門事。江戸無宿悪玉吉五郎。(と少し考へて)エ、承知いたしました。帳場の仕切判を、名前の下に押して、返して

「へい御苦勞さま。

小使「よく人相書に氣を附なせエよ。

堅帳を持つて去る

あはれ浮世

牛松「へ、エ。浦賀の町年寄さんが泥棒だったのかね。親方。お前考へて居なさるが。心當りでも有りですかへ。

お六「其奴を捉へて。二十兩と云ふ金にありつきやア強氣だが。重さん。お前その悪玉吉五郎とか云ふ奴を知ってるのかへ。

重太「イ、ヤ知ツちやア居ねエが。何だか聞いた様な名前だが……さうだ。思ひ出した。五年前此家の。店開きをした時に。汝等三人を連れて。神奈川へ引めに行たが。出はづれの棒鼻で。江戸から来た半ッ拂エの追放者に。出會つた事があつたらう。

六之「エ、進へ無エ。飯を喰はせねエと斷つたら。ぐつくと言やアがツたのを。

兵太「親方がひどい。見脈を見せて。突出しなすつた事が。御座エましたよ。

重太「さうよ。其時見を隠れに。江戸から附けて来た蛇の道が。彼奴ア悪玉吉五郎と云ふ奴だと云つたのを覚えて居るが。それじやア彼奴だな。

お六「それじやア。お前。其奴の面を。慥に覚えて居なさるね。

重太「所が一寸見たばかりだ。良ア覚えて居ねエよ。

お六「可ない無エ。二十兩と云ふ大金になる代物を。お前その時よく氣を留て。覚えて置けば宜のに。

牛松「ハ、ハ、ハ。さうと知ツたら私だつて。口の手帳に。附けて置まさアね。

重太「何でも宜や。一度でも見た事がありやア。七分の強味だ。皆がよく氣を附やうぜ。二十兩の代物だ。此節が。他人に占られちやア詰らねエから。

兵太「大きに左様さ。親方の手でつかまりやア。

六之「二三兩づつア貰エますね。こいつア旨エや。

牛松「モウ欲張ツてら。アハ、ハ、ハ。夫じやア親方。また今晚。皆「逢ひませう。

三人とも、打揃ひて立去つたり。折しも萬里連左衛門は、頭髮を白く塗りて、面相を變へ、老人の體に扮し、半合羽一刀の旅装束にて、山駕籠に乗り、戸塚の方より來り、途中にて駕籠昇に對ひて

連左「オイ若い衆。一寸まつてくんな。……有明と云ふのは。あの店だね。

駕一「ハイ左様で御座エます。

連左「それじやア。あの店へ立て貰はうよ。

駕二「畏りました。(と此家の前に來りて)へいお容さま。

おはれ浮世

お六「入ッしやい。お早う御座います。若い衆さん。御苦勞さま。  
連左衛門は駕籠を出て

102.

連左「ハ、ア有明と云ふのは。お前の所だね。  
重太「入ッしやいまし。私し方が有明で御座いますが。誠に狭くって穢くって。お耻しう御座エます。

連左衛門の體装を見て、火鉢を出してもてなせば。お六は料理目録の札を出して

お六「お誂は何に致します。  
連左「何でも可から。直に出来る物を。出して下さいな。夫から駕籠屋にも。飯を食せて貰ひ度が。

お六「宜しう御座います。御酒は附ませうか。  
連左「さうさ。此へ一本貰ひませう。駕籠屋さんは氣の毒だが。酒なしで遣ッて貰はうよ。其代り

泊りに着たら。酒手を駈るから。我慢してくんなよ。  
駕二、三、「どう致しまして。御飯さい頂きやア。結構で御座エます。

兎角する中に、お六は酒肴を持出す。連左衛門も重太も、互に見覺のある様には思へども、俱に思ひ出さず

重太「お客様。どちらからお立で御座エました。

連左「ナニ。今朝鎌倉から立て来たが。日が短いので。道中の撈が往なくッて。困りますよ。  
重太「左様で御座いましたか。十月の日とは云ひながら。誠に短ッかう御座エますよ。

此家の娘お榮(六七歳の女の子)綺麗なる衣服を着し、外より歸り來りて  
お榮「お母ア。お向ふの菊ちゃんに。こんな物を貰つたよ。

お六「オ、綺麗な姉さまだねエ。毀さずに大事にお仕よ。  
お榮「ナニ毀しやア仕ないよ。其代りにお母ア。何ぞおくれな。

お六「アイヨ。臍に食べさせ様と思つて。取て置たよ。  
柵の上より、盆に載せたる菓子を取出して

サア。是をお上り。そして此はお客様だから。奥へ往てちツとの間。玩品でも飾つて。遊んで居な。今にお母アが往からね。だが五郎ちゃんが寐ね仕て居るから。からかつてお起しでないよ。

お榮「起しやア仕ないよ。  
お榮は、菓子盆と紙籠とを持て、暖簾の内に入る。連左衛門は、是に目を注て

連左「可愛いお子さんだね。お神さん。アリヤお前の子供衆かへ。  
あはれ淨世

103.



お六「ハイさうで御座います。ナニ徒らで困りますよ。」

連左「イヤ。子供は徒な方が可愛くツて良よ。シテ外にも。子供衆が大勢あるかへ。」

重太「彼奴の下に。男の子が一人御座エますが。其上に又外から。ころがり込だ俄鬼まで居て。大勢で困り切りますよ。」

連左「そりやア賑かで結構だ。」

子供の噂をして。お節が事を探つて居る所に。お節（五六歳の女の子）穢き木綿袴を着たるが。素足にて。大きな冷飯草履をはき、味噌越し箆を持って、外より入来る。是を見るより、お六は睨め附て鋭き聲して

お六「お節。汝何をぐづく仕て居やがつた。そしてお芋はどうしたへ。」

お節「ハイ宿外まで往て。方々と探しましたが。焼たのばツかして。ふかしたのは。何處にも御座いませんよ。」

お六「なんの。此節がらふかし芋の。無いと云ふ事があるものか。アんなお榮ぼうが。喰たがつて居るのに。汝の探し様が悪いからだ。そしてお錢はどうしたへ。」

お節は、泣出しさうな顔をして

お節「お神さん。つい私が疎勿をして。お錢を道で落したから。堪忍して下さいな。」

両手を突て誤り入れば

お六「ナニお錢を落したと。嘘を吐け。大かた汝が道で買喰を仕て。遣ツたのだらう。いけツぶてい俄鬼じゃ無いか。」

お節「イ、エ。そんな悪い事を仕た覚えは御座いません。全く落したのだから。お神さん。御免なさいまし。」

お六「エ、。まだ口返答して。おれを欺さうと仕て居やがる。あきれた畜生だ。」

七輪の傍にある鐵火箸を振上ぐれば

お節「お神さん。御免なさい。」

泣聲を出して詫入る。連左衛門は、初より此子ならんと思ひたるが、お節と云ふ名を呼ぶを聞きて、是に相違なしと知り、點ツと様子を見て居たりけるが、此時手早く、天保錢を一枚取出し、兩人の間に入りて

連左「お神さん。アアお待ちなさい。其子が落したお錢と云ふのは。是じやア無いか。天保錢を、土間より拾ひ上たる振して、お節に渡せば。お六は直に引たくツて

あはれ浮世

お六「ハイ是で御座います。誠にあり難う。エ、お節。是から氣を附るが宜せ。サア用が濟だら。早く麥わらを拵へ無いかよ。ぶらくと遊んでる奴があるものか。

お節は泣ながら、土間の隅より、筵を持出して、軒下に敷く。是を見て

連左「親方。あの子が麥わらを拵へると云ふのは。内職かね。

重太「へエ。此邊じやア子供が皆。手内職に。麥わらを拵つて。少しづつの錢を稼ぎますよ。

連左「さうか。そりや感心だなア。

懐中より二朱金一ツ出して、お六に渡し  
お神さん。此金を出しますに由て。其子を遊ばせて。私の傍へ置ておくれな。

お六は、二朱金を得て、笑顔を作りて  
お六「へエ、宜しう御座いますとも。サアお節。お客様のお傍へ往つて。お酌でも仕る。

お節を突遣れば。連左衛門は、傍へ近づけて、顔を眺めながら

連左「お神さん。此子供は外から來て居るので御座いますかね。

お六「ハイさうで御座いますよ。仕方の無い餓鬼で御座いますが。お氣に入つたらお連なさいまし。里扶持の溜りが三月で三兩。それさへ拂つてお貰ひ申せば。お客様が連て往て。煮て食はうと焼

て召上らうと。私共じやア構ひは致しません。

連左「ハアさうか。夫じやア里扶持の溜りが。三月で三兩。それツ切かね。夫で大きに安心しました。實は私やア。此お節の母親には。少し身寄の者で。此子の迎ひに參つたのだから。さう思

つておくんなせエ。

山駕籠の屋根に附たる、風呂敷包を取來り、是を渡して

お節ほうや。お前は今ツから此叔父と一所に。お母さんの所へ往のだから。奥へ往て。此包の中

にある着物と着替て。早く此へ來るのだよ。

お節「さう。それじやア此お衣を着替て。叔父さんに連れられて。お母さんのとこへ往くの。オ、嬉

しい事。

嬉し悦びて、包を抱へ、暖簾の中に入る。重太は、連左衛門の側に進み寄り、手拭を以て、兩

眼を拭ひて  
重太「へエそれじやアお客様は。あのお節の迎エに。お出で下すつたので御座いますか。それはそ

れは御苦勞様で御座います。所で唯今承はりますれば。あの子のお袋さんの身寄だと仰しやる

からは。定めてお半さんの御親類で入ツしやいませうが。私共は。ふと仕た事から。お半さんと

あはれ浮世

お心安くなりまして。あのお子さんを預りましたが。預つたと云ふでう四年越。實の親子も變らぬ情愛。私共の了見じやア。お半さんからお貰ひ申した積りで居ました所を。貴君に連れて往かれますのは。手に持て居る櫻の花を。浚はれる様な心持で。實に悲しいと存じまするが。シテお半さんは。唯今とこにお居で御座いますね。

連左「お半の居所は。少しお前さん方へ云ひ兼ねるが。是まで段々の御親切。大きにあり難う御座いました。所で里扶持の滞りが。三月で三兩。それを唯今渡しますに由つて。あのお節を……

重太「オット旦那。その外にお半さんへの貸金が。十五兩御座いますから。夫をお貰ひ申さじやア。お渡し申す事は。出来ませんよ。

連左「さうかい。併し今お神さんの話じやア。三兩さへ請取れば。連れて往つて宜いと。言ひなすつたでは無いか。

重太「ナニ。彼奴ア。里扶持だけの事を知つて。お半さんへ外に貸金のある事を。知らないで御座えます。實は私の方ではあのお節を。十五兩の形に。預つて居る質物で御座えますから。其方が附かなくつちやア。滅多に渡す事ア出来ませんよ。

連左「ム、それじやア。お半の證文でもありませんか。

重太「ナニ。お心安い中だから。別に證文は取つて御座えませんが。あの子を預つて居るのが。論より證據で御座えますよ。

お六「さうく。お前が十五兩。あのお節を引當にして。お半さんに貸した事を。ころりと私しやア忘れて居たよ。ホンニ金銭に掛ちやア。私しや大様だねエ。

連左「さうかへ。夫じやア一應。お半に聞て見なけりや。愈々の所が分らぬが……イヤ宜しい。然らば十五兩と。里扶持の滞りが三兩。メて十八兩。お渡し申すからお請取なせエ。

懐中より、金十八兩取り出して並ぶれば。重太、お六は其意外に驚きて居る。此中にお節は着替して、綺麗に成りて出来り

お節「サア叔火さん。早くお母さんの所へ往きませうよ。

連左「ム、さう仕やう。お節を自分の側へ引寄せ置き更に懐中より金一分を出して「お神さん。飲食の勘定だ。取てくんな。釣やアお茶代だ。

起ち掛れば

重太「ア、モシ旦那。お勘定は頂いて。皆済に成りましたが。其子を尊公に渡せと云ふ。お半さんか

らの證據物が。拜見いたしたう御座いますね。

連左「ム、そりやア御尤だ。

懐中より書付を出して

里扶持御受取の上にて此御方へおせつ御渡し可被下候以上

卯十月廿日

重太様  
お六様

は 人

「十五兩と云ふ金子をば。無證文で貸借する中。お半の手跡。見覺えて居なさるだらう。

重太「成ほど。お半さんの手に相違は御座エませんが。併し其子を渡すに付ちやア……

連左「借は拂ひ。書付は見せ。モウ此上は。申分は無い筈だ。

お節の手を引て外に出て  
「オイ籠駕屋さん。立つと仕やうぜ。

籠駕屋に乗り、お節を向ふに合乗させて、泉き上させて

「御夫婦の衆。いづれ其中また逢ませう。サア急いで遣ッてくんな。

籠駕を急がせて、金澤街道の方へ去る重太は、お六と俱に茫然として、見送りたりけるが、ど  
さりと腰を掛けて

重太「エ、お六。失敗たぜ。所詮六かしいとは思つたが。吹掛て見た十五兩ずらりと出した様子で

は。モウ十兩ぐれへ。多く言つても宜かつたに。アツ惜しい事を仕た。是が世に云ふ下司の智恵  
は後からだぜ。夫に附けてもあの爺。ありや何者だらう。

お六「サア何ものだらうネ。餘ッほどお金を持つて居た様だつたぜ。

此の時蛇の道鬼兵衛は藤太郎、九平治および三人の手先を引きつれて、戸塚の方より出て來り  
て

鬼兵「エ、何でも。此方に來たに違エねエが。それに小使の話を聞けば。お半が死際に言つたには。  
程が谷の有明に。子供を預けてあるとの事。

藤太「それにあの悪玉が。頼まれた子供をば。連れに往く其間

九平「目に見てくれいと云つたからは。何でも違エは御座いませんよ。

あはれ浮世

鬼兵「サア往て見やう。

有明の店先に來り、重太を見て

「オイ重太兄イ。

重太「ヤア親分。お出なせエまし。皆さん御苦勞さまで御座エます。何か大した御用で。お出向に成りましたかね。

鬼兵「さうよ。外じやア無エが。お尋ねものと悪玉が。來やア仕ねエか。

重太「悪玉と仰しやるのは。悪玉吉五郎で。浦賀の町年寄で御座エますか。

鬼兵「その吉五郎よ。何でも此方に來た筈だが。

重太「その吉五郎なら。先ツきお觸が御座エましたから。氣を付けて候て居ますが。影も形も見えませんね。

鬼兵「ハテナ。來ない筈は無エが。そこで重太兄イ。お前の所に。お半と云ふ女から。子供を預つて居る筈だが。其子供はどこに居るね。

重太「其子供はたつた今。お半の親類の爺が來て。一所につれて往ましたよ。  
鬼兵「エ、夫こそ吉五郎だ。

重太「あれが吉五郎。南無三。二十兩の代物を。

鬼兵「シテ。どっちの方へ行つたへ。

お六「あつちの方へ。駕籠を飛ばせて参りましたが。

重太「まだ七八町とは参りますめエ。

鬼兵「それじゃア。跡を追掛て。

鬼兵衛は、重太を案内者に立て、藤太郎九平治等、身ごしらへして走りいづ

(道具廻ル)

(二) 相州淵崎 (初夜)

右は、峨々たる山岳連なりて、千尺の断岸、海上に臨めり、左は渺々たる平沙にして、往來の街道たり、是ぞ即ち相模國久良岐郡淵崎の景色なり。

連左衛門は、此前夜浦賀の獄中を繩脱して、密に支度を整へ、間道を経て、一旦金澤に出で、更に道を轉じて踪跡を暗まし、戸塚に出で、駕籠を雇ひ、程が谷に到りてお節を請取り、是より金澤に出で、金澤街道に掛り大岡、雑色、能見堂前、谷津、六浦寺前を経て、この淵  
あはれ浮世

崎に來り、金澤へ越えんとする所なりと知るべし。  
鬼兵衛、重太、藤太郎、九平治、および手先の三人は、程が谷より山道の捷路に掛りて、早くも此處に來りて

九平「親分。この山道はひどく歩き悪う御座いましたが。併し思つたよりは。早く参りましたよ。」

鬼兵「さうよ。重太兄イが此間道の案内を。知つて居たので早くは來たが。よもやあの吉五郎。まだ通りは仕めての。」

重太「そりやア大丈夫。何だつて本街道と山道とは。弓と弦で御座えますもの。いくら駕籠を飛ばせたからと云つて。日暮前に淵崎まで。着く氣遣はありやア仕ません。」

鬼兵「おれもさうとは思つてるが。相手が素早エ悪王吉五郎だ。こんな苦しい思ひをして。どぢを組じやア氣が利かねエワ。」

藤太「親分。御安心なせエまし。今庄下の茶店へ往つて見て見たら。今日は朝ツから見て居るけれど。駕籠らしいものア一挺も。金澤街道の方にやア往ませんと。申ましたぜ。」

鬼兵「さうか。夫じやア安心だが。今も云ふ通り。相手が常の鼠じや無エから。網を張るにも氣を附やうぜ。オイ九平治、藤太郎。」

兩人に打嚇きて、餘の輩にも傳へ、手筈を定めて、人數を分ち、左右の岩陰に隠れて、連左衛門の來るを持受たり。

連左衛門はお節を合乗させて、駕籠にて此處に來り、駕籠舁に對ひて

連左「オイ若い衆。こゝらで下して宜よ。」

駕一「ナニ旦那。もちつとで御座エますから。渡し場まで参りませう。」

連左「ナニそれには及ばないよ。此邊の勝手は。余もよく知つて居るからね。」

駕二「デモ御座エませうが。もう夜に入りましたから。ひよつとすると渡し場の船頭が。居ねエ事がありますに山ッて。」

駕一「何なら私が往て。見て來ませうか。」

連左「忝け無いが。ナニまだ日が暮れたばかりだから。船頭の居ない氣遣ひもあるまいよ。」

駕籠を出て、草鞋をはき、お節には、結び付草履にして穿せて、身支度を整へ、懐中より金子を取出して

「オイ若い衆。それ駕籠賃が金二分に。酒手が一分。大きに御苦勞だった。  
駕「へい〜。旦那こりや御酒手まで。澤山にあり難う御座エます。」

あはれ浮世

駕二「大きに有りがたう御座います。姉さん。帯は締つて居ますか。」

お節に氣を注げ、禮を述べ、駕籠を昇きて、原の道へ歸る。連左衛門は見送つて、お節に向ひ  
連左「お節ほうや。此少し向ふが渡し場。それを渡れば直に金澤。途中で草臥たら負つて遣るから。  
手を引かれて歩行くのだよ。」

お節「アイ叔父さんが手を引ておくれなら。夜道でも何でも。歩行ますよ。」

連左「ム、感心に聞分のいゝ子だのウ。それに附けても此子を首尾よく。重太の手から請取つたが。  
蛇の道とまで。異名を取つたあの鬼兵衛。おれが後を附け廻し。探して居るに相違はあるまい。  
長の年月地獄で暮し。臭味の残つた此身体。別に惜しいと云ふでは無いが。お半どのが今はの際  
に。拜んで托んだ此娘。それを半途で見捨ては。安心せいと請合つた。詞の甲斐が無いと云ふも  
の。ハテ此先の納りは。どう仕たが宜からうなア。(と暫く佇立し考へたるが心を決して  
「サア。お節ほう往かうぜ。」

お節の手を引き、渡場のある方へ往かんとす。此時鬼兵衛の一群、左右より現れ出で

鬼兵「吉五郎御用だ。」

連左「ナニ。」

見れば、我を追つたる捕手なり、心得たりと連左衛門は、お節をかばひつゝ、向ふ輩を取ては  
投げ、突ては退け、脱けつ潛りつして、お節を脇に掻込で、抱き、山道の方へ走つたり

○

(半廻シ)

やうく上りて見れば、こは何に、海面に突出したる断岸にて、下は荒波の打寄する大海な  
り、然るに鬼兵衛は、重太と俱に追掛け來りて、後より迫り、連左衛門が躊躇する間に、鬼兵  
衛ははや其後に來りて、合羽の襟をむんずと掴む。連左衛門は是までなりと合羽を片手にて脱  
ぎ、片手にお節をしつかと抱へて、断岸の上より、海中へ飛下る。鬼兵衛は脱たる合羽を掴み  
たるまゝ、後へ隙と仆れて尻餅をつく。連左衛門は飛下りさまに、崖の中腹の藤かづらに、手  
が掛りたれば、お節を抱きながら、是に取附たり

此はづみに、大なる土の塊、ほくりと崖より離れて、響と共に海上に落ち、どぶりと云ふ聲の  
聞ゆれば、鬼兵衛は起上りて

鬼兵「畜生め。海へ飛込みやがつたぜ。」

重太「あの音は。悪玉で御座エました。併し此淵へ落たら。助かりッこはありませんよ。  
鬼兵衛は、断岸の上より、海面を見下して

あはれ浮世

鬼兵「さうかね。あッ惜しい事をしたなア。

(道具廻ル)

(三) 鎌倉松ヶ岡 (夜中)

松ヶ岡の東慶寺は、山緒ある尼寺なり、本尊佛の御前には、香華燈明を備へ奉りて、光明赫耀たり、既に夜中の拜禮看經の始まる爲にや、本堂の隅々に燭臺をたて並べ、寺男の林藏五分切は蠟燭次を手に持ちて、燭臺を次替へつよ

林藏「間の悪い時にやア悪いものだ。二月ばかり前ツから。やツとこのことで當り出し。折角運が向いて來たら。お手が入ッて逃出し。今では此の寺男。ほとほりの冷るまで。かう仕て居りやア安心と。澄まして居たら昨日の災難。浦賀まで引張られ。思ひも附かねエ人違エ。本人が出てくれたので。際どい所を助かつたが。イヤ思ひ出してもぞツとするぜ。夫につけても名乗ッて出た吉五郎。中々ゑらい男だが。あれから後で。どう仕たらうなア。

此に連左衛門はお節を脊に負ひて、次の間の襖を明けて出来る。林藏は是を見て「そこに來たのは誰だへ。參詣の衆なら。夜はなりませんよ。

連左「イ、エ。參詣の者では御座いませんが。子供づれの道中で。悪漢に取巻れ。難儀に出會つた旅の者。どうぞ暫く。お暇ひ下さいまし。

林藏「ナニ。悪漢に出會つて。難儀を仕た旅人だと。云ツしやるか。蠟燭次を出して、連左衛門の顔を見て

「ヤア尊公さんは。浦賀の御年寄。萬里連左衛門様。

連左「コレ(と制して、林藏の顔を見て)ヤア卿は余と見違られた林藏さんだなア。

林藏「今時分。此へお出なすつたのは。どう云ふ次第で御座いますね。

連左「その次第は長い事だが。今は話をして居る間合が無い。追手の掛る身の上だ。林藏君。男と見掛けて頼みますが。兩人の者を匿ッて。急場の難儀を。お助けなすッて下さらぬか。

林藏「旦那。よう御座エます。貴公に助けられた御恩返しだ。私が引受けて匿へませう。

連左「アッ右がたい。是が世に謂ふ地獄で佛だ。併し追手と云ふのは蛇の道鬼兵衛。迂闊な所じやア目ツかるが。何所にどうして隠れやう。かう云ふ中にも氣がせくから。林藏君。早く隠して下さらぬか。

あはれ浮世



林蔵は、あたりを見廻して

林蔵「メた。屈竟の隠れ場所。(と内陣を指して)あの御本尊様の。蓮臺の下がからん堂だ。窮屈で

もあの中へお忍びなせエ。誰だつて氣の附く事じやア御座エません。

連左「ム、有がたい。併し此子はどうした者であらうなア。

林蔵「サア。其御子さんに困りますなア。

お節「叔父さん。私アどんな怖い目に逢つても好から。お前早く隠れておくれ。

連左「エ、お前を見捨てるくらゐなら。こんな苦勞を仕やアしないワ。

此前より、當寺の住職松貞尼公は、手燭を携へ、上の袂を細目に明て、様子を見玉ひけるが、出

來り玉ふ。是を見て

連左「差詰つたる難儀にせまり。身の置所なき此娘。父親は知れず母親は死に。廣い世界にたよりの無い不便な子供。少しの間で宜しう御座ります。お匿ひ成すつて下さいまし。どうぞお願ひ申

します。

尼公「どなたかは存せぬが。人を匿ひ隠すと云ふは。寺方にてはきつい法度。それが佛道で

は御座りますまいがなア。

尼公の顔を見詰れば。尼公も連左衛門の顔を見て、其人と知り玉ひて

尼公「これなる子供は此尼か……

お節の手を取つて、つツと袂の内に入り、はたと立たまふ

連左「アツ有りがたう存じます。

林蔵「アレ表に聞ゆるある人音。サア早くお隠れなせエまし。

連左「それじやア。林蔵さん……

林蔵の厚意にて、本尊佛の蓮臺の中に隠る。林蔵は素知らぬ振にて、蠟燭を次替て居る。此時次の間の袂を、手荒く引明て、鬼兵衛先に立ち藤太郎、九平治等あとに續きて入來り、林

蔵を捕へて

鬼兵「オイ。此お寺へもしや子供づれの落人が。來やア仕ねエか。

林蔵は、鬼兵衛の顔を見て、愕きたれども、心に期したる事なれば左あらぬ体にて

林蔵「イ、エ。そんな者は参りませんね。

鬼兵「ナニ來ない事があるもんか。余が跡を附けて來たのだへ。隠し立をすると。汝までが同罪だ

あはれ淨世……

ぞ。

林蔵「何と仰しやツても。そんな者は参りませんよ。夫が怪しいと思ひなされるなら。お捜しなすツて御覽なせエ。

心を据たる返答に。流石の鬼兵衛も不審を成して

鬼兵「それじゃア矢ッ張り淵崎で。

藤太「落たに違エは御座エませんよ。

されども鬼兵衛は、疑念いまだ霽れず、様子次第にて、此寺中を搜索せんかためらひたり。上手の襖の中には、鈴の響聞えてさツと押開き、松貞尼公紫衣に、葵の紋を織出したる臺賜の袈裟を掛け、柄香爐を持ち玉ひ、小尼二人經箱珠數箱を持ちて、左右に持し、尼四人其後に附隨ひて、夜の勤めに出來り玉ひ、鬼兵衛を御覽じて

尼公「其方たちは何者じや。

鬼兵「御用で参つた者で御座います。

尼公「シテ其御用とは。

鬼兵「浦賀御奉行所のお白洲を。繩脱いたした大事の囚人。それを詮議の御用で御座エます。

御用の威光を示して、嵩に掛れば。尼公は衣の袖もて拂はせ玉ひて、威儀を作らせ

尼公「大奥御用の御祈願所。不淨の者は立去られよ。

鬼兵衛は、幕府の威光に恐れて、逡巡する。お節は尼公の御衣の裾にかくれ。連左衛門は連

※

※

※

※

※

※

※

※

※

※

(幕)

是より第四篇までに五ヶ年を経過す

第四篇 慶應元年乙丑二月廿日之事

(一) 中村屋樓上 (午後)

但見る、座敷の大床には、墨繪の三幅對を懸け、其前には大花瓶に、櫻の折枝をしたよかに挿みたるを置き、棚には、料紙硯の箱どもを飾り、座敷には所々茵煙草盆等を配置し、所謂雅俗折衷の模様にて、容待の設けを成したるは是向兩國中村屋の樓上なり。此樓の女中お直、お竹、お千代の三人は忙はしげに打寄りて

お直「ほんに。かう忙しくツちやア。續かないねエ。

お竹「さうだよ。花の三月と云ふから。忙しいのは當然だが。けふ日のやうに。お客様が立こんでは困るねエ。

千代「それに。世間じゃア公方様が。長州征伐にお出掛に成るとやらで。ひどく騒々しいと云ふ事だが。

お直「お茶屋だの御芝居だのは。相變らずの大繁昌。併し此頃のやうに。お武家様の氣が荒くツて。

切ツたの張ツたのと云ふ騒があるのは否だねエ。

お竹「左様さ。一昨日の晩も廣小路で。立派なお侍が。天誅に行はれたとねエ。

千代「オヤさう。何時ごろだツたらう。

お竹「さうさ。家の吉どんが。御使に往た歸りに。見たと云ふから。大かた背の中だらうよ。

お直「怖い事だねエ。それで相手は誰だツたらう。

お竹「誰だか知れないが。大かたいつもの新徴組か。有志家の御連中だらうよ。

千代「有志家と云やア。今に瓜生さんや高木さんの御連中が。お出になるはず。

お直「支度はちやんと。出来て居るかねエ。

噂を仕て居る所に。次の間より

某「お客さまア。

女中「入ッしやいませ。どうぞごちらへ。

案内につれて、瓜生其外みな着座して。

あはれ浮世

寅次「ヤア随分熱かつたね。私は汗が出たよ。」

伊織「イヤ堤の雑沓には。流石の僕も辟易仕つたぜ。」

荒三「滿城の士女皆狂ふが如くで。埒口も無いには驚き入った。併し町人風情は兎も角も。あの群集の其の中には。御旗本御家人の族も。見掛たやうだが。」

熊藏「容易ならざる當今の御時勢。將軍家には又もや再びの御上洛にも相成る御模様。皇國の形勢は一髮千鈞の機なるに。」

十兵「遊墮に流れ。騎奢に耽る徳川武士。あれじやア公武の御合躰も。文武二道の改革も。中々行はれさうも無い。アツ徳川三百年の天下も。是切りだなア。」

伊織「誠に貴君の詞の如しだ。我々有志は慷慨に堪へられぬが。瓜生君。ナント左様では御座らぬか。寅次「何にも御説の通りで御座るが。抑も士氣の振はぬは。御直參ばかりで無い。諸家諸藩も其通り。併し徳川氏の天下。是切なりとて傍觀するは。不忠の至り。」

伊織「それ故にこそ我々が。思ひ立たる此度の大義。」

荒三「花見歸りにかこ附て。今日此に集會なし。熊藏「相談いたすも畢竟その爲め。」

十兵「瓜生君の御發議が。」

四人「承はり度もので御座る。」

寅次「追々に。申述ると致すで御座らう。」

此前より、蛇の道鬼兵衛は、尋常の町人容に扮して此家に来り、いたく酒に酔たる振して隣席に倒れ、襖の小陰に肱枕して睡を粧ひ、耳を澄して此有志家輩の密議を聴き、時々首を擡上げて、座敷の模様および其人物の面體容貌等を覗ひ居れども。此方にては更に心附かず。女中は此間に茶菓子を出して

お直「直に御酒を差上ませうか。」

寅次「イヤ。少し話もあるから。卿等は此を遠慮してくれい。話が濟めば直に手を叩くから。」

女中「畏まりました。」

三人とも打揃ひて退く。寅次郎は膝を進めて

寅次「御密談いたし度は。外でも御座らぬ。恐多くも將軍家。此度の御進發。長防兩州御征伐の思召し。甚以て道理なき事。皆々「なんと云はるよ。」

寅次「既に我々同志の者が。参謀と仰ぎたる鞠子金之丞。かの仁とても同意見。抑も毛利家御處分は。昨年尾州總督殿。廣島へ御出張相成て。事落着に及びしを。京都にては會桑二藩。當地にては御老若。御役人の方々が。廣島處分に満足せず。無名の軍を起すとは。返すくも不策の至り。伊織「其儀は一同同論ゆゑ。此程よりして其筋へ。一度ならず二度三度。差出したる意見の建白。いかに閣老參政がた。無智闇弱の寄合でも。分らぬ事は御座るまいに。……」

寅次「所がそれは大違ひ。御評議愈々相決し。御征伐と事定まり。遠からぬうち御軍令。諸藩へ向けて御發しに。相成る事に決議いたした。皆々「エイ。」

寅次「是と申すも畢竟は。政府に立たる奸吏ばら。將軍家をば墾附なして。陰かに私意を挟み。正義を枉る故の事。此上の進退は。諸君は如何召さるよか。御所存のほど。寅次郎。篤と承知いたしたう御座る。

伊織「憎むべきは奸吏のやから。斯く相成る上からは。早く檄文を相發し。江戸表は申すに及ばず。近國所々の同志を集め。其人數にして幕議を抑へ。

荒三「御聞入なき其時は閣老たりとも用捨は無い。正義の矢先に射倒して。無謀の軍を止めますが。

熊藏「幕府へ盡す御忠節。

十兵「所存は斯の通りで御座る。

寅次「いみじくも申された。我等とても其通り。實は左様に存せしゆゑ。此程よりして心を碎き。機文並びに義舉の手續。ひそかに工風を運らして。凡は斯の通りで御座る。數通の書面を懐中より取出して見する。

伊織「イヤ行届いたる御計ひ。我々甚だ感服いたせば。

荒三「素より以て一味同盟。心は金鐵動き申さぬ。

熊藏「但し鞠子金之丞の姓名。いまだ是れに見えませぬは。

十兵「いかど致した理で御座るな。

寅次「イヤ。その金之丞へは。未だ相談いたさぬが。若手なれども智勇勝れし金之丞。異存なしとも申されねば。わざと後に相廻し。今日これへ呼寄せて。御同様打揃ひ。説得いたす所存で御座る。伊織「ム、至極の立案。併し噂に聞けば。鞠子金之丞は。此程よりして女色に溺れ。既に新徴組の御用達。禮部南之進が。娘に懸想し。現をぬかして居るとの風説。

荒三「そればかりで無い。柳橋の唄女。お茶とやら申す女も。彼に懸意を致すとやら。言う様ない

あはれ浮世

柔弱放蕩

熊藏「是へ参らばよい折から。思ふ存分言懲し。

十兵「改心させると致す御座らう。

寅次「イヤ早まり玉ふな各方。たとひ女色に耽るとも。すワと云ふ其時に。逡巡いたす鞠子で無い。

まづ其事は。自分へお任せ下されい。扱かう相談が極ツたら。一酌しては。どうで御座る。

伊織「尤も御同意。實は内々。渴望いたして罷り居つた。

荒三「僕とても其通り。イヤ酒が無くては豪傑も。英氣が十分發しませぬで。

熊藏「なれども。酒あれども肴なし。肴あれども美人なしでは。何とやら酒席の味が。

十兵「快活で御座らぬが。瓜生君の方正謹直。その儀はどうやらお嫌ひらしいが。

寅次「ハ、ハ、ア。夫ほどまでに人情に。遠い男とお思ひなさるか。……

掌を打鳴らせば、ハイと答へて女中三人出來り

お直「御用で御座りますか。

寅次「ム、。まう用談も濟だに山つて。御酒を持つて参つたが宜いワ。

畏つて女中三人は退き、直に柳橋の唄女お榮、お金、お常、小清、女中と俱に出來り、配膳な

して、杯の獻酬に及ぶ。

お榮「お話しばかりでは。陰氣じやア有りませんか。少し弾ても宜で御座りませう。

寅次「イヤ三絃は常節から。すこし遠慮いたして貰はうよ。

伊織「ハテ左様で御座るか。僕は久し振で。例の美音を相發し。是れに侍べる美人等を。惱殺し様と存じたに。

熊藏「イヤ高木君の音聲では。魂消はきツと致さうが。惱殺などとは思ひもよらぬ。ワハ、ハ。

荒三「ワハ、ハ。惱殺と云へば。コレお榮。貴様は鞠子君を惱殺して居るさうだ。

十兵「大さう親密だと云ふ事だが。若いくせに怪からぬ。

お榮「誰がそんな事を申しましたか。そりやア全く浮名まうけ。磯のあはびで。先様が御堅いから。

嫌らしい事はありませんよ。

顔を紅葉して分疏する。此時女中は、次の間より出來りて

お直「モシ瓜生さま。鞠子君が入ッしやいましたか。

寅次「さうか。是へ御通し申してくれい。

お直は承はつて退けば、お竹は別に膳部を一ツ持出し、寅次郎の差圖にて、上席に置く。邸下

より鞠子金之丞、提刀にて出て来る。是を見て

寅次「ヤア鞠子君。

皆々「どうぞ此方へ。

金之「御免下され。

座敷に通り着座して

「大きに遅刻いたして恐縮千萬。シテ今日御一同の御集會。その御相談の趣意と申すは。

寅次「先ほどより。是なる一座の決議と申すは。先づ此通りの趣意で御座る。

懐中の書面を取出して見すれば。金之丞は上の一枚を見て。唄女女中等に向ひ

金之「御前がた。お氣の毒だが少しの間。あちらへ往つて下さいな。

畏つて退座するを待ち。盡く書面を道覽して

「各方には此通り。御決心これあつて。檄文までも相發し。事を舉げんす御所存なるか。

寅次「いかにも。

金之「若輩の金之丞。各方の決議に向ひ。異存を述ぶるは失禮なれど。此一條は。甚だ以て輕卒至極。

寅次「なんと仰しやる。長防再度の御征伐。宜しからざる旨の建白。元來貴君の御發議では御座らぬか。

伊織「其實行の決心を。輕卒至極と云はるよは。如何の理か。承はらう。

金之「勿論陳述いたす所存。再度の長防御征伐。飽まで御諫め申上げ。御止め申すは。我々同志の

心底なれど。御聞入れ無きとて。幕府の失躰を相鳴らし。烏合の人数をかり集め。恐多くも御膝

元を。相騒がし。剩さへ。幕府の大臣執政たる。閣老方を初とし。奸吏と名けて。政府の有司を

殺戮せん事。取も直さず謀叛の所業。たとひ一味の本心は。忠義一途であらうとも。其形迹より

論ずれば。暴舉の罪は免れ難し。ナント寅次郎殿。左様では御座るまいか。

寅次「ム、一應は御尤。去りながら。いま切迫の場合に臨み。順序を論ずる時で無い。倒行逆施は臨

機の計畫。

金之「シテ其計畫が圖に中ると思召してか。去とては無着千萬。日ごろ不斷口頭では。天下の爲だ。國

家の爲だと。口賢しく辯じ散らし。張臂なして力身でも。スワと云ふ其時に。義を鐵石と固く誓

ひ。命を兎の毛と捨る武士。大勢あると思ふてか。各方の見積りでは。二千は慥に應ずると。引

當にして御座れども。事を舉たる其時に。集まる者は百か二百。それで事が成せまするか。

伊織「アイヤ。そりや御自分の見積り違ひ。先づ府下にては。新徴組の三分一は。必らず我等に應ず

る手筈。次には水戸の有志輩。その外薩州。備前。因州。在江戸の諸武士。いづれも會合いたす

あはれ浮世

は必定。この人数が總射に。集り来る其時は。五千有餘と存ずれど。内端に積つて。二千はきつと集り申すワ。

金之「然らば。其二千の人数。きつと集り参つた所で。其人数にて何と召さるよ。當時幕府の御人数。用だつ者は少ないが。奥詰銃隊。傳習歩兵。その外庄内。越後の人数。これを以て攻寄なば。勝利は尤も覺束なし。夫でも見事に除奸の計畫。行はれる見据が御座るか。

荒三「ナンノ。取るに足らざる幕府の弱山。人数は何程多勢でも。打つて散らすは手易い事。金之「手易く打て散らすにしても。二千の人数の兵器彈藥。その御用意は十分に。相整ふて居りますか。まッた糧食糧重まで。用意なくては戦争の。出來ると云ふ筈は無いもの。其の邊の御支度。は。何とて御座る。

皆々「サア夫は。

金之「サア夫は。……それ御覽じろ。其用意。整ふては御座るまいがな。是ぞ即ち輕卒至極と申した理山。よも誤りでは御座るまい。

寅次「然らば貴君の御所存は。

金之「斯る輕舉を思ひ止まり。唯尋常に飽までも。御諫め申すが一途の見込。

伊織「シテ御聞入なき其時は。

金之「是非に及ばぬ。打揃つて御城へ上り。御立關前にて腹かつ切り。刃に伏して諫むるが。まこと忠義の武士の魂。

熊藏「言はれな鞠子殿。貴殿には。詞巧みに議論を述べ。此一舉をば曖昧に。中止させんと致す事。命が惜いゆるで御座らう。

十兵「夫と申すも。禮部蘭之進とやら申す。浪人もの娘に戀慕し。女色に心を奪はれて。根性腐つた故の事だ。

金之「ハ、ハ、ア。それはまたきつい推量。なるほど常節根岸に住居いたす。禮部が娘へ。此金之丞。懸想したに相違は無いが。女色に心を奪はれて。一旦生死を誓つたる。誓詞に背く武士では御座らぬ。

寅次「さすがは鞠子金之丞殿。立派な御詞。但し我々は。既に一味の臍を固め。かくまで相談相極めたれば。貴君の御意見。一理あるも。承服いたさぬ。然る上は貴君の進退御心任せ。御望とならば。何時なりとも貴君の血判。御返し申すと致すで御座らう。

金之「ム、。忝うは御座りますが。牛王を血汐に相穢し。日本六十餘州の神祇を。驚かしたる上

あはれ浮世



からは。變心いたす所存は御座らぬ。事起りなば願付て。死ぬるも生るも。俱に一所が同志の誓ひ。ナニ成敗は時の運。自分が個様に論じたとして。少しも勇氣を挫かすに。十分策を運らして。事を成すのが第一肝要。

寅次「それ承はつて安心いたしました。併し最前よりして餘ほどの手間どり。なんと退散いたさうでは御座らぬか。

伊織「伺さま。檄文其外種々の手筈。殊には又今夜の會合。用事も澤に有る事なれば。皆々「退散いたさう。

寅次郎は手を打鳴し、女中を呼び、金子を渡して、諸事を済ませ、唄女等が禮を述るを汐に、各の刀を提て立上り。

寅次「鞠子君。サア御一所に。

金之「少々外に用事も御座れば。御構ひ無しに御一步お先へ。皆々「然らば御免。

寅次郎、伊織、荒三郎、能藏、十兵衛の五人には、唄女等附添ひて、廊下の方へ赴きて去る。女中等は、座敷の膳部などを、取かた附る。鬼兵衛は、寅次郎等が去るを覗ひて、密に後の

襖を明けて去る。

金之丞は、座敷の障子を明けて、後の縁側に出たりけるが、再び座敷に來り、原の座に復して、默然として暫く考へて

金之「アツ瓜生を始め。同志一味の思ひ立ち。心は金鐵忠義一途に凝たれど。其計畫を達せんは。却以て覺束なし。斯る勇士を暗々と。討死さすると云ふ事は。是も御運の未なる歟。去ながら。我とても亦同志の一人。事の敗れに心憶し。變心いたすは武士の恥辱。どうで一味の始より。命は素まり捨る覺悟。ナンノ人間僅が五十年。この味氣ない世の中に。生長らへて居たとても。馨い事もありはせまい。花は櫻に人は武士。惜い盛りに散るが命だ。……それに附けてもあのお節。未練には似たれども。せめて一筆書送り。モ一度逢ッて。此世の名残を。惜み度ものじやなア。

此時正面ノ障子ヲ取リ、床の間の棚に置れたる硯箱。これ幸ひと取出し、手紙を書く。

(下座の唄清元掛り)

唄「かはるまいごと神かけて。契りし中も情なや。いまは仇なるうき別れ。筆のいのち毛きれば。てよ。われも命は朝の露。

あはれ浮世

唄女お榮は、此前より隣席に來り、かの鬼兵衛が去たる跡に佇立み、金之丞にも言はんと、機を覗ひたるに、金之丞が獨言に、お節が事を言出したるを聞て、悔りなし。

お榮「ム、それじゃア鞠子さんには。お節さんと云ふ言替した深いお方が。遠から出來て居たのじやなア。

唄「さうとは知らずたつた今。お側で酌して居たまでも。

「私しに心があるのかと。悦んで居た胸の中。

唄「うぬほれ過た拙さは。われと我身で恥かしい。

「さうしたお方があるならば。なぜお座敷で逢ふたびに。程のよい事はしやんした。

唄「憎らしいほど嬉しいが。迷ひの種の岡惚れに。なぶられるのを知りながら。知らぬ振して道欲な。

お榮は、泣聲忍びて嘆きけるが。氣を取り直して

「いや〜。恨みと云ふは私しの愚痴。こつちの勝手に惚たばかり。先様では御存知ないこと。

アツ無い縁じやと諦らめて。噂を取つた男嫌ひ。奴のお榮で一生を。暮すが責めて心の操。

唄「おゆるしなすつて下さんせと。粹を賣る身も野暮になり。素人じみるぞ誠なる。

金之丞は、手紙を書畢りて、封を爲して

金之「此通り。手紙は書て見たものよ。誰に頼んで届けやうか。ハテ此使には困つたなア。

お榮は、思ひ切つて、隣座敷より出で

お榮「鞠子さん。其御文の御使は。私か致しませう。

金之「夫では。先ツきからの様子をば。

お榮「ハイ。皆存じて居ります。届先はお節さんと云ふお方で。御座りませうがなア。

金之丞は少しく考へしが。

金之「いかにも。其お節へ此手紙を。今日中に。どうか届けて下さらぬか。

お榮「承知しました。今日の夕方までには。吃度お届け申します。

手紙を請取りて、帯の間に入るよ。此時候の外にて

皆々「ひどいよ〜。

聲を掛けて。お金。お常。小清出で來り

お金「鞠子さん。ひどう御座いますよ。晝日中差向ひで。

お常「お榮さん。騙つても宜よ。餘りだからさ。

あはれ浮世

小清「私たちの寡連中に。見せつけるのは。三人「ひどいね。」

お榮「アラ姉さん。全くそんな。意氣事じゃありませんよ。實の所が。鞠子さんにお使を頼まれて。此通り。

帯の間より。手紙を出さんとす。金之丞は扇にて、其手を押へ、お金等に對ひて金之「ハテ戀知らずの顔揃ひ。邪魔をするとは。野暮だらうぜ。

(道具廻ル)

(二) 向兩國橋畔 (雨中)

此は兩國橋の東詰、即ち本所の方なれば、此頃の事として、兩側に蘆簀張の見世物小屋、竝に水茶屋等相並びたるが、俄雨にて、いづれも寂寥たり。

穴熊重太は吉原下駄を穿き、大極傘を差し、闇黒牛松は跣足にて、雪駄を帯に挟み、相合傘にて、一ツ目の方より來りけるが、此所に立止りて

牛松「エ、親方。ひどい雨に成りましたぜ。

重太「さうよのツ。併し花時分の通り雨だ。今にまう止むだらうよ。そこで牛や。汝いよく番へ往てくれるのか。此雨だから。今日で無ツても宜ぜ。

牛松「ナニ。譯ア無エ。つい一ツ走りだから。往つて來ますよ。向ふだつて挨拶を。待つてるだらうから。

重太「それじゃア。御苦勞だが。さう仕てくれい。だが牛松。濡れて往ちやア見とむ無エや。下駄傘を買つて往けエ。

俄より金を出して渡せば

牛松「有がたう御座エます。そこで親方。尊公は是から直と歸エりますか。

重太「どこへも寄らずに直と歸るよ。夫に今夜は汝に話した變もの。おれが一番世話場を見せて。小遣エ錢にする積りよ。

牛松「さうだ。變物が根岸に居ると言ひなすツたが。一體どう云ふ話で御座エますね。

重太「ナニサ。此節根岸に引越して來た。禮部なんとか云ふ漢が。病氣その外で。難澁してると云ひさへすりやア。見ず知らずの他人であらうが。自分で見舞ツて金をくれると云ふ評判。そこでおれが一番。病人に成て。其奴から。見舞の金をせしめやうと云ふだけの仕組さ。

あはれ浮世

牛松「ハ、ハ、ハ。そいつア面白エや。併し親方。尊公は何に掛けても。取る方なら抜目は無エなア。重太「當然よ。此せち辛エ世の中に。幾許だらうが。唯くれると云ふ施主があるのに。夫を取らなけりやア。金の冥利に盡果らア。牛松「違エ無エ。それじゃア親分。重太「牛や。御苦勞だのウ。

兩人は別れて、牛松は番場の方へ赴き、重太は兩國橋の方へ往く。蛇の道鬼兵衛は九平治と俱に、見世物小屋の蔭より出て、重太の後姿を見送ッて

鬼兵「エ、九平治。彼奴ア先年程ヶ谷に居た。穴熊重太だぜ。直と家へ歸ると往つたが。御苦勞だ。躰跡を附けて。慥に家を見届けてくれい。

九平「エ、承知しました。だが親分。彼奴ア直に巢取にしても。夫程の代物ではありますめエせ。鬼兵「ナニ。彼奴をべた所で。碌な引合も出やア仕めエが。ひよつとしたら彼手から。禮部蘭之進の身の上が。

九平「エ、新徴組の御用達で。評判のいよ禮部蘭之進。あれがどうしましたね。鬼兵「サア。その蘭之進と云ふ男が。悪玉吉五郎じゃア無からうかと。思ふからよ。

九平「だッて尊公。悪玉吉五郎は十年前。相州淵崎で。崖の上から海へ落て。全く死んだじやア御座エませんか。

鬼兵「否々。海へ落ても。死骸が上ツたと云ふじやアなし。夫にまた其夜の事だが。子供を負ッて鎌倉の松ヶ岡の尼寺へ。逃込んだ男があつたと。慥な風聞。あの時はあの比丘尼めが。御城風を吹かせたゆゑ。家捜しは仕なかつたが。一旦かうと思ひ込んだら。何年経ても忘れやア仕ねエ。夫からして此間、途中でちらりと見掛けたは。噂の高い蘭之進。顔も容もすつかりと。昔に變つて居たけれど。頭抜に大きい眼の玉は。どこやら覚えのある而付。何でも今夜ア重太めを。御強に掛けて締上て。手蔓を捜して見る積りだ。

九平「なるほど夫で分りました。ムツ世間で噂をする通り。御用に掛けちやア。親分は凝性で御座エますねエ。

鬼兵「是が即ち。勤を大事にするからよ。九平「それじゃア親分。

鬼兵「旨く遣てくれい。九平治は、兩國橋に掛つて、重太の後をつけ。鬼兵衛は一旦一ツ目の方へ往きて、あたりを見あはれ浮世

廻して、又再び見世物小屋の蔭に忍ぶ。兩國橋の方よりは禮部蘭之進、大小長合羽、娘お節、れも長合羽にて、いづれも下駄を穿ち、雨傘を差して、此方へ渡来るに。橋畔のかなたなる、蘆笥の内より、五分切林藏、竹笠赤合羽にて出来り、蘭之進に對ひて

林藏「旦那。ちよつと御俵ち下せエまし。

呼止めて、笠を取て

旦那。おめづらしう御座エます。

蘭之「ム、誰かと思つたら林藏主か。久しく逢はなかつたが。今では何所に居なさるね。

林藏「相變らずのぶらくで。此節じゃア。有志家さんたちの。小使を仕て居ますよ。

蘭之「さうか。御同前に取る年だ。辛抱しなさるが良よ。シテ余を呼止たは。

林藏「旦那。ちよつとお耳をお借しなせエまし。

低聲にて、彼鬼兵衛が、蘭之進を怪しみて、跡を附る事を語れば。

蘭之「親切に忝い。今夜は少し用事もあれば。夫を濟して明日からは。當分家に居ないと仕やうよ。

林藏「シテ旦那。今日はどちらへ。

蘭之「ナニ今日は此娘の母の命日。靈岸寺まで佛參にゆく所じや。

林藏「へエ。左様で御座エますか。

蘭之進は、懷中より金子を出して、紙に包みて、林藏に與へて。

蘭之「林藏主。少しばかりだが。小遣だ。

林藏「これを御貰ひ申ましちやア。

蘭之「なんの煙草の代だね。サアお節。早く往うか。

別れて、蘭之進はお節をつれて向ふの方に去る。林藏は見送りて

林藏「アツ禮部様は。どうしてもゑらい御方だなア。

持たる金子の包を頂いて、懷中する。此時兩國橋の方より、給仕五郎吉とて十四五歳の小供、

小倉織の義經袴を高く股立に取り、一刀、跣足にて、大きな風呂敷包を背負ひ、雨にぬれながら出来り、林藏を見て

五郎「オイ林藏爺さん。瓜生様はどこに御座るね。

林藏「おいらア先ツき。廻章を持て出たツ切りだ。から知らねエよ。

五郎「さうかい。向兩國で俵て居るから。誂た品を取て来いと。仰しやツたが。お居なさら無じ

やア困つたなア。……爺さん。重くツて立きれ無いから。手傳ツて下してくんな。

林藏「ム、承知だく。」

蕭管張の内より、床几を持出し、五郎吉を手傳ひ、風呂敷包を下させて

「恐ろしく重いが。一體こりや何だへ。」

五郎「ナニ瓜生様の御誂の摺物よ。」

林藏「さうか。夫にしても五郎公。卿はまだ十四五だらうが。よく感心に。御奉公を仕て居るねエ。

そして卿の親父の重太兄イは。どうして居るね。相變らずの穴熊かね。

五郎「爺の事を云はれると。おいらア本統に泣たくなるよ。姉は兩國で藝者を仕て。おいらア此通り奉公して。兄弟兩人が働いても。爺ア些とも可愛想だと思つてくれねエから。

林藏「ナニ。重太兄イだツて。鬼じやア無し。今に氣が附て眞面目に成るよ。

懣めて居る所に。瓜生寅次郎、高木伊織、小濱荒三郎、山尾熊藏、松浦十兵衛は向ふより話をしながら來りて

寅次「まづ手順は大抵ついたが。鞠子金之丞には恐入ツたね。

伊織「併し。我々の除奸策に。不同意だつたは意外千萬。」

寅次「それは人々見込次第。併し義舉に及ばど有無を問はず。駈付んと答へしは。荒三「天晴なる彼が精神。高取りの御旗本には。稀らしい御人物で御座る。」

熊藏「それは格別。御噂あつたる檄文は。」

寅次「過刻給仕の五郎吉を。摺師方へ遣したれば。最早持参いたすで御座らう。

十兵「それさへ参れば。準備は凡そ出来たと云ふもの。」

寅次「サア参ると致さう。」

打連れて橋畔に來り、五郎吉を見て

「五郎吉それへ参つて待て居たか。シテ摺物は出来したか。」

五郎「へイ。唯今摺師から請取て。此通り。持て参つた所で御座ります。」

風呂敷包を示せば。寅次郎其外打寄て包を見て

寅次「よく出来いたした。ムツ糊壺まで用意したとは。五郎吉。其方の才覚か。扱々氣の利た給仕ではあるのウ。」

伊織「シテ瓜生君。この檄文の配布方は。」

寅次「直様。銘々手分いたして。配布せうか。」

あはれ浮世

あたりを見廻し、橋詰に建たる大きなお開帳札を、抜取り來りて

「各方、取あへず其檄文を一枚。これへ御貼り下され。」

皆々「承知いたしました。」

開帳札へ貼付て

荒三「是をば原の所へ建置ませうか。」

伊織「建置くのも面白う無いが。」

十兵「何か工風は御座るまいか。」

寅次「ナニサ。おれなる小使爺に。此高札を擔がせて。先づ廣小路から本町通りと。歩行せて見る

僕の愚案さ。

伊織「何さま至極の御名案。」

皆々「宜しう御座らう。」

是を聞いて林蔵は驚いて

林蔵「エ、私が其高札を擔いで。歩行ので御座いますか。殿様。そりやア可ませんよ。ひよつとすと縛られますから。」

寅次「ナニ。縛られる氣遣は無い。若も町方が尋ねたら。此方共の姓名を申して聞せい。」

林蔵「デモ何だか氣味が悪くツて。」

伊織「エ、御申付を否じやと申すか。」

林蔵「イ、エ。否じやとは申ませんが。」

寅次「ハテ參れと申すに。」

荒三郎等、林蔵をせき立て。右の高札を擔がするに。林蔵頗る恐れを成す。是を見て「ハ、ハ、ア臆病ものめが。」

(道具廻ル)

(三) 兩國廣小路 (黄昏)

俄雨は果して晴たり。廣小路の茶店の床几に。蛇の道鬼兵衛は、腰うち掛けて、人まち顔なり。茶店の娘は、鬼兵衛に向ひて

茶娘「親分。お茶をモ一ツ上げませうか。煙草盆のお火が消は致しませんか。」

鬼兵「ナニ構はずとも可よ。直に往から。」

あはれ浮世

娘「マアおゆるりと成ッても。可じやアありませんか。

鬼兵「さうゆるりとも仕て居られ無いよ。夫にしても今の降はひどかったね。

娘「ひどい降で御座いましたよ。私どもの店は俄雨が。一番禁物で御座います。びつたりとお客様

が。無くなりなますから。

鬼兵「さうだらうて。併し此安排じやアあがりさうだ。大分南の方が晴て来たやうだ。

此時兩國橋の方より。五分切林蔵。檄文を貼付たる高札を擔ぎて出来る。同時に甲乙兩人の武

士。横山町の方より出来る。行合ひ様に。高札に目を注て

武士甲「アツちよツと待て。

林蔵「へい私で御座いますか。

武士乙「いかに其方だ。

林蔵「へい。

武士甲「其高札に貼たる書付。

武士乙「一讀いたしたい。

甲乙は右の檄文を一讀して

武士甲「長州征伐が宜しく無いと。飽まで論じ。同意を募ッて其事を諫争せんとの思ひ立。

武士乙「會合場所は四ツ谷香龍寺。こりや愉快じや。ナント新六殿。貴殿は如何思はるか。

武士甲「僕とても。固より感服いたして御座る。事宜に寄つたら會合場所へ。

武士乙「御一所に出掛けて見やうか。

林蔵「モウ御用は。濟まして御座いますか。

武士甲「いかに相濟申した。

武士乙「高札。御大儀で御座る。

甲乙は淺草御門の方へゆく。林蔵はホット溜息を吐て

林蔵「アツ怖かつた。斬られるのかと思つたぜ。

高札を持って、淺草御門の方へ往きに掛るを

鬼兵「オイ高札。ちよつと待たり。

聲を懸けて、床几を離るれば、林蔵も亦愕いて立止る。鬼兵衛は、竹笠の内をのぞき込み、林

蔵の顔を見て

「少し聞きたい事があるから。マア此へ來な。

あはれ浮世



152.

床几に腰を懸さすれば。林蔵は高札を傍に置き。竹笠を脱て  
林蔵「親分。御久しう御座います。」

鬼兵「五分切。どうだへ。此節は面白エ事があるかね。」

林蔵「どうして尊公。かう年を取て若碓しちやア。形無しで御座エますよ。」

鬼兵「さうでも無からう。夫でもさアとなりやア。昔し取つた杵杵だから。引は取るめエてのウ。」

林蔵「所が。其方は十年以來ふつつりと思ひ切て。今じやアうぶの人間に。成りましたよ。」

鬼兵「さうかね。時に五分切。聊いでしたが。向兩國で逢つて。咄を仕て居た。娘づれの御武士。」

ありやア何と云ふ御人だへ。

林蔵「へエあの御武士様で御座エますか、ありや矢ツぱり御武士様で御座います。」

鬼兵「隠す事は無エよ。ありやア禮部蘭之進と云ふ人だらうがね。」

林蔵「イ、エ。そんなお名前のお方じやア御座いません。あの御方は私が使はれて居ます。瓜生  
様や高木様の御仲間。中橋様と仰しやる方で御座います。」

鬼兵「巧く云ふぜ。」

林蔵「イ、エ。本とうで御座いますよ。」

153.

鬼兵「それじやアさうと仕て置て。時に五分切。余やア少し思ひ附た事があるから。聊その笠と合羽  
と其高札を少しの間。おれに貸てくん。用さへ濟めば此家へ預けて置から。直に取りに來ねエな。」

林蔵「これをお貸し申ちやア。少し困りますが。」

鬼兵「何の困る事があるものか。夫とも達て貸さねエと云やア。おれの方にて了見があるぞ。」

林蔵「ナンノお貸し申さぬとは申ません。サア親分。これで宜けりやア御遣エなせエまし。」

赤合羽を脱ぎて、直に鬼兵衛に着せんとすれば

鬼兵「マア待ちねエ。おれだつて支度を仕なけりやア着られ無エワ。五分切。その草鞋を脱ぎな。」

林蔵に草鞋を脱がせ、おのれは足袋を取て、右の草鞋を穿きて居る。其間に林蔵は、手早く矢  
立の筆を取出して、急ぎ竹笠の上に、このものたんさくと云ふ假名文字を、筆太に書付置き、

鬼兵衛が支度の出來たるを見て、赤合羽を着せ、右の竹笠を冠らせる。鬼兵衛は、少しも心附  
かずして是を冠り、高札を持ち立上りて

「五分切。聊少しの中。どこか其邊へ往つて居てくれい。」

林蔵「宜しう御座います。」

横町の方へ姿を隠す。鬼兵衛は、斯て林蔵になり澄して待て居る所に禮部蘭之進はお節を作り  
あはれ浮世

(此時は兩人とも合羽を着せず) 傘を畳みたる儘にて携へ、兩國橋の方より出來り、鬼兵衛を見て林蔵と思ひ、詞を掛けんとせしが、竹笠の上の文字を目早く見て、知らぬ振して行過んとす。

鬼兵衛は、ハテナと思ひながら、進みよりて

鬼兵衛「モン旦那。禮部様々々。

聲を掛くれども。蘭之進は見返らず。お節はそれと心附かねば小聲にて

お節「御父さま。先ツきの……

云ひ掛くるをかぶせて

蘭之「先ツきの品が欲しいと申すか。

言紛らす。同時に給仕の五郎吉は大きな竹籠を、輪に廻しながら、橋の方より來り、鬼兵衛を林蔵と見誤りて

五郎「オイ林蔵爺さん。瓜生の殿様が。急に用があるから直に來いと。

鬼兵衛返詞をせねば、五郎吉は愈々せき立て

「爺さん。何をほんやり仕て居るだへ。早く來ないかねエ。

引張れども、鬼兵衛は更に動かず、五郎吉は立腹して

「エ、強情な爺だなア。來なけりやかうして。

右の竹籠を、鬼兵衛が首に竹笠の上より引掛けて

「連れて往くわい。

力に任せて、鬼兵衛を引ばり、橋の方へと誘ひゆく。蘭之進は是を見ながら、空を仰ぎ、傘を

蘭之「マタほろくと。降て來たやうだ。

傘を廣げて、お節を入るよ。

(幕)

第五篇 (慶應元年乙丑三月廿日之事)

(一) 入谷穴熊住家 (薄暮より夜)

入谷の片ほとりにて、軒傾き壁くづれたる荒家、片折戸の柱には **三好屋重兵衛** と書たる札を掛たり。是れ穴熊重太が住家なり。

重太が程ヶ谷以來腹心の子分たる、ぶらり六之助。腰押兵太の兩人は、夜食の支度に掛り、兵太は膳拵を爲し、六之助は酒の燗を成して

六之「兵太。汝の方の支度は可かい。酒の燗はもう出来たぜ。」

兵太「此方もすつかり出来たひ。夫じやア親方に知らせやうぜ。」

六之「さう仕やう(奥に向ひて)親方。夜食の支度が出来ましたぜ。」

重太「ム、さうか。大層手廻しが宜のウ。烟草盆を提て。奥より出来り。着座して膳の上を眺めて

ヤア素敵に御馳走があるね。」

六之「さうよ。先きお前の留守に。魚屋の初が滅法に良い平日を。持て来たから。煮附て置たよ。重太「さうか。夫に此めじも旨さうだなア。」

兵太「そりやア坂本の魚辰で買ったんだもの。素敵に新しい刺身だぜ。」

重太「剛氣だく。燗が附たら一杯やらう。茶碗を取て、六之助に酌をさせ、ぐつと呑乾して

オ、ヒエ。どうだ六之助。兵太。汝も此へ来て。飲まねエか。」

六之「エ、有がたう御座エます。兵太「どれ御相伴と出掛やうかね。」

三人にて膳を取巻き、飲食しながら重太「時に牛松は。モウ歸ッて来る筈だが。」

六之「牛はどツかへ。廻りましたか。」

重太「ナニ。先ツき番場へ廻ると云ッて。別れたのよ。」

兵太「番場じやア。ひどく手間どれる氣遣は。ありませんかねエ。噂の最中に。闇黒牛松竹の皮包を提けて。歸り來り

あはれ浮世

牛松「親方。いま歸エりました。

重太「ヤッ御苦勞だったイ。今も汝の噂をして。待つて居た所だ。サア一杯やんな。

牛松「あり難う御座エます。

六之「牛兄イ。番場の方の片ア附たかね。

牛松「附かなくつてよ。家の親方が是々言つてゐるからと。話を仕たら向でも。さう云ふ譯なら宜う御座エますと。承知したい。

重太「さうか。別にぐづぐづとは。云は無かつたらう。

牛松「そこア親分の息が掛つて居ますもの。野暮な理窟は。言はせア仕ませんよ。

兵太「家の親方の威勢は酷いもんだなア。番場の芳だつて。肩書のある漢だぜ。それが親方の云ふ事を聞くんだから。強盛だアね。

重太「ナニサ。先が悪黨だけに。話しやア早エや。

牛松が提て來たる竹皮包に、目を注て

牛や。そりやア何だへ。

牛松「番場の話でソツかりと忘れて居た。こりやア歸エり道に。淺草で買て來た天ぶらよ。親方が

好だから。お土産に持て來たが。まう冷たくなつて。食ますめエよ。

竹皮包を解いて、差出せば

重太「ナニ。まだ冷たく成て居やア仕ねエよ。淺草のはいつ食ても旨エなア。

牛松「時に親方。根岸の變り物が。今に來る筈で御座エませうが。まだ來ませんか。

重太「違エねエ。まだ來ねエが。今に來たら汝等ア。此酒肴を持て奥に往けよ。こんな所を見せちやア。肝心の狂言に障らア。

牛松「承知しました。

此に柳橋の唄女お榮は、箱屋の瀧藏を伴につれ、四ツ手駕籠を釣らせ駕籠昇二人根岸の方より來り、往來に歩を止めて

お榮「瀧どん。これじやア。あの手紙を。卿先の御嬢さんに渡してくれだに違いなね。

瀧藏「へい。儘に御渡し申しました。

お榮「誰も見ては居なかつたかへ。

瀧藏「丁度いよ都合にその御嬢さんが。御門の内にお居なさいましたから。お名前を聞いて。直とお渡し申しました。誰も人は見て居ませんでエした。

あはれ浮世

お榮「そりやア好かつたねエ。私やアあの曲り角で。駕籠から下て俵て居たが。大さう氣が揉たよ。それに何だか。奥深いお家の様だね。」

瀧藏「御門の内が一面に廣いお庭で。お住居はぐつと奥の方で御座いますよ。」

お榮「さうかねエ。」

物語りをなしたつと、重太が家の門口に來り、内を覗きて。振返りて

瀧藏「私やア此家に少し用があるから。卿。駕籠屋さんを連れて。此近所で支度をして。それから。迎に來ておくれな。あんまり遅くなつちやア。可ないよ。」

紙夾より金子を出して。瀧藏に渡せば

瀧藏「こりやア有がたう御座います。支度を仕たら直に參ります。……オイ若い衆さん。お支度を下すつたよ。」

祝二、三、「姉さんあり難う御座エます。」

瀧藏等は打つれて、阪本の方へゆく。

お榮は、案内をも乞はず、片折戸を明て入ば。重太は此音を聞付て、膳を押遣る。牛松等は、急ぎあわて。膳部酒肴を持て。奥に逃入る。お榮は沓拔の所に來りて、上りながら

お榮「お父さん。居ますかへ。」

重太「ナンダ。お榮か。エ、悔りさせやがつたぜ。」

お榮「オホ、ホ。私が來たからと云つて。何も悔りする事はありますまいに。」

重太「ナニ。外に來る筈の人があるからよ。それにお榮。もう日暮だが。汝いま時分どうして來たへ。」

お榮「ナニ御客様のお伴で。上野まで來たから。ちよつと寄て見たのですよ。」

紙夾より。紙に包みたる金子を出して

御父さん御小遣ひ。

重太「さうか。卿は感心に。親孝行だのウ。」

包を明て。金子を數へ。不興氣に

お榮「おれにくれた小遣が。たつた三兩か。」

お榮「三兩だつて。お前。それだけ残すのは。私の腕では。生容易ことでは無いよ。丸抱への身體で。机帳面な稼を仕て居るのなもの。」

重太「それが働の無エと云ふものだ。ナンノ藝者に出たからは。思ふさま。金のある客を引掛て。

絞り取るのが當世だ。馬鹿律義に堅くして居る間拔が。今時の藝者にあるものか。  
お榮「そんな嫌な事が。出来るものかね。」

重太「出来なくッてよ。おれが男親で構はねエから。汝そんな生利な口を叩きやがるが。御袋のお

六が生て居て見ろ。汝はな。疾に新宿か品川へ。賣落されて居らア。

お榮「そんな無慈悲な親が。何の國にあるものかね。」

重太「何だと。大事な親に向つて。口返答しやがつて。汝見た様な奴に。五兩か三兩の事で。鼻に掛られて堪るものか。」

大聲を發して罵りつゝ。金子の包を取て。お榮に叩き附れば、金子はそこらに散亂す。牛松は是を聞付けて、奥より飛で出で

牛松「ヤア姉さん。御出なせエまし。親方なんだね。偶に來なすつたお榮さんに。小言を云ツて。

重太「だツて汝。此奴が利た風な言を。吐しやがるからよ。」

お榮「いつ私がそんな口を利ました。」

牛松「マア宜から姉さん。此方へ御出なせエまし。」

重太を慰めて、お榮を奥へ連れて行く

重太「エ、あの俄鬼めが來たので。折角の酒が醒めて仕まつた。」

嗽きながら、落散つたる三兩の金子を手探して、取集めたるに、目數不足ゆる

エ、暗くツて見えねエや。オイ誰か來て。行燈を點てくれい。

六之「承知しました。行燈に明を點て、持出し來る。重太はその明にて、金子を拾ひ集むる。是を見て六之助は何か落しなすつたかへ。」

重太「ナニ金を散らしたからよ。」

拾ひ集めて。目數を調べて

丁度あつた。一朱だツて二朱だツて。無くなしちやアつまらねエ。

原の如く、紙に包みて、懐中する。

此時根岸の方より禮部蘭之進、一刀にて小提灯を携へ出來り、提灯を掲げて、片折戸を見て

蘭之「御免なさいよ。三好屋重兵衛君と仰しやるは。此方で御座りますね。」

重太は此聲を聞き、六之助に目くばせ仕て、奥に入らしめ、急ぎ押入より寐卷の破れ衣服を出し、行燈を吹滅し、病人らしき造聲にて

あはれ浮世

重太「ハイ三好屋重兵衛は。手前で御座いますが。誰様で御座いますか。病人で不自由で御座いますから。どうぞ其木戸を明て。御入り下さいまし。」

蘭之「ハイ。急に衣服を着替へ、病人の體を糞ふたり。蘭之進は、片折戸を明て入り、沓拔の所に來りて。蘭之「ハイ。ア。燈も點すに。くら暗で居なされるね。」

重太「ハイ。むだに行燈を點ますものも。勿體なう御座いますから。此通り。平常は消して居ります。誰様か存じませんが。御用なら此方へお上り下さいまし。」

蘭之「ハイ。私は根岸の禮部だが。御使であつたに由つて。お見舞に參りました。夫では御免なさいよ。」

沓拔より上れば

重太「ヘイ。禮部様の旦那様で居らっしゃいますか。こんな穢い所へ。御出下さいまして。恐入りまするで御座います。ヤレ。わざく御見舞に預りまして。あり難う存じます。旦那様。憚りながら一寸そのお提灯をお貸し下さいまし。行燈を點けますから。」

蘭之「サア。お點なせエ。」

重太「どうも恐入ります。(行燈を點て)誠にあり難う御座いました。」

提灯を返しながら。互に顔を見合するに。蘭之進は、見た事のある人物の様だとは思へども、些までに心附かず。重太も亦同じ思ひにて。怪を心中に起したれども、色にも見せずして

「御覽の通り。長らくの煩ひで。困り切ります。旦那様。御推量なすつて下さいまし。」

蘭之「フウ餘程。長い御病氣かね。」

重太「ハイ去年の暮から煩ひまして。足腰は利ませず。胸は通し痛みます。是が世に云ふ業病で御座いますよ。」

蘭之「さうか。夫じやアさぞ御難儀だらうが。シテ看病をするに御神さんか。御子供衆がおりますか。」

重太「所が尊公。女房は三年前に亡なりました。力に仕て居ました忤めは放蕩で。何所へか往て行方は知れず。今じやア獨身で御座います。」

蘭之「それはさぞ。御不自由で御座らうなア。」

重太「不自由どころか。三度の飯にも差支えて居りますくらゐ。それ故に尊公の御慈悲にあまへ。御縋り申して御座います。」

蘭之「却々私ぐらゐのものが。碌な事は出来ませんが。難儀な御方があると聞けば。捨置かれぬあはれ淨世

が私の性分。それで御尋ね申して見たが。失禮ながら餘ほど御困りの御様子だね。

懐中より。紙に包みたる金子を出して

「甚だ輕少だが。當座の御見舞。これで精分のつくものでも買ッて。お食いなさいよ。

重太は、此以前より應答の間に、其容貌言語に注意したるが、扱は其人なりと、心に覺りたれども、わざと左あらぬ體を繕ひ、右の金子を取り戴きて

重太「有がたう御座います。

と禮を述べつと、包の上より、指先にて金子を押し、其員數を探り、下に置きて、ぐつと様子を変へて

「外の人なら知らぬエ事。卿の見舞じゃア。是ばかりのはした金。お氣の毒だが貰はねエよ。突返へせば、蘭之進も様子を變へて

蘭之「私の見舞を。貰はぬと云つしやるは。

重太「オイ。卿おれが顔を忘れたのかい。十年前エ程ヶ谷に居た。有明の重太たぜ。

顔を突出しながら、蘭之進が傍に置たる脇差を遠くに押遣ッて

「お半の親類だと名乗ッて來て。預リッ子を連れて往つた。浦賀の年寄。萬里連左衛門と云つたな

ア。假の名。誠は悪玉吉五郎と云ふ。繩脫の大罪人。それだから汝のくれたはした金は。入らねエと云ふ事よ。

蘭之「ハテ怪しからぬ人違へ。余は決して左様な者で無いゆゑに。卿に逢つた覚えも無い。折角の見舞。受けぬとあればつひ夫まで。どれ歸りませう。

立に掛るを、重太はすかさず、蘭之進の手を押へて

重太「どっこい歸エさねエ悪い事にやア抜目が無エと。人に知られた穴熊重太だ。汝にやア思ふ存

分間かにやア成らぬ事があるわい。

手を取て引寄んとすれば蘭之進は其手を振拂ひて

蘭之「エ、何をいたす。

立掛る重太は蘭之進に組附きて

重太「泥棒だ。皆來てくれい。

奥より牛松、六之助、兵太、飛で出で、斯と見るより、重太に力を添へ、組つほぐれつ争ひた

るが、引窓の麻繩を以て、足をからみて、蘭之進を取て押へ、繩を掛けて

牛松「この畜生。爺のくせに仕やつて。馬鹿に力の強エ奴だぜ。

あはれ浮世



六之「ひどく骨を折らせやがつた。一體親方。此奴ア何者で御座エますね。

重太「何者でも宜や。其奴ア盗人よ。

兵太「へい此奴が盗人。それでどう仕まするね。

重太「其奴を庭へ引すり出せ。

三人「承知しました。

牛松等は、蘭之進を庭に引すりおろせば

重太「サア悪玉。かう縛られちやア仕方あるめへ。成ほど私が吉五郎で御座エますと。言つて仕

まへ。

蘭之「重兵衛殿とやら。重太殿とやら。何と左様に云はれても。此身に取て。更に覺の無い事ゆゑ。

別に陳する仔細も御座らぬ。見舞に参つた私をば。手込にするとは餘りの無體。詰る所が卿がた

の人違へ。彼是とは申さぬ程に。早く此繩解いて下され。

重太「いくらとほけても。そりやア駄目だ。汝を見知つた蛇の道鬼兵衛。今じやア北の御番所に。

幅を利せる親分株。彼奴に渡して締させ様か。

蘭之「ムッ。

重太「それが否なら今此で。重太誠に濟まねエが。勘辨して内濟に仕てくれいと。素直にぬかせ。余

だつて罪を造るなア嫌エの男だ。話によつたら丁見してやらア。

牛松「へエ。それじやア此奴が噂に聞いた。悪玉吉五郎かね。

六之「吉五郎なら。其の昔し神奈川で。見た事のある奴だ。

兵太「どれ我等が見てやらう。

燈燭を點して、蘭之進の顔を見て

牛松「成ほど親方。吉五郎に違エは御座エません。

重太「サア是でも汝。しらア切るか。エ、なんで返詞を仕ねエのだ。

蘭之進、默然として答へざれば。重太は手に持たる烟管を拾上げて

「是でも烏奴吐さねエか。

續けさまに打擲すれども。蘭之進は苦痛を忍びて、猶も返答せず。

牛松「いけつてエ奴だなア。エ、親方。天秤棒で締上げやうか。

重太「イヤ。此奴ア原が十九年の長牢もの。札付の悪黨だ。力責めじやア言ふ事ア聞ねエよ。

……さうだ。此奴が家にやア。たしか娘が居る筈だ。六や。汝此奴の家を知てるなア。今ツか

ら兵太と二人で押込で。其娘をふん縛り。人質につれて来い。

六之「よう御座エます。笹の雪の手前で。禮部蘭之進と云ふ表札を。掛けた家で御座エますよ。」

重太「ム、さうだ。其禮部蘭之進の家だ。  
六之助、兵太は、出掛んとすると。同時に奥より娘のお榮は、駈来りて

お榮「ヤア待ておくれよ。  
兩人とも止まれば、重太はお榮を睨め付て

重太「汝なんぞ此へ出て来やがつたイ。

お榮「お父さん。お前まだ其悪事が止ま無いねエ。私が柳橋へ身を賣つたも。弟の五郎吉が。年端も

ゆかいで奉公するも。何故じやお思ひか。お前が良ない事を仕て。其尻が割れたので。難儀を  
救ふ爲であつたで御座んせう。夫に其禮部君。たとひ原が悪玉であつた所が。親の敵と云ふじや

ア無し。貴さいなんで何に仕なさんすエ。殊には其お嬢さんには。少し私も義理ある中……  
重太「エ、喧ましい。汝が知つた事じやア無エワ。リこんで居ろい。

お榮「イ、エ引込で居られないよ。現在親の悪事をするのを。見て居るのは不孝と云ふもの。お前だ

ツて好年をして。酒のみ思ひはすき。言はう様ない其身もち。今にもお手が入つたら。どう仕

なさんす見か。お前は平氣で御座んしても。跡に残つた私や弟。兩人が心の悲しみは。どんな  
であらうと。お思ひか。少しは推量したがよい。モシ御父さん。後生だから。此通り手を合せて  
拜むから。其お方を許して遣つて。思ひ止つて下さりませ。

重太に縋り、涙を流して諫むれば、重太は立腹して

重太「又しても。親の身持の棚御し。べちやくちやと儂舌ない……汝の様な不孝な奴は。子とは

思はねエ。たつた今出てうせやがれ。

怒れる儘に、足蹴にする。蹴られてお榮は庭に落ち、起上りて

お榮「出て往けと云はずとも。出てゆくが。御父さん。まう是切り此世では逢はないよ。

重太「エ、勝手に仕やがれ。

六之助兵太等が慰むるを聞かず、お榮は障る手を突退て、吃相かへて駈出し、往來に出て氣を  
替へ、根岸の方へぞ赴きたる。六之助兵太は氣を揉みて

六之「お榮さんが飛出したが。ひよつと間違エでもあつた日にやア。それこそ大變。

兵太「跡を追掛け御連れ申して參エりませうか。

重太は、鐵火箸を火鉢に突込ながら

あはれ浮世

重太「ナンノ。大丈夫だよ。活として飛出すなア。お袋譲りて彼奴の癖だ。打ッちやツて置ねエ。あのまんまで柳橋にきつと返エるよ。」

172.

牛松「さうでせうかね。」

重太「案じる事アありやア仕ねエ。夫よりやア汝等ア根岸へ往て。言付通り早く仕て来い。六之、牛松「承知しました。」

兩人とも身拵を爲し、六之助は拳銃を懐中して、兵太と共に、片折戸の外に出で六之「ドレ一仕事。」

兩人「仕て来やうか。」

根岸の方へ走りゆく。重太は焼火箸を取出し、蘭之進の側に來りて

重太「サア吉五郎。汝どうしても返答しなけりや。此焼火箸をおつ附て。痛い目させて言はせるぞ。サア言はねエか。エ、吐さねエか。」

焼火箸を眼の前に突附て、威せども。蘭之進は、眼を閉ぢて黙然たり。牛松は傍より牛松「親方。マアお待ちなせエ。……コウ吉五郎兄イ。いや禮部蘭之進さん。卿さう黙つて居た所

が。重太親方や我等が。見知人になつて。鬼兵衛の手に渡した日にやア。あの意地悪の鬼兵衛だ

もの。迎もたどじやア通さねエぜ。夫よりやア親方の云ふ通り。直素直にさうと名乗つて。話を附けなすツちやアどうだへ。先きもお榮さんの言つた様に。何も是が親の敵と云ふじやア無し。互に笑つて。話の出来る事だらうぜ。

蘭之「其御親切は忝いが。併し私は何と言はれても。悪玉吉五郎と云ふ者では無い。よし又私が。その吉五郎と仕た所で。重太殿は。どう仕やうと云はつしやるのか。」

重太「どう仕やうと云つて。外に望はありやア仕ねエが。金千兩。耳を揃へてくれいと云ふのだ。蘭之進は、是を聞き、少し考へて

蘭之「私は其の吉五郎では無いが。世間の外聞。憚らねば成らぬ身分。望の千兩。いかにも進ぜやう。重太「ナニ。千兩の金。きつとくれるか。」

蘭之「何にもきつと進ぜるが。有さうで無いものは金子じゃ。唯今と云つては手許に無いが。私を返して下さるなら。今月の晦日までに。相違なく持参しやう。」

173.

重太「成ほど。大金の千兩。右から左にやア有るめエが。晦日までにア相違ア無エか。蘭之「男の一言。嘘は吐かぬ。」

重太「ム、立派な詞だ誓文懸た上からは。違へは決してあるめエが。念の爲だ。金千兩。右之通。慥

あはれ浮世

にお預り申候。常月晦日には。急度御渡可申候。禮部蘭之進。三好屋重兵衛殿。と云ふ證文書で印判するて。此で渡して貰はうか。

蘭之「承知いたしました。何にも其證文。こゝで書て渡さうが。かう縛られては筆がもてぬワ。重太「さう話が極りやア。繩は直に解てやるわい。

蘭之進の繩を解きに掛れば

牛松「親方。紙一枚の證文で。人質も何にも取らずに。尊公安心が出来ますかい。

重太「出来なくッてよ。先だッて立派な男だ。首と釣替の印形を押からにやア。人質なんぞが入るものか。悪黨同士の取遣りやア。こんなもんだぜ。

繩を解いて

「サア上へあがんねエ。

蘭之進を壁の上に座らせ、硯箱を前へ出せば。蘭之進は、何にも言はず、墨すり流し、筆を取りて、證文を書懸る

此の少し前より、蛇の道鬼兵衛は九平治を案内となし。捕手の手先七人を引つれて出来り。家の様子を立聞して

九平「ハイ御免なさいまし。親方ア御家で御座いますか。

牛松「エ、家でエすが。誰殿でエすね。

鬼兵「御用だ。

聲掛ながら亂入す。家にて御用と云ふ聲を聞き、重太は直に行燈を仆して、明を滅し、牛松も共に尻を端折り、抗拒の支度をなす。蘭之進は、竹格子の中窓際に身をよせて立つ。

鬼兵衛等は、重太、牛松、蘭之進に組付くを、蘭之進は振ほどき、竹格子を破りて、中窓より外へ飛出す、重太、牛松は多勢に敵し難くして、遂に組伏せらる。

(道具廻ル)

(二) 根岸禮部住居 (夜中)

母屋を少し離れたる、廊下續きの放れ座敷、風流なる一間は、是れ禮部蘭之進が根岸の住宅の奥にて、娘お節が居間とは知られたり。お節は燈の下にて、鞠子金之丞と相對して、眼に涙をたよへて。

お節「金之丞様。それでは貴君は事によつたら。お命する思召して。御座りまするか。

あはれ浮世

金之「サア今も卿に話した通り。血判まで仕た同志の中。私の説を一同が。聞かぬと言ッて今更に。變替するのは武士の恥。

お節「平素からして貴君のお氣象。その思召は尤なれど。無理に死なないでよい事なら。金之「勿論々々。大死いたすが。本意と云ふでは固より無いが。此世の中の事を擧げ。夫を達する望の上は。場合によつては一命を。棄るは兼ての心の覺悟。

お節「さうとは知らず兼てより。言交した二人が中。今夜は是非とも逢度と。御書なされた貴君のお文。

(此時、隣家にて稽古の、常磐津節の淨瑠璃聞ゆる)

淨「逢はでどうしてかうしてと。煙草引よせ煮らする。胸の思ひは日に千度。

金之「あの淨瑠璃は無間の鐘。その梅が枝とは事替り。お前は立派な禮部の娘御。私も源太と云ふ程の勇士では無けれど。殊によつたら明日にも。出陣せねば成らぬ身の上。今夜ばかりが戀路の名残り。顔を見せたが好では無いか。

淨「我を待つかの疊算。ちやうどよい首尾幸ひと。すつと通れば梅か枝は。こたつにとんと身をそむけ。烟くらべん淺間山と、そらさぬ顔でふくきせる。

お節「エ、淨瑠璃どころじや無いわいのウ。若も貴君のお身外に。ひよんな事でもあつたなら。私やどう仕ませうぞいのウ。

淨「わしや悲しいと目にもろき。涙ぞ戀のならばしなり。

金之「今も今とて云ふ通り。お前は蘭之進殿の一人娘。私が死たら其跡で。聲を取なり嫁にゆくなり。親御の心に従ふて。身を堅むるが其身の孝行。

お節「そりや情ない。金之丞様。ことしの春の啼合せ。初鶯の聞初に。春告鳥が取持て。言交した二人が中。恥かしい事ながら。末は夫婦と楽しんで。まだ十六の初戀に。

淨「二十八十六で文つけられて。二九の十八でつい其心。四五二十なら。一期に一度。わしや帶とかぬ。

「あれ聞かしやんせ。君傾城でもあの通り。それに二人の夫を持つとは。そりや御道欲で御座りまする。

淨「わしや帶とかぬ。廿なら四五の二十なら。一期に一度。わしや帶とかぬ。返らぬ昔し戀忍ぶ。金之「それ程迄に私をば。慕ふてくれるは嬉しいが。夫ではお前。私が死んだと聞いたなら。どう仕やうと云ふのかへ。

お節「サア。親に不孝の罪科で。」

淨「此世は蛭に責められ。未來は永く。無間地獄の業を受くとも。だんないく。大事ない。」

「海川へ身を捨てよ。死ぬる覺悟で御座りまする。」

金之「そりや短氣と云ふものじや。今がいま。きつと出陣するでは無く。良しや事の起らばとて。弓矢神の御加護にて。武運盡きざる其時は。」

お節「その時は。」

金之「めでたう二人が。夫婦にならう。」

淨「無事で勤めやらばやと。立を引留め。……せめて暫しが中なりと。わしにたんのふさせた

がよい。殊に又。お前の耳に。入れねばならぬ事がある。まア下に居て下さんせ。

此時寺の時の鐘の音聞ゆれば

「南無三もはや四ツの鐘。同志の者の密合ふ刻限。」

お節「それではどうでも。」

淨「名残をしげに梅ヶ枝も。嬉しいあなたのお詞で。夫婦のかためはたつた今。」

「たとひ此身は別るととも。」

淨「心は夫の影身に添ひ。出陣の御供と。」

お節は。梅が枝と題したる名香の包を金之丞に與へて

淨「互に無事と目で知らせ。うなづく度にもちる梅の。匂ひは袖にのこりけり。」

(伊豫籠ヲ下ス 道具廻ル)

(三) 同 庭中 (夜中)

祇部が住居の、玄關と門の間に、一面に廣き庭にて、常盤木の植木の間に、一樹の櫻は、今を盛りと咲亂れたり。春の夜の朧月を便りにて、重太が子分のぶらり六之助は酒に酔ひながらも。片手に拳銃を携へて、腰押兵太と俱に、庭中に忍び入りて。

兵太「エ、六兄イ。あすこに明りの見ゆるのが。住居らしいね。」

六之「ム、さうだ。あすこが住居で。引ッ滾はうと云ふ。娘の居所に相違ねエワ。」

兵太「これさ。靜に仕ねエな。聞えるぜ。」

六之「ナニ聞えるものか。聞えつつて。構やア仕ねエよ。」

兵太「構はねエツて。知れたら。事こわしだね。」

あはれ淨世

六之「そんな氣遣があるものか。主人は留守だし。安心なものだよ。」

兵太「酔つて居ちやア。困るねエ。」

六之「酔つて居ても慥なものさ。サア兵太。忍び込まう。」

住居を目掛けて行く所に。立樹の蔭よりお榮あらはれ出で。兩人の前に立塞りて

お榮「卿等は。六さんに兵さんじやア無いか。」

兵太「ヤアお前は。」

六之「お榮さん。」

打愕く。お榮は月明にすかし見て、六之助が拳銃を携へたるに心付き、わざと其傍にひたと寄りて

お榮「夜々中。なにしに此へ來なすつたの。」

六之「お榮さん。大きな聲を仕ちやア可ないよ。私どもは親方の言附で。來たものだから。」

お榮「フウ何と云ふ言附で。」

兵太「姉御。御前さん先き聞いて居て。知てるじやア無エか。邪魔しちやア困りますぜ。」

お榮「なんにも邪魔は仕ないが。此家のお嬢さんを浚つて往くのは。後生だから止ておくれな。」

六之「止と云つても親方の言附だもの。さう云ふ理にやアいかねエよ。」

お榮「それじやア。お嬢さんの代りに。私をつれておいでな。」

兵太「常談いつちやア可ませんぜ。遅くなつちやア大變だから。其所を御退なせエな。」

お榮「イ、エどか無いよ。是非とも引ッ浚はうと云ふならば。私を殺した其上で。どうともお仕な。」

六之「そんな事が出来るものかね。」

お榮「出来なくつて。サア六さん。私を御殺しな。私が生て居る中は。卿等に仕事はさせ無いよ。ぐつと六之助に身體を搦よせて

サアお殺し。殺しておくれ。」

六之助を困らせながら。山斷を見済して。拳銃を奪ひ取り、六之助があわてる間に、ひらりと

飛退き、二三間離れて向ひ合ひ、拳銃を二人に差付れば

兵太「ア、お榮さん。お止なせエ。」

兩人「あぶねエよく。」

お榮「危ないのは知つて居るよ。拳銃だもの。當れば死なアね。」

六之「だから。早く此方へおくんせエな。」

182.

お榮「あけられ無いよ。卿等よく御聞よ。言はう様ない父さんの悪事。それに卿等が。少しも意見は云はないで。其悪事の提灯もち。私があれば言つたから。もしや止すかと思ひの外。矢ッ張遣つて来たのだねエ。さうだらうと案じたゆゑ。先へ廻つて待つて居たよ。

六之「それじゃアお前は。何處までも。

兵太「吉五郎の肩を持つのだね。

お榮「吉五郎だか誰だか知らぬが。此の御家のお嬢さんは。私が義理ある大事なお人。女でこそあれ月のやのお榮だよ。目の黒い中はお前等の。自由にはさせぬ積り。さア一寸でも其所を踏出したら。此拳銃を打ち放すよ。

六之「ア、。そりやア可ないよ。打ち放されて堪るものか。

お榮「だから。止て御歸りと云ふのだね。

兵太「デモお前さん。素手で歸エつちやア親方に申分が立たねエから。

お榮「お轉婆娘のお榮が居て。仕事に邪魔を仕ましたと。御父さんに御言ひなねエ。

六之「それじゃアお前さん。親力がまた腹立で。

お榮「いよ。幾らでも腹を御立たせな。何でも此は通さぬから。直に御歸りな。

183.

兵太「歸へれと云つても是まよじやア。

お榮「歸へれずば私をお殺し。卿等を殺すなり。殺されなりすりや私も本望。命はもとより突出して。覺悟を極めて掛つた仕事。

六之「さう度胸を据られちやア。女だつて相手になれねエ。歸エれと云ふなら。

兵太「歸エりますが。

一足つゝ後退りをすれば。お榮はちりちりと前へ進みて

お榮「サアお歸り。

兩人「歸エりますく。

お榮「サア早くお歸り。く。

庭の中程まで押戻したるが

六之「歸エりますから。お榮さん。

兵太「決して打つちやア可ませんぜ。

身を轉じて走り、門外に逃出す。

お榮は、六之助兵太が門外に出たるを見届て、再びちりちりと後退りして、原の所に復り、どた

あはれ浮世



りと地上に座り、ホッと溜息を吐き、拳銃を傍に置き、胸なでおろして  
お榮「マアよかつた。是でお節様のお身の上。お怪我が無くて。私の心も届きました。是と云ふの  
も日頃から。信心して居る。神佛さまの全く御蔭。あり難う存じまする。  
合掌して。遠拜なし

とは云ふものよ。羨しいは此家の娘のお節どの。あれ程までに。金之丞様に思はれて。夫に引  
替へ私は又。

嫉妬の萌を起して、奥の住居を見遣りたるが、直に心を取直して

「ア、否々。そんなと思ふまい。世間の女であるならば。情氣嫉妬の妬みから。御兩人様のよい中  
を。割てどうして斯うしてと。否な心を出す筈を。わたしや自分の憤みで。これこの様に氣を揉  
んで。お節様の御身の上。御無事を願ふも何のため。金之丞様を思ふゆゑ。さうとは御存知ある  
まいが。もし金之丞様。せめて私か心の中。可愛想じや不便じやと。少しは思ふて下さりませ。  
泣伏したるが又氣を取直して  
ア、こんな愚癡を思はずに。どれ歸ると仕ませうか。  
二足三足歸り掛て

「イヤ〜。あの六之助に兵太の二人。また出直して来やうも知れぬ。お節様の御難儀を。お救ひ  
申す上からは。逆もの事に。

思ひ直して止まる。此時住居の方にては人聲高く  
蘭之「これ女ども。お節をしかと番いたせ。それなる曲者。待てと云へば待ちおらう。

お榮は此聲に驚きて、拳銃を持ち、植込の陰に隠るよ。  
奥よりは鞠子金之丞次いて禮部蘭之進走り出て呼止め、對ひ合に成て

金之「待てと云ふのは。某で御座るか。  
蘭之「何にも。何故あつて夜中をも憚らず。案内も無く推参いたし。奥深くへは忍んだか。エ、此  
な盗賊めが。

金之「ヤア盗賊とは無禮至極。不肖なれども旗本の末に列なる。鞠子金之丞だぞ。  
蘭之「ナニ。鞠子金之丞とな。

聞たる事のある姓名なれば、不審を成して  
シテ其金之丞殿が。推参ありしは。

金之「面目なき事ながら。盗賊の汚名。附られては包むに由なし。實は御自分の御息女お節殿へ。別  
あはれ淨世

れを告げんす其爲に。夜中をも憚らず。推参いたせし疎忽の段は。御勘辨下されよ。  
蘭之「何故あつて娘に逢ひ。別れをば告られたな。  
金之「御尋あつては是非に及ばぬ。不日に國遠いたすに由つて。  
蘭之「誰が面會差許した。

金之「アイヤ。御息女とは當春以來。御懇意いたせし夫故に。  
蘭之「だまらッせへ。扱は推量に違はず。我大切なる娘をば。色情を以て欺し賺し。操を破らせ慰

まんと。心を寄る花盗賊よな。身にも世にも替がたき。秘藏の娘。旗本なりと聞く時は。猶更以

て心憎し。母親ばかりか其子まで。母子二人が旗本のるに。盛りを散らして成るべきや。財寶衣

類を盗むより。猶罪深き心の盗み。盗賊なりと呼たるは。よも無禮ではあるまいがなア。  
金之「其疑ひはさる事ながら。某と御息女は。歌道の學びに。同じ人をば師とたのみ。申さば互

に弟子兄弟。御懇意には致せども。色にほだされ。御息女の。操を汚した振舞は。弓矢の神も照

覽あれ。今日までも會て御座らぬ。  
精神を顯はして陳述すれば。蘭之進漸々疑を解きて

蘭之「其疑ひある上は。其儀は左様と致し置き。噂に聞ゆる當時有志の金之承殿。國遠すると云は

るよが。夫以て合點がゆかぬ。

金之「其國遠と申したも。誠は仔細のある事なれど。御自分の疑ひ相釋す爲申さんが。敵味方と相

成るとも。事發する夫迄は。他言せぬとの御誓詞を。承はつた其上で。

蘭之「天道他言は致すまい。

金之「然らば事實を申さんが。長防再度の御征伐。甚だ以て御不爲と。存じ入ッて居るなれば。他

まで御止め申上げ。御聞入なき其時は。

蘭之「御聞入なき其時は。

金之「快よく御下知を仰ぎ。自滅を致す覺悟で御座る。

蘭之「すりや夫故に娘か方へ。

金之「今世の假乞。いたしに参つた理で御座る。

蘭之「言はれな金之承殿。左ほど覺悟を極めし武士が。契りも結ばぬ女に引かされ。別を告げに参

らうや。切羽詰つて即座の詞。それを誠に引受る。蘭之進と思はつしやるか。アハ、ハ。併し

誓を立たる上からは。他言は固より致し申さぬ。早く此を立ち退かれい。

金之「併し御息女には。毛頭以て過ちなければ。

あはれ浮世

聞之「エ、入らざる詞。我に取つては大事な娘。御自分ごとき怪しき武士には。金輪奈落逢はせ申さぬ。今夜の所は枉て勘辯いたすなれど。向後推参ある時は。用捨は急度いたさぬぞ。言捨て奥に入る。金之丞は嘆息して

金之「アツ是で此身の。望の綱も切果た。まう今生に。樂みとは更になし。いで此上は我身の辰期。失望の餘り、討死と決心して、門外に出る。お榮も、續いて植込の陰より出でよ。お榮「金之丞様。望の綱は。私じやとても切果ました。

(幕)

第六篇 (慶應元年卯三月二十四日の事)

(一) 四谷香龍寺境内 (午後)

香龍寺は、有志の會合所なり、事急に起りて、順序全く顛倒し、小濱荒三郎、山岡熊藏、松浦十兵衛は頻りに防戦の差圖を成し、報告に由りて集つたる甲乙等八人の武士は、銘々思ひ思ひの装束にて身を固め、或は小銃の彈機に油を注ぎ、或は槍の穂光を檢して、得物の用意に忙はしく庭上に薦筵を所々に敷き、辨當箱、彈藥入れなど、そここよに取散し、隅の方には、土釜を築き、俄に兵糧を炊く用意を成し、人夫等四人(この中一人は蛇の道鬼兵衛にて、人夫に姿を扮して、入込みたるなり)水を運び、土俵を持込みなどして、事の體雜沓を極めたり。

荒三「山岡。どうだ。着到は調べて居るかね。  
熊藏「左様。同志の着到は表門で。高木君が引受て。調べて居るよ。  
十兵「さうか。所で今朝ツから今までに。凡そどれほど集つたらう。  
荒三「午辨當前に。七十人足らず集つたと。云ふ事だから。まう餘程に成つたらう。

あはれ淨世

